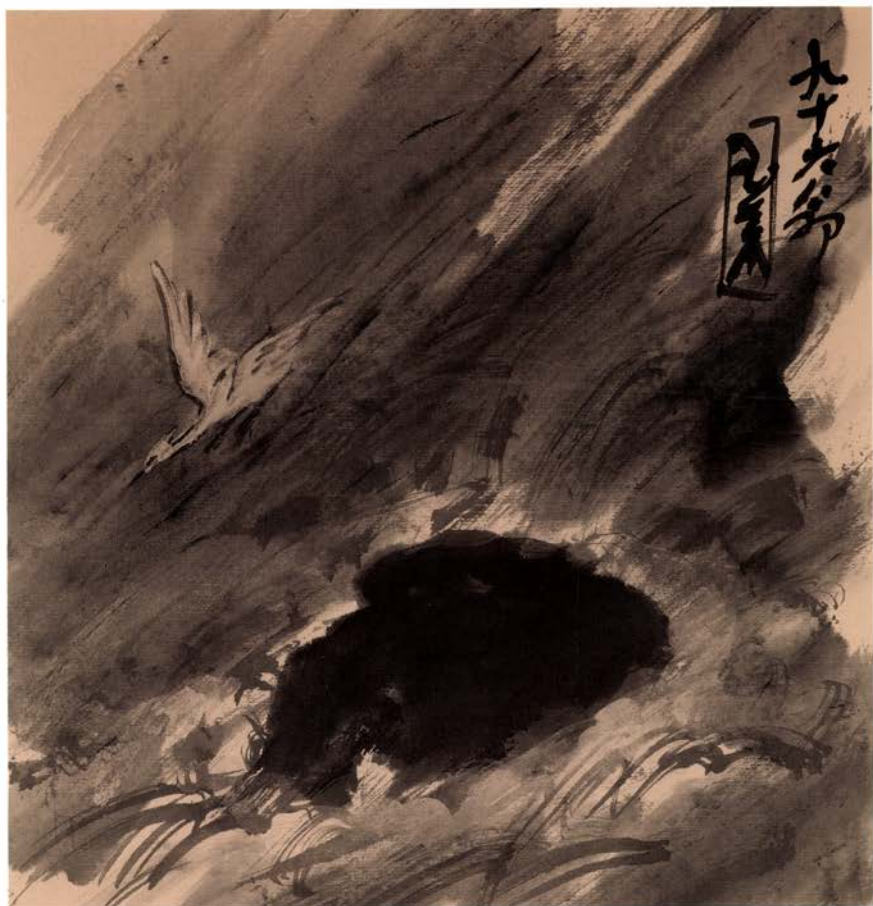


川柳塔

創刊大正十三年 通卷八六六号



日川協加盟

No. 866

七月号

■川柳文芸のバイブル

川柳入門事典

全日本川柳協会・編

葉文館出版・発行

四六判ソフトカバー／三〇〇頁
定価二〇〇〇円(送料三四〇円)

本書の内容

第一章 川柳の歴史と現代の川柳

川柳の歴史・現代の川柳・作句の実際

第二章 川柳鑑賞の手引き

古川柳・近代川柳・現代川柳・ジュニアから二十一世紀へ

第三章 川柳作句法

雑詠・題詠・時事吟・慶弔吟の作り方
推敲と添削・川柳名言集

◇お申込みは左記へ

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話・FAX(06) 6352-2210
郵便振替 00970-9-3575

葉文館出版

川柳カタカナ語辞典

監修 橘高 薫風
編 田中 正坊

社団法人 全日本川柳協会推薦図書

B6判変型・138ページ・ビニール装 定価 2000円(送料別)
カタカナ語642語と語義・例句1600句を収録した川柳作家必携書
お申込みは発行所または田中正坊(豊中市島江町1-3-5-801)へ

路郎忌に思う

橘高 薫風

今年も路郎忌が巡つて来た。七夕の夜にこの世を去られるとはと、この日が来ると先生のロマンチストぶりに毎年感銘を深くするのである。

こう書き出すと、また路郎のことかと思ふ仲間もいるかも知れない。けれど私は生きている限り路郎路郎と言いつけるであらう。

五月十五日に冷泉家展を見た。葵祭と重なり、翌日が最終日というので、その混雑ぶりは大変なものだった。どうしてこんなに人が集まるのか。それは八百年以上も前に生きて和歌に徹した藤原俊成、定家父子の言霊の力と、それを伝え続けた家人の尽力による。路郎死後たかだか三十年、その言霊の光を絶え絶えに出来ませうか。

川柳塔の仲間なら誰も知っている路郎語録は後世に語り継ぐべき価値のある教えて、どんな言葉よりも秀れている。

私は川柳を人間陶冶の詩であるといっている。人間へ締め木をあてて絞ると、いろんな悪汗が流れ出て、そのあとには朗らかな脱俗した人間が残るのではないかと思う。その締め木の役を川柳が果してくれているように思えてならない。句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸であるからである。後略これは川柳に魅入られ想像に絶する苦闘をした人の魂である。

空海が密教を開くのにどれだけの修業を成したか、利休が茶を極めるに如何に肚を据え胆力を養ったか。

川柳ものたうちまわる鍛練なくては、立派な業績は残せない。

例えば中興の祖と言われる剣花坊がそうだ。鶴彬を守り通した井上信子も女流ながら見上げた人物と言える。その二人を両親に持つ大石鶴子女史が、去る五月二十一日死去され、二十三日千葉市常盤園で告別式が執り行われた。

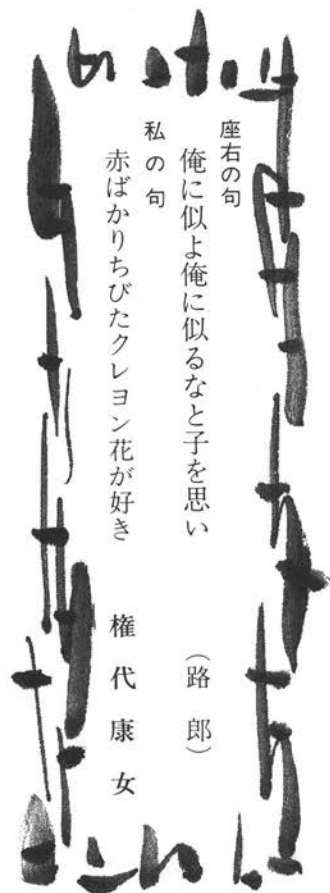
剣花坊は明治時代、雑誌「川柳」に拠り、大正に時代が移れば「大正川柳」と、更に昭和には「川柳人」と改題して社会

化に努めた。それは信子、鶴子に引き継がれ、今年の新春号で八百号（川柳人）に至ったのである。女史はそれを機に後を佐藤岳俊氏に託し、身辺整理に取りかかれた矢先の脳出血であった。丸四日の苦悶の末、五日目の未明にこの世を去られる。四日間は阿修羅の形相であったという。整理に心を残すものがあつたのだらう。ご遺族のお話を聞きながら、私は偉丈夫とは男だけのものではない氣にさせられた。

田辺聖子先生の『道頓堀の雨に別れて以来なり』にあるように、五番目の末娘として、あの破れ鐘和尚に殊の外愛された乙女の変身ぶりはご立派であつた。

剣花坊五十回忌や鶴子米寿の祝賀に出た私は、このたびもお見送りをして、剣花坊と路郎との友誼を思い冥福を祈つた。鶴子女史は毀譽褒貶には恬淡としておられた。行年九十一歳、法名なく無宗教の信念を通し、清楚反骨の潔いお人柄であつた。

柩の遠ざかるとき私の頭に浮かんだのは、「紅旗征戎非吾事」（紅旗征戎が事にあらず）の定家の一語であつた。



川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 路郎忌に思う……………	橘高薫風……………(1)
追想再び 堂島界限……………	黒川紫香……………(2)
川柳塔(同人吟)……………	橘高薫風選……………(4)
佳句感想……………	橘高薫風……………(52)
自選集……………	東野大八……………(56)
川柳の群像 大石鶴子……………	河内天笑選……………(62)
誹風柳多留二四篇研究 7……………	橘高薫風……………(87)
水煙抄……………	橘高薫風……………(87)
大空のころろ……………(102)	福本英子……………(60)
秀句鑑賞「同人吟」……………	舟木与根一……………(91)
水煙抄……………	

追想再び

堂島界限

黒川 紫 香



JR東西線が開通したので大阪の北が大幅に変わったし、毎日新聞社の跡地に関西一の大書店ジュンク堂が店を開いたと言うので尼崎から東西線に乗った。駅を出るとすぐ電車は地下に潜り込み六ツ目の駅が(北新地)ここ降りたものの地下では東西南北方向が判らない。掲示板を見、尋ねたりしてやっと地上に出たが周囲はビルばかり。長い間北方面に勤めて居た私でも方角は判らない。様変わりした地下からやっと地上へ出て、大きなビルの間を歩きまわって、毎日新聞の跡地に來るとここも大きなビル。この一―三階までがジュンク堂で近代化された書棚の本と試し読みできる机と椅子があった。

それは兎も角として、幼い頃、妹とよく預けられた伯母の家がこの地にあって、向かいに薬師堂が建ち、ここで遊んだ懐かしい思い出の処なので探した。

あったあった、そのビルに副う様にして、

渺湖抄	八木千代選	(88)
茴香の花	西出楓楽選	(92)
「乾杯」	酒井一壺選	(94)
一路集「スプーン」	植田一京選	(94)
「泳ぐ」	前たもつ選	(95)
初歩教室「ときどき」	吐田公一	(96)
■句画集紹介『愛たしかな』	舟木与根一	(98)
さようならもうこれっきりさようなら	高田美代子	(99)
六月本社句会		(100)
各地柳壇（佳句地十選／小白金房子）		(104)
柳界展望		(119)
七月各地句会案内		(147)
■編集後記	みつ子・楓楽	(148)

座右の句
私の句

人生はいろいろ七味唐がらし
打水をしたら霊柩車が通る

（鬼遊）
谷口 義

東南に近代化された小じんまりしたお堂がありお薬師さんだ。その前に小さいながらも池がつくられていて都会のオアシスみたいだ。厄介になった伯母は早く夫を亡くし、ここで芸妓の置屋をしていた。なかなかしつかり者の女将だった。私の家が逼塞して両親が共働きにでたので、五歳になった私と二歳の妹をこへよく預けた。

その伯母の家に芸妓と半玉が居た。半玉さんは桃千代と言うて可愛らしい目のパツチリした妓で、よく私等二人と遊んでくれた。或る時、遊びが過ぎてはたえる（戯れる）拍子に、私の手の指が桃千代さんの目に当り泣き出したので、伯母が慌てて医者へ連れていった。後で「桃ちゃんには千両の瞳をしていて大事な妓やから無茶せん」とこつぴどく叱られた。

その頃はまだ街灯はガス灯で、陽が落ちかかる若いアン（兄）ちゃんが向こう鉢巻きで梯子を担ぎ種火を付けに回っていた。それを見た薬師堂の前で遊んでいた子供たちは、「もう晩ごはんや」と言つて散った。その頃湯屋から芸妓さん達がレンガを敷いた裏通りをカランコロンと音をたてて戻つて来た。

私と妹は暮れ行く薬師堂の前で手をつないで迎える母を待った。

注 堂島の謂われは昔この地が小島で僧行基が安全の為薬師堂を建てたのでついたさうである。



橘 高 薫 風 選

鳥取県 新家 完 司

にんげんの傘みすばらし花の雨

花の山わたし以外は目障りな

熱い珈琲下さる妻という女

錢ばかり追うなと嗤う鯉のぼり

テレビゲーム睨みつけてる武者職

無念無想などは不可能ホーホケキョ

和歌山市 木 本 朱 夏

海寂れ番屋が寂れ鳥曇

猫の子を淋しがらせる笛を吹く

虚空より生まれて蝶のつるむなり

鬼の手がのびてきそうな五月闇

逝く春の水に睡魔のある如し

陽炎でとけるわたしの現在地

八尾市 長谷川 春 蘭

惜春や老いは自然と知りつつも

草はまた萌えて別れたままの人

血圧をふつと気にして旅の雨

向き合えばこころ休まる人が欲し

引き止める言葉がひよいと出てあわて

生きてまた一つの節目植木市

今治市 故矢 野 佳 雲

今日も生きられました飲んで寝まする

別鍋にした湯豆腐を出してくれ

地蔵の後ろで聞いていたのは私

山頭火の想い万緑の山歩く

たしか何かいる目をこらす木陰闇

融通むげ勝手なことを考える

堺市 桑原道夫

世紀末三角の雪舞いやまぬ
出張の朝のバナナを食べている
編棒で猫を呼んでる令夫人
道楽の途中で空気睨みおり
屋上の金魚売場へ逃げてきた
銀河系宇宙の中の薪能

鳥取県 土橋 螢

涙流してよろこびを汲みあげる
虚と実が水平線の上と下
一生懸命咲いている草の花
万朶の桜死ぬことを見つけたり
源氏蛸も平家蛸もやがて死ぬ
三人の子にひとつずつ芽があった

富田林市 藤田 泰子

覚悟して渡った橋だ戻らない
海行きのバスを待ってる冬の旅
夢だったから再会はもうしない
習わなくても愛の賛歌を弾いている
春風が来て風穴を開けてゆく
みな捨てて孫から習うABC

宝塚市 嵯峨根 保子

石ころがあれば遊べた昔の子

肩たたく人もストレス溜めている
佃煮にするほど雑草が伸びている
諸白もろしろと言う地酒あり城下町
裏戸うらどほとほと叩く民話を読んでやる
精進もパエリアもある三世代

和歌山市 福井 桂香

木木芽吹く万歳の形して
行く春に報恩抄を読みました
砂山が崩れる青いトレンチコート
別姓になるまでもっと仲よしに
やって来た一年二組という名札
判決が出るまで待っている生け簀

島根県 松本文子

蛇とりは息子に農学博士どの
ひとりのワインこんな筈ではなかったに
パンのそばでわたしは銀の飯を盛る
ぐっすりと眠って人に嫌われる
荒波に負けるな佐渡よわたくしよ
スタミナが途切れる頃に来る手紙

竹原市 岩本 笑子

壁はもう終ったんだよかたつむり
ネジを巻かれて男酔うている
けもの道女も生まれ変りたし

空の彩して矢車草は孤独なり
自己主張馬の足にも向き不向き
一回ぐらい夫と指切りしてみよう

和歌山市 川上富湖

一勝五敗だったと母の出産記

弟が生まれて母はよく笑う

児を包むための一反風呂敷か

母はひとりで水子地蔵に手を合わす

妹の歯が生え母の歯が抜ける

橋の下で拾ってきたという姉妹

大阪市 板東倫子

飽食の果ての原点は白ごはん

ツツコミとボケで東と西の知事

泣きながら客笑わせていた枝雀

見慣れたら茶髪娘もチャーミング

六無齋が惰眠貪るGW

母さんが犠牲フライを打ってくれ

西宮市 秋元てる

田舎者を時には武器にして生きる

叱られた姉は私を直ぐ叱る

久し振り母子で二十日大根時く

若葉冷え母へ薄手のベスト選る

手応えが戻り見舞いの口軽い

泣き方も女らしくはもう古い

恐山 魚住めない湖青し

どれほどの歲月風雨石も枯れ

賽の川原 地蔵菩薩に迎えられ

血の池地獄困うて廻る風ぐるま

沈黙の意志つらぬいて石冷ゆる

祈るもの何もないらしさぎめきて

富山市 舟渡杏花

残照に晒すしのびぬ夫婦枕

被害者がすぐ忘られてゆくニュース

奉仕にさえも性格がモロに出る

サラブレッド自分に付いた値を知らず

恩の数かぞえて眠るあれ以来

台本の通りに読んで叱られる

寝屋川市 森茜

針含む言葉にあつた真実よ

モンローは小首かしげて咲いてるよ

家庭訪問ばあちゃん聞き耳をたてる

聖書売りベル控えめに押してはる

きつね顔して一族の祭好き

娘よりやさしい孫が怒っている

島根県 伊藤寿美

万策つきて亡父が弾いてた手風琴

順末をじっと見ていたこけしの瞳

弘前市 佐治千加子

聞きたがる耳へ噂がやってくる

吾が輩は猫だと老夫は皮肉屋で

過疎を捨て過疎の便りを待っている

二歳の孫も歌う k i r o r o の未来聞く

羽曳野市 三好 専平

空っぽの頭がいつも澄んでいる

ゆっくりと書いたら下手な字も読める

酒やめてからの人生嘘がない

メダカさへ棲めない水で米作り

日本はマルとペケとの民主主義

ハイテクの映画 人類焼き尽くし

大阪市 渡部 さと美

絶景はしまなみ橋の来ない島

アジサイで遊ぶカタツムリの団地

一番の贅おにぎりと森歩く

空もよう草に残した児の帽子

鳥一羽カメクラブに包囲され

マーガレット女が今日もたくましい

西宮市 山本 義子

健康食どれも続いたことが無い

ドクダミと呼ばれる花の可憐なり

年金枠に手足おさめてカタツムリ

やせ我慢でございませんとやせ我慢

上段に構えたあとの難しさ
石ありき女人結界風渡る

寝屋川市 岸 野 あやめ

整形の美人 行儀は買えぬまま

ノッポビル造兵廠の夢のあと

これからのことを書いてく誕生日

用心をしながら申すお詫び言

風邪熱へ寝て寝てなおす老いひとり

愛憎を越えて喪の帯とぐろ巻く

鳥取県 土橋 睦子

経あげる肺活量も滞る

雨が降るゆっくり母に手紙書く

病気にはとても見えない厚化粧

篝火に写し出された春の繚乱

行楽にやさしい色の水芭蕉

月夜にはもののけになる恋ごころ

西宮市 門谷 たず子

椅子すこしずらすと本音よくきこえ

ひとり芝居のわたしを覗きにくる月よ

オルゴール切れたところから妻の乱

墓までを舗装めだかの泳ぐ川が無い

明日になれば風も止むだろ病む友よ

読経百ペンいつかほとけとひびきたや

豊中市 安藤 寿美子

かわかわかわかはたれどきを告ぐ鳥
島なめて四国を近くした橋よ
漢の委の奴の男たち太鼓打つ
けつたいな所で私が泣く映画
連休が終ったとたん目まいする
あの人の好意拡大解釈し

大阪市 榎 本 路 児

回転木馬トマトも乗せてあげましょう
デスマスクあなたの歌が生きている
小学校机に夢が彫つてある
美人です男の帽子似合つてる
いい顔に出逢う九十すぎている
百済観音その微笑みの美しさ

河内長野市 井 上 喜 醉

雑念を捨てた岬へ通り雨
孫育て親が孝行するらしい
臆病はドック行くより竹を踏み
余生には肩書よりも薬箱
退屈な散歩が探す別世界
マスコミが騒ぐと火種風にのる

岡山県 小 林 妻 子

石垣の高さを殿は信じ切る

姿見は無理を承知で笑うてる

二度童子こどもに還る物語

夕焼は真つ赤私は試される

刻まれる命非情のセイコウシヤ

朝星夜星命の丈は計られず

高知市 北 川 竹 萌

振興券地下足袋買うて八十路越ゆ

五月晴れふるさと楽し茶摘唄

らつきよう掘り真清水積んで夕の帰路

里菜園今日は五十の独活を取る

命ある限り成すべきことばかり

金も句も送らにやわたし同人だ

和歌山市 堀 畑 靖 子

相棒がいな背中が痒いの

憧れのバラのアーチのあるお家

虫がつき過ぎる女王格の薔薇

イマジネーションが貧しい色メガネ

世間体気にする母に口答え

留守がちな夫で実にありがたい

和歌山市 田 中 み ね

朝酒も許されようぞ旅の膳

百薬の長効き過ぎた二日酔

これくდასიへ読み間違えた0ひとつ

七つ違いの姉が張り合う若づくり

そこそこの暮らし平和とすべきだろ

浮気の一つ美容院を変えました

岡山県

富坂志重

一生を支えて悔いぬ木の根っこ

上流を自負して鼻が天をむく

迷う心を消した火葬場のけむり

天国まで歩けるように足きたえ

あめ玉をあそばしている私の口

消しゴムが働きすぎてやせました

出雲市

石倉英佐子

乱世の風貌しめす世界地図

千年万年の昔を語る美少女ミイラ

巻き紙の手紙にけりを付けられる

さよならは言わないことに白樺

私がわたしの人形に螺子を巻く

かるくかるく翔んでゆこうよ風媒花

和歌山市

楠見章子

気がつくとき夫の前を歩いている

朱雀門の前けいたいが笑いだす

レディーファースト婿チャールズと呼んでいる

強がりと言ってる豆腐もわたくしも

ガイドラインの前で見得きる武者人形

立派なことと言わないけれどボランティア

熊本市 永田俊子

泣きに来た古里の川も泣いている

相槌を打ってつめたい風に会う

べからずが解かれ一億総多弁

菜の花のおぼろの果てに亡母が居る

春宵一刻針を進めぬ花時計

熊本県 高野宵草

慕われる祖父だぞ惚けてなるものか

うるさかったなあと葉桜背伸びする

ナスだけ若い待合室の風

落葉降る信号待ちをなぐさめに

カタカナの野菜が気取るデパートで

熊本県 岩切康子

雑草も地球を抱いて緑の日

舍利塔へつづくつつじの美しさ

陶器市一里の道草目の保養

叱られて笑われたって好きな道

本番になれば勇気が加勢する

唐津市 久保正剣

枝豆も美人と酌めば美酒の贅

政党を選ぶ手だてが見つからず

不審船逃げろ逃げろと追う海自

歯車の役目を終えたリール竿

サミットで口説かれ安保でおどかさ

唐津市 田口虹汀

国民の日でも私は非国民

お城藤今が見頃と蛇が来る

塩送る敵が早死にしてしまい

雲の峰軒に氷の旗が出る

香も添えて浪花に届け城の藤

唐津市 仁部四郎

先代の校長を聴く保護者会

満月の夜に童話を書きはじめ

修身の時間は亀が早く着く

君が代の好き嫌いまで親に似る

その役に就けば台詞は従いてくる

唐津市 山門幸夫

子よ孫よ戦争なくて嬉しいね

古くとも国旗国歌を愛します

子供の日桜の便り釧路から(戦友の便り六十年)

北帰行故郷は祖国かシベリアか

五月晴れまほろば楽し鯉泳ぐ

唐津市 山門タミ

父息子ワンクッションに母がいる

愚痴一つこぼさず人形笑ってる

雀まで緑に染まる五月雨

眼に青葉生命托して紅葉まで

久し振り晴天だから暇がない

唐津市 井上勝視

ガイドラインばやいてるだろ兵の墓

不信心の亡母に灯明あげている

核家族どこで途切れたわらべ唄

無職と書く申告書にも慣れました

夜勤明け朝風呂の娘とすれ違う

唐津市 樋口輝夫

酒煙草やめて煩惱立ち眩み

当選の記念ダルマに髭を立て

古希祝い知らぬ顔する息子たち

爺婆の暮らしに合わぬ引出物

揚げ底の土産にもある消費税

唐津市 市丸晴翠

退職後夫軍手とよく出かけ

均等法晴れて厨に立つ男

ほっちゃれの鮭が卵に托す海

笹舟がめだか探しの旅に出る

うっかりと歩けぬ野道花芽時

唐津市 山口高明

お役所の客が減ったと嘆くママ

不良債権只の取り込み詐欺やんけ

知能犯やらない奴が馬鹿に見え

アメしょんの言葉真面目に訊いてやる

観光のルートを変えた真須美邸

唐津市 宗 水笑

松山市 丹下 美津子

繁栄の横波かぶる授業拒否

満開の桜が包む忠魂碑

ゴールデンウィーク里は孫等の遊園地

亡母の宝客膳置こか捨てようか

身をけずる監督肴のテレビ前

糖分控え目そんな料理をけなす老い

節約をライフワークにしてた亡母

もう少しゆとりが欲しい試着室

老眼になお艶めかし春の脚

短気に吞気神はバランスよく結ぶ

北九州市 梅田 宣司

今治市 野村 京子

竹馬に乗って昭和を振り返る

木偶でよし雑魚でまたよし葱坊主

頭寒足熱ふところいつも冷えている

じゃんけんの下手な男が好きになる

ゆく春は森のみどりの中とけ

かくれんぼ枯野の中は寒かった

スニーカー履いて八十路の鼻歌よ

ライトアップされて老人力光る

年金のよい汗流す菖蒲の湯

ほどほどが好きでくるぶしほどの愛

高知県 赤川 菊野

今治市 越智 一水

赤ん坊にお乳吸われた事が無い

夕桜散って畑打つもどかしさ

遍路笠皆善人の顔をして

喧嘩した夜猫抱いて月へ出る

四角にも丸にもなって幾山河

日だまりで噂を老いが先に知り

灼熱の草原風は秋のもの

ゆきずりの人に花の名教えられ

何時来ても勇気をくれる竜馬像

糸のよう降る雨京の街を恋う

松山市 宮尾 みのり

香川県 池内 かおり

極楽とんぼの振りが哀しく身についた

人間不信カラスが僕を見張ってる

生と死の間で時に正気の眼

手を握るだけなら出来るボランティア

母を呼ぶ老女の声の夜の病棟

よれよれになつて帰って来た噂

嫁という課題が解けぬ水溜まり

母さんのタフな袋に敵わない

お月様わたしが夜叉に見えますか

良い噂ばかり選ってる僕の耳

香川県 神保坊太郎

ひたすらに歩く若さを捨てながら
蔵の隅昔むかしが積んである

子沢山おいはぎのよな脱がしよつ
おみきのむ神に断酒の祈願する
明日なにか何かありそで灯を点す

香川県 川崎 ひかり

燃える種いく度落とした火消し壺
例えばの話の中にふくみ針

いい案がまだ浮かばぬかロダン像
魚捕る鵜にそっくりなお父さん
あと五キロクマ笹ウーロンハト麦茶

香川県 山地 マツエ

運命線がまだまだ希望持てと言う
逃げられて雑魚が大きな鯛になる
長い物に巻かれ余生を生きてます
ティータイム噂が走り出す茶の間
単身赴任今夜もラーメン買って来る

下関市 石川 侃流洞

職安は親切だけど職がない
振興券 米味噌醤油妻主張

タンポポの気まま土堀で花咲かす
宝くじ当ててんやわんやして見たい
死にたいと言って主治医を困らせる

柳井市 弘津柳慶

酔いが回って本音を全部さらけ出し
残り物勿体ないと折につめ

老人会次々トイレへ立ち上がり
さい銭へ願いつぶやき手を合わせ
商才にたけた舌先に踊らされ

美祿市 安平次 弘道

忙中閑 恋は別ものかも知れぬ
涙腺がゆるみ本音を言いそびれ

一人また一人味方の減る早さ
栄転の肩へ頼むと念を押し
長所などないがお嫁になら行ける

宇部市 平田 実男

身から出た錆を他人の所為にする
境界の杭は四角いほうがよい
井の蛙逃げた所も丸い空
酔っていたとは言わせない保証印
介護してあげたいようなのが介護

広島市 森田 文

よかったね泣かなくなった幼稚園
失いしものきらきらと兎に溢れ
恋に身を焼いてもニュースにはならぬ
側に居るだけで元氣を取り戻す
飛び過ぎた鳥だったかも気の弱り

竹原市 小島 蘭 幸

結婚記念日妻の若さに嫉妬せよ

竹の和紙ふつふつと湧く詩ごころ

仁王の眼を誰も覚えていない闇

猛虎復活大阪弁が元氣です

龍虎の絵正に阪神タイガース

竹原市 三宅 不朽

年金ですお茶いれました二重焼

嫁のいるところで妻よ叱ります

態々の距離となりたる蜚狩り

若く見せ老いたとも見す藤の花

水音の地蔵和讃か通夜の橋

竹原市 森 井 菁 居

焼物に凝り佗寂がわかりだす

恵まれた日から人間退化する

意地になるところが老化かも知れず

民芸の店で土鈴を一つ買う

命日や地を這う虫に亡父が棲む

竹原市 時 広 一 路

温かいはずの大地で芽が出ない

害虫という名が生命軽くさせ

相槌を打つだけでいい今日の客

季の巡る庭楽しみな朝を持つ

死にとなない顔が待ってる診察順

竹原市 古 谷 節 夫

雪月花妻とワルツのシルエット

特技無し皆勤賞を持つ誇り

タレントの気分で降りる無人駅

腹割って話すと酒が旨くなり

国籍にこだわりません冷や奴

竹原市 石 原 淑 子

日が昇る今在る命たぎらせる

ああ夫婦阿蘇の緑にひたりきる

母からの風にもらっている剛さ

横文字の小犬に元氣もろてます

生活が顔にのつてた姫鏡

呉 市 榎 田 英 詩

バラソルが蝶とあとさき花の道

ベースデーのケーキ笑顔の数に切る

柱時計が眠気を誘うように鳴る

彩の順違えず虹が貌を出す

胸借りた先輩近頃老い給う

広島県 藤 解 静 風

妻が七わたしが三という会話

日の丸にこだわる僕は戦中派

鈍刀で私の顔を彫ってます

この齢になつて知ること足ること

能あるタカは爪かくすもの都知事どの

もう電話くれぬ戦友向こう岸

岡山市 井上柳五郎

横着の言い訳暑い寒いから

曾孫のうぶ声近く聞ける待つ

孫の婿ふたり男の子がふえる

不況増すカラスも猫もとつく知り

倉敷市 田辺灸六

生き延びていのちの重さ噛みしめる

生きてるぞお腹の虫も歌い出す

美味しさが身につく病後腹力

先輩を残しあの世の旅はせぬ

老夫婦看取りみとられ春を待つ

倉敷市 小野克枝

いそがねば自分史飾る砂時計

定年を妻の強気と手を結ぶ

路地裏に射すひとときの陽を愛し

退く勇氣持っているから明日がくる

七十かそうか紫煙の輪が丸い

岡山市 二宗吟平

爺ちゃんがいつのまにやら爺となる

遠方の子孫が来れば楽しいな

年のこと思つて吟の歌が出ぬ

さよならも言わずOB減つてゆき

年年とみんな言うから杖がいり

髪赤く染めて世情を論じ合い

今日手術するのを知らぬ腹の皮

貫い風呂世辞の一つも言うて去に

方言で町内会の宴終る

悪友を信じた背中痒くなる

岡山市 矢内寿恵子

なつかしい面影ばかり寺の鐘

ある別れスタート点にしてくれる

亡父の命と亡母の命を足して生き

老いぬれば病氣自慢もして生きる

花なれば狂い咲いても許される

岡山市 大石あすなろ

許す気で老父が熱燭つけてやる

ポスト拭く明るい知らせくるように

ドクターストップ解けてうれし試歩の朝

一身上の都合やたらに聞きたがる

病む老母へ禁句の数が多くなる

岡山市 江口有一朗

八十二何を慌てるたわけもの

人死んで臓器この世に生き残り

礼参り八十四番長寿寺

病む友の健康願ひ護符贈る

句作して心の暮らし立ててみる

岡山県 福原悦子

未完の絵夫婦ゆっくり彩を塗る
半世紀生きた夫婦にある挽歌
揺れている絆をつなぐ父の忌に
札束をつかむと仮面欲しくなる
燃えていた情熱偲ぶ古日記

岡山県 福原辰江

どう見ても他人の荷物軽う見え
春よ春草笛亡父を連れてくる
あの時の軽い一言仇となる
竹割った気性やっぱり憎めない
朗報へゆっくり明日の傘開く

松江市 舟木与根一

山桜目安に種の糲を播く
筋書きにないタイガース景気でず
カラオケの順だトイレへ避難する
男運薄いほそ腕繁盛記
悪友が俗名探す花手桶

松江市 佐野木みえ

地球儀をたどって世界旅行する
新入生ランドセル重い交差点
茶の間から咳払いがする父の声
息子の帰省ビール冷やして心待ち
うっかりと見過す機上からの富士

松江市 川本 畔

笑われる遊び一度はしてみたい
落されそうわたしは窓に近寄らぬ
ときどきは訳のわからぬ波が立つ
竿のシャツ揺れてわたしを問いつめる
風狂の果ての流れにやすらぎぬ

出雲市 園山 多賀子

米寿今紆余曲折の長かりし
地の果てに探し求めた青い鳥
生きていてよかった過疎に温泉おふが湧く（北山温泉）
生きて行く諸行無常の旗印
鉛筆を削り直して他意はない

出雲市 吉岡 きみえ

這い上がるわたしに身内あたたかい
少しづつ笑い袋の紐を解く
三姉妹会えば亡父のこと亡母のこと
悲しみを脱けたら星とよく喋る
傘さして仏の花を買いに行く

出雲市 久谷 まこと

花の香も程よく冷えた川風
似顔絵に似せたつもりの付け黒子
プライドの高さ自分の背丈まで
相槌をうって明かさぬ胸の内
期待背に千羽の鶴が武者ぶるい

出雲市 小白金 房子

太陽へ今日のリズムが動き出す

試着室鏡と初夏の彩を選ぶ

紙かぶと母子で手折る五月晴れ

やなぎ行李五十二年の香がしみる

変化なく暮らす農婦の白い数珠

出雲市 小玉 満江

舟ゆらり犬と流れを見ています

花ぐもり少し手抜きのお所

春愁や一人将棋ははかどらず

辛抱の白いばたんが笑い出す

買物も二人一緒につないだ手

出雲市 岸 桂子

来世も女に生まれ子を宿す

演歌聞く夫婦に違ふ過去がある

時々ハシヨック与えておく命

洗い髪別れの歌など口ずさむ

シヨッキンクナニュースに慣れてお茶をのむ

出雲市 板垣 夢 醉

サーピスは下手でも花はうまく活け

鈍行の行商訛りぶつけあい

逝ってから叱った母の労を知り

塩っぱに女の溜息詰めてある

体育は選手勉強ビリでした

島根県 堀江 正朗

ぶつかって柱と僕とおお痛い

惨めだと思つて生きて行かれない

風の吹くままに押された白い杖

手さぐりで生きる力にとまどう日

失明し今を知らない阿呆かな

島根県 堀江 芳子

停年は無いと気付いた割烹着

グッドタイミングご機嫌さんになりました

戦盲の気むずかしさにある気力

子ごころに戻してくれた伊勢神楽

真直ぐに世間を歩く白い杖

島根県 西村 早苗

これも運 割り切り方が下手くそで

うまのあう女だゆっくり飲みあかす

角瓶のこの液体もいやされぬ

あれを切りこれを切り過去のものとする

しあわせに酔うグラスは離さない

島根県 小砂 白汀

田を起せ畠起こせと雨給う

ナメクジも散歩している南風

大木を逆さに歩く蟻の列

五月かな大根の首花をつけ

松坂にやられておりますプロの顔

鳥根県 柿原秀子

つつし満開あなたと見たは三年前
星のない夜の半月が高くいる

連休はそれぞれ草をひく私

顔なじみ一人も来ない伊勢神楽

八十八夜小学唱歌口ずさむ

鳥根県 森茂美

鶯が大人の声になってきた

飛行雲見上げる児らの目が並ぶ

負け犬に咬まれた傷が治らない

戦争の火種は尽きず地球星

戦場に送る言葉は無くてよい

鳥取市 岸本宏章

しっかりと結んで母の荷が届く

それなりに撮れた写真が気に入らぬ

ボランテア陰に家族の汗がある

胃透視の影に生さざる論される

老春の真ん中にいて暇がない

鳥取市 岸本孝子

あのときが華だったなとみる写真

機嫌いいときはやさしく呼べるのに

定年がわさびの抜けた顔にする

言い訳をしすぎて本音ボロリ出る

役所では笑顔の稽古させてない

鳥取市 倉益一瑤

巻き戻しすれば恋愛適齢期

新緑がわたしの胸に化粧する

情けにはもろいガラスのあばら骨

ブラウスの赤に隠している孤独

つっぱった反動涙止まらない

鳥取市 植田一京

目隠しの掌はあなただとすぐ判る

もの好きで不器用な君はとけず

極楽の向こうチラチラ鬼の顔

毒少し飲んで魂目覚めさす

ライバルと認めていただき有難い

鳥取市 西村黙光

銭ぜにゼニ心に欲しい洗濯機

均等法炊事洗濯週三日

豊かさへ今更思う礼知信

齢ですね尻尾平気で振り出した

一杯の酒でおへそが茶を沸かす

鳥取市 近藤佳子

献体はボランテアのしめくくり

また転ぶ嘘も愛想も言えないで

春供物野仏に舞う花吹雪

実らない恋も桜も散りいそぐ

人形の想い届かぬ春かなし

鳥取市 福田登美

濁らない好い流れにはいい仲間

風紋も笑いころげる春の風

新緑のしづく濃くなる胸の中

青春をひっくり返し天に乾す

子が見てる背が細々老いてくる

鳥取市 両川洋々

雑兵は雑兵なりに修羅を漕ぎ

ゴミ箱へボーと理性は捨てて来た

まっとうに生きて恥じない父の手だ

中流の隣も今日はサンマ焼く

離農する話へ墓が目をさます

鳥取市 武田帆雀

エースナンバー貰って背中向け始め

一斉に田植が止まる旧家の葬

消費税送料不要根が切れぬ

ハンカチーフ振りたいような丘に立つ

ひたすらに心殺した我慢酒

鳥取市 岩原喬水

右左分らぬ孫の罪で済み

初めから男の嘘と知る女

老骨をしょぼくれさせぬ女ができ

悪知恵とニキビ一緒に芽を出した

笛吹けど金を見せなきや踊らない

鳥取市 美田旋風

ダルマに目入れても風は変わらない

いい意味にとつてはいつも騙される

相槌を打って蟻地獄に入る

主義主張合わぬが情にほだされる

幸せが兎小屋から逃げたがる

鳥取市 石上悦子

取鳥と書かれ鳥取かわいそう

私の自転車どこへ行楽か

我が家より空家のツツジ立派です

小麦色夏ほめられて生まれつき

咲けただけしあわせ私草の花

鳥取市 徳田ひろこ

ちいママに教える厨いろはうた

雛鳥へ未来をあげるジャンプ台

瓢々と生きてる肩に火の粉ふる

丁重なお招きピエロだったのか

所用の帰りに行楽の影となり

鳥取市 杉本孝男

亡母に似る後ろ姿を追いつ越せぬ

ドラマ抱き本家の門は朽ちてゆく

美女の歳なぜか尋ねてみたくなる

孫の声虚ろな心埋めにくる

ブランドのベルト勿体ない肥満

倉吉市 米田 幸子

競り勝った椅子がぎくしゃく落ち着かぬ

小回りのきく自転車漕いでます

乳離れのできぬまんまのお父さん

年金のあてがい扶持で出ず入らず

休日は妻のお抱え運転手

倉吉市 野口 節子

ひよつとこが一人混って座が和む

同病が励まし合っているベンチ

自動ドアよ優越感を有難う

公認の逢瀬になって興ざめし

粹すじが出入りしている隠居べや

倉吉市 松本 よしえ

心電図今逢って来たばかりです

晩生が小さな鞆に納まらぬ

ケーキ屋の向かいで団子売れている

もののけの女盛りに目がくらむ

野良犬に尻尾振らない意地がある

倉吉市 山中 康子

新緑も一氣に萌えて五月晴

ようこそと故里恋うる県外車

らんまんに花鳥風月我のもの

裏方も一つところで燃えている

すずらんに見習うもえのいじらしさ

倉吉市 最上 和枝

ポリープが胃壁に行儀よく並ぶ

消えそうな命が医師に囲まれる

留守電に変え基仇と対峙する

我が喉に酔うて素人のど自慢

流木が匠の腕に甦る

米子市 政岡 日枝子

ドレミファのどの音からでも咲くつばみ

チャンネルをたくさん持っているつばみ

目的の違うエプロンする夫婦

靴ばかり磨き世捨て人になった

繚乱のはざまにみやこ忘れ咲く

米子市 石垣 花子

洩れている二世代半の笑い声

空気のように家族がいつもそばに居る

グラスあけ子をしる紐ゆるませる

カットグラス三猿主義を通し抜く

ムードに弱い女負けずにグラスあけ

米子市 鷺見 正子

パレードが終わる二つの飯茶碗

後ろから次つぎつぎと若い波

わたくしの膝に戦士の駅がある

亡父を捜す下りホームの米子駅

ひとごろしの道具は人間が作った

米子市 澤田千春

真実の樹が根づいたよ裏の庭
流木が一夜を語る浜がある
駅裏の灯に寄る虫よ幸せか
振り向けば節目に残る父の釘
根気よく花の種などまくとする

米子市 青戸田鶴

柿若葉若さがほどばしるような
咲ききれば肩かるくなる花のいろ
淡い彩で年をかくした旅仕度（オランダベルギーの旅）
ゴッポの絵に満たされながら美術館
石畳古くて足が疲れきる

米子市 林瑞枝

笹百合の香に噎せ峠恋うベッド
花回廊わが家も造りテイタイム
地に転ぶ西瓜わたしに似て可笑し
まぼろしの行き交う自分史のページ
天国のちちははの乗る岡蒸気

米子市 茂理高代

蝶が舞い花が咲いても忘れぬ
この林抜け出る道を見つけたよ
花を愛で花の気持ちと生きてゆく
地図もなく帰り道などない旅路
飛行雲旅の話も終りだね

米子市 野坂なみ

旧い城老母は大事なものの守る
仏壇から庭の老松よく見える
紫陽花の露をしたってくる螢
その壁を越す日に君の手を借りる
兄弟の個性甲乙つけぬよう

米子市 白根ふみ

牡丹園早生も晩生もつながって
緋牡丹のあやしく崩れおちるとき
はたん園去り都わすれのけなげさに
大軍の歩兵ばつさりつくしんば
首すじのマフラーやさし花冷えに

米子市 光井玲子

よろこびの日は墨のお世話になっている
弟は独身貴族つらぬいた
どたん場で守られたなと気がついた
黙々と老樹 見守ってくれる
照る日曇る日みな神の思し召し

米子市 木村富美子

弟は柿を作りに婿に行く
弟の電話が温い故郷なまり
弟は杉山一つ背負わされ
弟の冗談にある淋しがり
弟が二人でいつも句をくれ

耳奥に心の和む亡母の唄

米子市 永井 三津子

煩惱の重さ乗り切る子の寝顔

幾つものハードル越えたみだれ髪

選り好みしていないのにまだ独り

善人は孤独と貧を抱いたまま

米子市 中井 ゆき

賑やかな祭りのあとの一人っ切り

ライラック匂いを風がお裾分け

花だから笑ってゆるす境界線

竹林は風と葉づれの音で寝る

近よればお顔のしわも同級生

鳥取県 原 みさを

笑いとは軽みとは南無 枝雀逝く

介護法ドラマ佳境にさしかかる

愛憎のゴツタ煮がある写真帳

三枚目もこなして軽い父の靴

ドナーカード夫婦ゲンカが一つふえ

鳥取県 林 露 杖

鶯の声聴たけて若葉道

汽車で行く病院ちよつと旅気分

連ドラで朝が始まる平和哉

湯上がりの妻と老斑数え合い

腹の皺露営の冷えに耐えた劫

自転車だってブレーキテストして乗るよ

小遣いを浮かして本を買う孫だ

飲みもせん薬を山に積んでいる

浮気することも病気のひとつだな

法螺ふきの血筋通りに継いでいる

鳥取県 岩崎 みさ江

木洩れ日の下みやこ忘れの小宇宙

化粧せぬ素焼の壺があたたかい

拒食症も過食も愛の飢餓だろう

縄になるにはまだまだ縊りが甘過ぎる

回遊魚いつか故郷へ還りつく

鳥取県 塔 寛子

キャンパスに炎える花花閉じこめる (インドネシア 55日 2句)

油絵に詩書きつらね書家もどき

冬翔んで戻って見たが春未だ

原色の感動去って絵にならず

苔庭にカタカナの花植えて見る

鳥取県 谷口 次男

役人が悪代官に見える雨

雨が降る悲しさ包み消すように

お互いにひがんでばかりいる夫婦

小銭持ち幸せの価値考える

捨て鉢で放った二の矢的を射る

鳥取県 西原艶子

さくら散る女の一生見るように

老境の長旅川柳からもらい（北海道ひとり旅）

すすきの夜風齡など忘れさせ

広大な原野に小さく牛遊ぶ

さわやかな風が素顔になれという

鳥取県 羽津川 公乃

新緑に雨も緑に染められて

山菜も終り静かな村戻る

三労と四休 余生恙無い

晩年は吉の予言をまだ信じ

気休めに夫にも聞いて選ぶ服

鳥取県 橋本 多哥由

いいとこで月下美人とお茶にする

傾いた家で長男が育つ

代役の無欲な芸に湧く拍手

肝心な事はいつでも妻が決め

肩書きがとれて人間味がでる

鳥取県 石谷 美恵子

望郷の飛天へ月が丸くなる

百花繚乱狂う勇氣もない私

ひらひらの紙一枚が身を責める

胸の海峡へ橋を架けたのはあなた

読めぬのが救い末期癌のカルテ

鳥取県 さえき やえ

関門ひとつ抜けて遺跡は春うらら

ジャーマンアイリス仕立おろしの顔で咲く

ごんたたち待つてごみを天ぶらに

生きているあかしにきょうも木を植える

川は流れて亡き人の声つれてくる

鳥取県 奥谷 彩子

島々を串ざしに橋風わたる

かごめの輪あたたかいので抜けられぬ

子育て終えそれからの路長いみち

自己主張それから落ちた自己嫌悪

病む母に濾過した話だけ下げて

鳥取県 西川 和子

軽い気で覗いた輪から抜けられぬ

それからは小川の水も澄んでいる

低血圧朝から雲の上にいる

世の流れ雲の流れに身を任す

しゃしゃり出る度に誰かともめている

鳥取県 石尾 かつ乃

クラス会しわくちや笑顔久しぶり

桐の花五月の風に散り急ぐ

澄みきった孫の瞳に負けた午後

柳友がまた一人増え二人増え

三世代揃い笑いの中に住み

鳥取県 津村 八重子

緑の日待つて新芽のたくましき
桃太郎さん曾孫に伝える鬼が島
リゾートと名のり広場も姿消す
いつ会うも愉快に話す友が好き
ハネムーン送る空港天高し

鳥取県 近藤 春恵

終着駅はきれいな花で埋めたい
大器晩成母は望みを捨てず待ち
鍛えつつ男の夢が太くなる
早合点してうなずいたのが運のつき
幸せを入れる袋が浅すぎる

鳥取県 吉田 孔美子

我慢溜め穴を大きくしたくない
助手席で木綿みたいに居ねむるな
のほほんの妻よ潰瘍君のせい
大往生納得顔に囲まれる
今更の自戒に疼き墓洗う

鳥取県 村上 信子

子に任す家計に少し未練あり
古傷に障らぬ話題これも愛
忘れてた返事夜更けになって書く
人形もわたしと同じ影をもち
婦警さん人形劇もうまくなり

鳥取県 太田 幸枝

海峡に霧笛がひびき花が散る
私の小さい城に花が咲く
雲行きが悪くてソツと中座する
金のない割に良い物好みする
竹トنبオ故郷の空へ飛んで行く

鳥取県 田村 きみ子

南瓜二本植えて気分はケセラセラ
流れ雲母は元氣かよろしくね
言い足りぬ言葉をつぼにつめている
絆より世話になつて降下剤
ワープロを覚えてからは笑わない

鳥取県 乾 喜与志

君が代はか細い声になっている
思いやりの言葉が時に裏がえる
土に別れて淋しさがテレビ観る
草むしる手はタンポポを避けている
素直な歳が白寿へも近くなり

鳥取県 権代 康女

兄と言う大きな糸にからまれる
医者よりも患者の方が先走り
ゆつくりと花回廊にのめりこむ
ありがとう言える素直な子が育ち
初物のたった一つを小さく切る

鳥取県 乾 隆 風

老骨を案じて覗くしょうぶ風呂
均等法かわりばんこに飯を炊く
飼い主がいいのか猫に艶がある
すみせん酒もたばこもようやめず
お祭にしんにゅう掛ける喜寿の膳

鳥取県 上 田 俊 路

心の粹ゆるめて視野を広くする
たがゆるむ三代目には喝を入れ
春風に名木菰を脱ぎ捨てる
人間の弱さ囲みを高くする
束縛はきらいゆうゆう独りいる

神戸市 中 村 ゆきをを

万巻のマンガに埋もれ留年す
黄金週間私ひとり残されて
パトカーが夕闇にいる交差点
9回裏夫ぶつぶつ腰を上げ
自己主張故なく寂し葱坊主

神戸市 山 口 美 穂

無言の旅立ちただありがとうがありがとう(伯母他界 3句)
遺影の笑みから播州弁をきいている
父の逝った日も咲いていた藤の花
バスデーケーキ母の卒寿をわいわいと
犬も人も日陰を選ぶ散歩道

神戸市 木 村 貴代子

花咲く木探して今日の散歩道
子の名前探して歩く書道展
嫌な事 嫌だと言って今日の我
天井のしみもなつかし亡母と寝る
出会う人去りゆく人に花嵐

神戸市 池 田 善 守

ガン告知釣竿みんな捨てと言う
何事も他人と比べ泣き笑い
志を学ぶ若者月見草
孫たちはダンゴの歌声残し去る
女房も笑顔はやはりすばらしい

芦屋市 黒 田 能 子

大輪となるを蕾は知っている
朝ごはんしっかり食べている夫婦
あきらめた頃に流れが変わり出す
天井のシミに忘れていた記憶
嫌嫌と子供のように言えるなら

尼崎市 春 城 武庫坊

音のせぬ矢車回り街騒音
駅高層ロマンが消えて無愛想
二日おいて食べるとうまい味に会う
柱時計の音を知らない客がいる
花があつたらなんにも言わぬ妻と住む

尼崎市 春城年代

期限切れとなって安心して捨てる

京育ちと言うても中京とは違ふ

デイ・ケアを受ける竹馬の友がいる

救急車ピタリと止まるお隣に

八十八夜母若かりし紺がすり

尼崎市 長浜澄子

自意識過剰の蠅が一段上にいる

日替りランチみたいの日々の目まぐるし

チマチマとするのは止そう五月晴れ

主客転倒した日を思うカーネーション

本心を隠すと声が裏返る

伊丹市 山崎君子

棕鳥のグチ聞きながら散る牡丹

今日立夏あねさまかぶりベランダに

ふじ あやめ むらさき色のデートです

いとこ会亡従兄の写真も上席に

老いひとりやさしい壁に囲まれて

伊丹市 小熊江美

運命の出合いがわたしを変えさせた

ライバルに挑戦勇気わいてくる

天井の木目の流れ自然の美

大根の可憐な白い花が好き

母の言葉に拗ねてた昔くやまれる

西宮市 奥田みつ子

飲みこんだ針後悔はしていない

若葉風定めを変える風となり

風みどり心もみどり逢うている

ポーカーフォイス君正直に生き給え

欲しい人からは貰えぬきびだんご

西宮市 西口いわゑ

壁ひらく鍵は自分の手の中に

哀しいときもバツカス様は来てくれる

雲つかむような話で沸いている

野の花が天に叫んでいるしぐさ

一粒の飯がミレーの絵に続く

西宮市 亀岡哲子

風みどり友と揃いの帽子買う

煮くずれも程よし母の煮ころがし

郷ひろみも中年なりや我が子また

句読点打ってリズムに乗るわたし

誕生日春で大きな花束で

西宮市 牧 渕 富喜子

連休の一日だった五月三日

お誘いをお断りする歯痛かな

ガーデニング中途半端の花ざかり

水を撒く音が緑の葉ずれから

文化沈澱みどりはかりに行く眼

西宮市 井上松煙

辛い世にせめて喜劇で憂さ晴らす

自画像に白がだんだん混つて来

孫が来る眼鏡を拭いて耳そうじ

カレンダー予定きつしりまだ若い

母の日にメロンが届くご機嫌さん

西宮市 緒方美津子

文庫本開きたくなる藤の下

ぐい呑みも光を透かす夏のれん

孫越して後ろ髪ひくウルトラマン

老いてゆくわたしをみせるのも役目

私の砦と思つていた厨

西宮市 長谷川淳

ハイテクに縛られている哀れ人

目まぐるし常住坐臥と言いながら

グルメの世まだ幅きかす握り飯

路地裏を上手に抜ける千鳥足

陽も麗ら食らわんか船通りそう

宝塚市 吉田笑女

母の日の母へうれしい花の鉢

嫁の顔色何時も窺う子が哀れ

九月には帰国する子を待ちあぐね

三姉妹皆それぞれに病氣持ち

目が物を言つてゐる姉とにが笑い

川西市 松本ただし

股引きと言うたら嫁が笑い出し

この年になつたら分かれて押し通し

老人のらしき書きぬ三面鏡

煩惱を邪魔者にする五月晴れ

神さんの罰に挑んでゆく移植

加古川市 吐田公一

天国も地獄も耐えている汚染

時化の日も風ぐ日もあつた父の海

安近短それでも財布無理という

落人の悲哀を吊すかずら橋

ら抜きでも孫の話はよく分かる

姫路市 古川奮水

解け合つた仲にも愚痴は一つある

吟行の群出迎える山桜

初夏の山ゆつくり歩く老夫婦

味付けを自慢でもなく分けてゐる

郵便を隣がくれる旅帰り

兵庫県 大谷幸次郎

毒含む煙が高く消えてゆく

も一つの素直な顔は見せられぬ

有難く薬二粒飲む日課

長生きをして本当に済みません

山菜の膳は日常茶飯なり

和歌山市 福本英子

諍いを止めると小皺増えていた
ペランダに五月六日の鯉のぼり
真須美公判振興券より活気づき
子科練の名残り大事に生きつづけ
日章旗で被われ逝った美房さん
(吉岡美房さん逝去)

和歌山市 木村初子

生きている生かされている風の彩
素朴さがじんと身にしむ握り飯
辞書にない生き様学ぶボランティア
年老いて夢いっぱいひとりの旅
古里は祭異郷の娘を思う

和歌山市 牛尾緑良

子へ老母へ歌いつづける子守唄
応援歌もう聞かさない父の耳
首正座させて赴く社長室
振興券ある日バイアグラにかわる
無党派の支持は突然横を向く

和歌山市 堀端三男

繰り返し言わないことにする蝶
伯楽との巡り合いから開花する
前評判がマイナス作用することも
サラブレッド競う宿命負わされる
何気なくシャネルの風をくれる女

和歌山市 桜井千秀

錆びて来た扉が重い寡婦暮らし
お顔なら知ってますがと名を聞かれ
閃きが揺らぐ牡丹は七分咲き
詭弁を弄しカバーしている小心さ
鏡を拭けば愛想尽かしの顔に会う

和歌山市 川上大輪

一滴の重さしみじみ血よ水よ
くちびるを重ね人工呼吸だな
無精卵買って少子化など思う
一発の銃声赤勝て白勝て
謹んで大本営の嘘を聞く

和歌山市 山根めぐみ

川の深さしみじみ語るクラス会
セーノーでお尻をあげる衣替え
エイヤアと急所をついてくる夫
神の振るタクトに森の木の芽立ち
仲直りの糸口欲しい夫婦ごま

和歌山市 古久保和子

ショーウィンドーから初夏の手が伸びる
ラッピング外すとわたし風邪をひく
通販が好きでプロほどある道具
玄関を開けた途端に豆ごはん
新しい枕で夢も新しく

和歌山市 山田 高夫

呑み分ける喜怒哀楽の酒の味

見た目には珠玉にまざるガラス玉

食い扶持は保証されてる籠の鳥

人間が上前はねる羊の毛

フルムーン二番煎じの枯れた味

和歌山市 青枝 鉄治

写経書く仏心で活け造り

庶民みなきれいな酒を飲んでいる

ローン終えホッとした頃漏れる雨

古里の温みも変えたシヨベルカー

タレントのアラで食ってる週刊誌

和歌山市 山口 三千子

眼の手術言われて医者を梯子する

自問自答心を癒やす庭の花

眼を悪くしてから耳が冴えてくる

おばあちゃんにすきさちかキティーすき

孫よりの手紙は句読点がいる

和歌山市 細川 稚代

追憶の向う岸から飛ぶ螢

思い出の街でうどんを食べている

素通りが出来ぬバアチャン居る小店

半分は救うてくれる海の青

開発の波が消してく原風景

和歌山市 玉置 当代

大空へ飛び立ち孫に会いに行く

沖繩の海が呼んでる孫が待つ

朱里城の朱よ琉球の風に逢う

竹の子のような期待を子に賭ける

母になり姑になってる世紀末

和歌山市 岩本 美智子

コーヒーとメロンがあればよい病夫

スカーフにアイディア出さず細い首

愛し声ハッピーバースデーばあちゃん

星の数六十九の春鏡

葎草の何を禱るか白い花

和歌山市 垂井 千寿子

お土産にもろたお金に縛られる

ただ今！ 幸せを嗅ぐマイホーム

第九条幻影として終らすな

ライバルの疲れはとうに見抜いてる

能舞台幻覚世界に時が過ぎ

和歌山市 池永 正嗣

簡単なようで失敗オムライス

初恋の人とぼったり指定席

旅楽し峠越えれば未知の国

タコやきはほんに丸くて暖かい

ぐい呑みの底にも夢が残ってる

海安市 三宅保州

寸分の狂いもなしに明日が来る
調子よいように見えても皿回し
若者の靴に圧倒されました
地平線も水平線もない都会
日和見な旗は慌てる俄雨

海安市 谷口義男

良心が有れば政治家にはなれぬ
見て見ない振りが出来無い正義感
人間のエゴが地球を麻痺させる
喪が明けて女は俄然強くなる
見栄張って其の分削る生活費

和歌山県 中後清史

赤青で今日を占う信号機
年金を刻んで守る老いの城
どさり着くチラシ戦の顔で来る
蚊が止まる血は満更でないらしい
追伸に憎いことばを添えてある

大阪市 川端一步

ばろくそに言う娘の世話になるつもり
まゆつばの話あしたの肥とします
目の優しい他人に会った日の日記
元気で言えば元気がやってきた
六月に元旦の計思い出し

大阪市 鈴木トヨ子

母の日に電話が嬉し喜寿となり
初孫は眠るばかりの初端午
湯上がりの肌にやさしい里の風
人生のステージ役者だった亡母
一人住み気楽な膳に鮎が跳ね

大阪市 稲本凡子

目覚めたら今日を頑張る足摩る
初孫も三十歳の誕生日
孫四人曾孫四人に囲まれる
一人居で我が家の電話ふと忘れ
亡夫の歳プラス五十をまだ生きる

大阪市 西出楓楽

いい人と言われ軽んじられている
本読んで賢くなれるくらいなら
いつからか春より秋が好きになる
おい煙オゾン層まで行くのかい
雑念に心経堂々めぐりする

大阪市 津村志華子

自惚れの心を叱る姫かがみ
病名をだまして父にりんご剥く
老いひとり若しと思うことばかり
悔いひとつ心の奥に錆びついて
若鮎にぞっこん父の釣自慢

大阪市 津守柳伸

風みどり独りが寒い木の芽和え

おだやかな風吹き抜ける姫リンゴ

おんな三役果せぬままのシャボン玉

一泊の贅へソース派醬油派

凡人の性 賞金は罪つくり

大阪市 松尾柳右子

山頂の雪に出逢った別世界

同県人知ってうちとけ盛り上がる

ぬれ縁に足投げ出して里帰り

種とばす楽しい西瓜食べている

なつかしい蛙の合唱聞ける里

大阪市 中田あい子

級会自慢話の友が浮く

杉木立真直ぐのびる修験道

旗色が悪くなったら石となる

喋りすぎ結果は負けとなる喧嘩

息ぬきに帰った里でする田植

大阪市 清水絹子

宝石箱のトロイメライも今むかし

喧噪を逃がれて仰ぐ伎芸天(秋篠寺)

子だくさんの母にこれでは笑われる

いつも一番ひとり暮しの風呂加減

春眠暁早よ起きなはれ清掃車

大阪市 神夏磯典子

日の丸が今は不況に堪えている

老犬の私を信じ切ってる瞳

風止んでからむずかしい元の線

大阪は橋埋め島は橋作る

八十の先輩があり気が弛む

大阪市 河井庸佑

体裁や見栄で本質見失う

前向きへ心静かに気負わずに

感情をあらわに出さぬのも度量

海の日に海に親しむこと思う

土用の丑 鰻はここという匂い

大阪市 井上白峰

善人と言われて仮面はずされず

切り捨てた駒が謀叛の旗を振る

身の程を知らぬ男の勇み足

性懲りもなくポンコツのネジを巻く

背伸びして風を待ってる影法師

大阪市 川原章久

無愛想自動改札会者定離

喜寿の春老人力に錆が浮く

もう今から浮足立ちの阿波の街

桜ならとつくに散った適齡期

老いの旅名も薄墨の花の下

大阪市 本間 満津子

暗闇で見える鏡を胸に持ち

気づばりがすぎても花は開かない

辻川 慶子

見えぬ幸せ聞こえぬ悪事こころ静か
カッカする人へおいしいお茶どうぞ

あきらめる心配なれば事もなし
寝すぎても欠伸 寝たらずともあくび

ええ格好なんでも引き受け忙しい
晩春に薰りやさしくライラック

植物園オランダの絵のチューリップ
ひとり居のこの安らぎと寂しさと

大阪市 田中 節子

花から花へ恋は移ろう旅人だ

浅ましき哉金のおいへ目が動く
心地よい木霊を待っている静寂

大阪市 宮本 欣史子

名に聞いた樹海へ煩惱捨てに行く

野次馬のつもりで来たかボランティア

晩年はひとり芝居のがらんどろ
せつなさは旅路の果ての夢芝居

民意とは離れたところでハツケヨイ
友の計に人間なんと無力なり

似顔絵描きえんぴつ走る素早さよ

反骨の石がだんだん丸くなる

大阪市 玉置 英子

仏の掌僕の住所はそこにある
たまさかに私自身を棚卸

オリブの花咲いたのに戻らない

一芝居打たれ本音が軋げ出る

亡夫好みドアのカウベル今も鳴る

人生劇場僕に黒子の妻がいる

夫逝き五目並べは孫相手

大阪市 川内 叭笑

チョットだけ枯れて来たのか丸くなり

夏祭り浪花の空が活気づく

大阪市 清水 利武

家宝でも他人が見れば唯のゴミ

激辛の裁判でいこカレー事件

花粉症遂に來ました隣まで

博多湾漂着物に見る歴史

初化粧戸惑う父に恥じらう娘

煮え切らん男で女持てあます

大阪市 大塚節子

古希すぎてもう数えない誕生日

四季のきめ出来ぬ世帯はしなはん

とんぼりで逢うてコーヒーでもないで

もどり梅雨しまい忘れのカーデイガン

手にキャンデーなめられもせず長電話

大阪市 北 勝美

母の日に病妻見舞うカーネーション

家のこと忘れた妻の無表情

看護士にゆだねる妻の替えおむつ

ナース呼ぶボタンも押せぬ妻哀れ

立ち止り撫でて叩いて膝がしら

大阪市 町田達子

しまなみ海道あらたに組んだ初夏の旅

紫陽花の饒舌昔ばなしが大好きで

天秤の恋無口な方にきめたとか

カラフルな花と無沙汰の墓参り

石仏に逢いたい嵯峨野の久し振り

大阪市 岡本久峰

傘寿には傘寿のノルマズック靴

三番街好きな店ありモチウドン

デパートに密漁のカニ盛上げる

外人客人形の街楽しげに

連休日頓着しない注文書

大阪市 川久保睦子

仏飯の湯気ゆらゆらと一周忌

傷心のうなじに優しく涅槃の眼

寝返った音かも知れぬ遠花火

耳鳴りがふと止んだのが恐ろしい

夫婦湯呑み一つで旅が甦る

大阪市 杉澤汀

筍の皮剥いてみるはいでみる

別れにきて出合いもあつて葬終る

神妙に焼香をする茶髪の子

バーゲンの帰りに犬の首輪買う

考古学亀の歳などひと跨ぎ

堺市 神原文

藤満開朝の窓辺で人恋うる

藤色の風に酔うてるサングラス

かなめの朱いよいよ増して咳止まず

炎天下へ悲しい噂ばかり降る

夏瘦せに一縷ののぞみかけて生き

堺市 志田千代

蓮つ葉な蕾は春を待てません

鉛筆の芯とがってる木の芽どき

色鉛筆定位置におさまりました

一年のころはよく手をあげていた

父の出た学校知ってから不幸

堺市 山本半錢

美しい日の入り一日籠りいて
湯の花に肩をほぐして午後十時
麦の穂が波打っていた遠い日よ
風薫る私の画布がはしゃいでる
言葉だけ空回りする深い酔い

高石市 浅野房子

冗談が本気になって綻びる
思惑が外れたあとの枯野原
エブリデーどこかが揺れている日本
草を抜く今日一日の労働歌
辻褄を合わせて遊ぶのに疲れ

和泉市 西岡洛醉

物覚え一つ忘れた老いを今日
燃えるものまだありまっせ二歩前進
父娘孫 赤い絆が脈を打ち
天職に生涯浸る実直さ
老妻と生きる小道よ青い空

岸和田市 高須賀金太

文学のこみちで路郎師を偲び（尾道・千光寺公園）
耕三寺のかげでひっそり向上寺（生口島・瀬戸田町）
クスノキの巨木三〇〇〇年語り（大三島・大山祇神社）
速潮の鼻栗瀬戸もひと跨ぎ（大三島・伯方島）
黙々と橋を横目に信号所（来島海峡・潮流信号所）

岸和田市 岩佐ダン吉

金のない自由をたんと持っている
懺悔するあの日はげしく舞う蜃
虫鳥の呻き林道つつ走る
血の臭いユーゴからきた風だろ
凶とでた占いだけを信じよう

岸和田市 芳地狸村

回廊をぼたんで染める仏さま（長谷寺 3句）
扁額の文字が誇りの大悲閣
大輪が生き生きしてるぼたん坂
絵ハガキの仲間と交わす温い筆
先手なら自信もってるへボ将棋

岸和田市 原さよ子

新緑を追って親子でペダル踏み
襟足がかくした歳を教えてる
生い立ちが滲み出ているお人柄
念入りに聞きすぎ友の気をそこね
階段の中程までいい調子

岸和田市 田中文時

古希過ぎてなお健啖のありがたし
アンケート少し粉飾した答え
付合いの煩わしさよ楽しさよ
家計簿に浮かれ過ぎだと諭される
三通りの年号書いた日記帳

岸和田市 藪野 けい子

裏口で野良猫親子日なたぼっこ
裏口で咲くばたん花枝まげる
受験日に母がお守り縫いつける
ガン告知お守りを買ひ命ごい
世渡りに性転換を選ぶ女性

岸和田市 原 苑子

しおらしく肩寄せてみる港の灯
次世代を担う子供を生んで欲し
陽光を浴びて満腹洗濯機
ささやかに喜びあえる兎小屋
爺ちゃんのお守りは松の盆栽に

岸和田市 井 齋 一 齋

お世辞がうまいバンクの貸し渋り
モナリザの額とくらべる妻の笑み
几帳面に飲んだ薬が副作用
助手席でよく寝る奴に腹を立て

岸和田市 寺 田 甚 一

一石二鳥考えるからミスをする
橋かかり名残りのはしけまた消える
甲羅干しじつと見ている日の平和
ドナーカード五臓六腑が古過ぎる
酒とろり値千金春の宵

安近の穴場を探すGW

岸和田市 井 伊 東 吉

ストーブの片付け迷ううすら寒
ファミコンに熱中する孫会話無し
直筆の友の絵手紙温みあり
今年こそ秋まで残れタイガース

岸和田市 長谷川 呂 万

次の世も白馬の王子待つつもり
バツ一が相手変ってまた誓う
サングラス少しくずれた気にさせる
不器用の守り本尊千手仏
大浴場へ右折左折で行った宿

松原市 玉 置 重 人

所得税ゼロとは僕も落ちぶれり
一合の米で一日生きのびる
桜餅川がキラキラ光る春
グルメとや筍ごはん豆ごはん
私もまんざらでない試着室

松原市 小 池 しげお

耳たぶに付いているのは嫉妬だな
人肌のお燗大事なお客さま
顔らない男に立ってする話
初耳ということにしてみんな聞く
相槌を打ってなんにも貰えない

羽曳野市 榎本吐来

葛城山青葉若葉に迎えられ

少年の日の爺ちゃんと会う老桜

久々に身内揃えた甥の婚

毒舌の妻への感謝胸に秘め

しめやかに紋付集う五月空

羽曳野市 吉川寿美

暗黙の答が父の腕ぐみに

無題と書いてわたくしの夢ふくらます

小面の裏に秘めてる愛と憎

いたみわけばかりが続く春疾風

しろつめ草幸せごっこもこのあたり

羽曳野市 福田満州

乙女座の出番を待っている夜空

薯の花じっくり眺め平和だな

短くて笑いもとっている祝辞

同じ歳なのに朱色の似合う友

ちよぼつとの家計簿なのに暇が要り

河内長野市 植村喜代

美しく咲いてるうちは振り返る

妹もぼちぼち歳のことを言い

不況どこ浮き浮きしてる花の下

テレビで行った積りの旅ばかり

毎日のように電話で風邪を聞き

河内長野市 加島由一

社を担う新人スキも少し見せ

正論が運よく上に認められ

キャミソール着そうなほどに気が若い

新婚がいつも話の腰を折る

相槌を打つと話が長くなる

富田林市 片岡智恵子

ゆるく結べば明日はほどける靴の紐

牡丹ボトリ散って果てないさだめ知る

ここという時にとぼけてくれた母

無いなら無いでそれなりの絵は画ける

ときめきも失意もあつてちびた靴

富田林市 松本今日子

京の町折れたら出会う地蔵尊

白菜ザクザク幸せだなーと思う

これからが私の出番花菖蒲

藤見頃少女は淡い恋をする

今会えば涙になるから手紙書く

藤井寺市 高田美代子

催馬楽をうたう私はわたし

わざとらしい暴投拾つてはやらぬ

朝顔が次々と咲く夏もよし

真夏日や定位置におく冷やつこ

どうせなら花火のように終りたし

藤井寺市 中島 志洋

ビヤホールここでも女強くなり

夏負けは知らぬ女の二重顎

冷や汗が言い訳の嘘知っている

見掛けより神経質な三枚目

息詰まるゲーム解説喋りすぎ

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

リング煮て夏の気配を急いでる

ふる里をおとき話に豆ごはん

ペアカップわたしの方がすぐに割れ

ひとの性まどろみながら確かめり

雑踏に逢うた匂いは消えぬもの

藤井寺市 楠 昭子

何べんも愛繕って来た夫婦

如才無い娘で心覗かせず

真夏日や古い水着を出して見る

どちらにもつけぬ立場で目をそらす

腹立てぬ程度に風を向けてくる

八尾市 宮崎 シマ子

五月には棕を売っているお店

熱処理も水処理も駄目生の恋

無気力に雲の流れを追う煙草

悪友の誘い即決にて参加

家族会議母の持論で締めくくる

八尾市 宮西 弥生

千年の樹にもまだまだ明日がある

焼香の列に茶髪やピアスたち

いつまでも未完を抱いて傷だらけ

傷のひとつは親と別れたそれも傷

いくつものめがぬを持って広く生き

八尾市 高橋 夕花

華やかなまつりにしよう誕生日

春の一日家を忘れて風の旅

母の日は好きないろ溶く絵の具皿

広辞苑閉じるとくちなし匂ってた

落花しきりつまらぬことは忘れよう

八尾市 高杉 千歩

ワープロにほんの僅かな優越感

百花繚乱画描きそびれた黄の牡丹

絵手紙になって言葉の舌たらず

老人力依古地加減を試される

人生の節目だばんと飛んでみせ

八尾市 吉村 一風

ドナーカード少しためらう老い二人

お百度の石丸うなり石切さん

おはようさん息子の心ノックする

山桜今年も僕を待っていた

お目でたらしいやと娘の便りくる

八尾市 生 嶋 ますみ

恋ごころ抱いて少女の交わす手話
不景気のたびに空へと伸びる都市
蚕豆もそれぞれ小さな爪をもち
露天風呂日ざし明るく身にとどく
診察をまつて雑談おもしろい

八尾市 村 上 剛 治

決心のうしろで義理が糸をひく
役付きになった名刺へ深い礼
父が先ず渡ってみせる丸木橋
神前で誓詞読んでる不信心
いつまでも流れ豊かな母の川

八尾市 村 上 ミツ子

かみ合わぬことたとあるいい夫婦
はしる走る追いかけるのも逃げるのも
みな自由はさしずめ皆の不自由だ
規則の上にチョコンと乗っている自由
働いてとつてもうまい水を飲む

八尾市 神 原 まさと

墓掃除烏に看視されながら
震度七忘れたような家が建つ
ビニールの黒に母が実をさらし
廃屋の桜の嘆き聞いている
日本は狭い物産展飽きる

八尾市 篠 原 いつふみ

金以外ならに相談言い出せず
単純が星占いにハイになる
螢火に女の性をグブらせる
反論もせず笑ってるのが不気味
高い石鹼で嫁はん顔洗う

東大阪市 森 下 愛 論

上役に媚びて飲んでるまずい酒
機嫌良い時だけ飲みに行きまひよか
初夏のリズムにマンシヨンの鯉のぼり
喫茶店死角の隅の恋を知る
葦簾張り茶粥すすって奈良公園

東大阪市 谷 口 義

選ばれて狒犬さんになった石
おんなおとこおんなおんなと石だたみ
人事のわたしのことは違います
人間に生れて愛想笑います
締切りがないから家事がはかどらず

東大阪市 指 宿 千枝子

此処はニース砂利じやりジャリの浜に立ち
はね橋にゴッホの姿見え隠れ
待ち合わせオペラ座にしてシャンゼリゼ
マロニエの風は優しいボンジュール
雨のセーヌ旅の途中にいる私

東大阪市 安永春

犬山城見せてあげましょ車椅子

よちよちの小さい足にも皮の靴

靴履いた犬主を先導して散歩

水色の靴がほしい子だこねる

爽やかな風下駄が履きたくなる足だ

大東市 児玉蛙

苦勞した顔がまあるく円くなる

不器用に席を譲って隅に立ち

欲少し抱いて人の顔でいる

立ち読みの続きへ雨が味方する

お似合いの夫婦と言われ氣に入らず

交野市 山川日出子

難民に愛の毛布を配りたい

亡母さんの指輪と孫のピアノ会

ふふふの字つい引かれちゃう京の魅屋

京足袋屋ロケ御一行お客さん

アイスクリーム長蛇の列のチーズ館(五月連休の六甲山)

吹田市 山本希久子

足早に去る栄光も亡父の名も

苔の寺過ぎたる人と歩を合わす

男と女どこまで続くかくれんぼ

思いやりの原点にある知らぬ振り

女はずるし男はやさし昼の酒

吹田市 瀬戸まさよ

雑草の光り輝く自己主張

豆ごはん竹の子ちまき柏餅

教育へ誰でも成れる評論家

子つばめに早く飛べよと突く親

弾く時間ないピアノにも調律師

吹田市 古川喜美子

薔薇の棘生き生きと我が掌にささり

何時からか私は怒ること忘れ

嬉しい時悲しいときも海に行く

財産はないがお位牌並んでる

しなやかに猫塀を跳ぶあたかし

吹田市 石原靖巳

熱燭を冷えたビールに替えて夏

日の丸を掲げるに躊躇する不幸

好調阪神安定剤になっている

君が代の行方は知らずさざれ石

味方から礫が飛んで来る不況

吹田市 野下之男

さざ波を猫大好きな妻が立て

老人が若い氣になる熊野道

これでもかこれでもかとは那智滝

嫁はんの小言を悟る第六感

再びは帰れぬ兵が花を愛で

寝屋川市 高田博泉

踏切りで短気の虫が顔を出し

老犬を老婆ゆっくり引いてゆき

優勝を意識してから下り坂

口かたい男で情報過多となる

風呂帰り一杯呑んだ顔で下駄

寝屋川市 江口度

サクラ満開一番似合うランドセル

タンポポの絮へ地蔵の眼も動く

セーターの乳房五月にはずみ出す

坊さんもしびれ切れてる三部経

留守電のようにポストにある名刺

寝屋川市 籠島恵子

もう夏なのね少し鈍いのもかもしれぬ

ここはひとつ言い訳しておく向い風

その内のひとりとなってブルータス

体験博山を歩いただけです

老後介護の話ばかりをして別れ

寝屋川市 平松かすみ

スイカそうめん父さんの忌も近い

節目かな私も人間ドック入り

難聴と医者から貰う太鼓判

目も耳も遠慮しないでお年寄り

病名が付くまで検査したいらし

寝屋川市 堀江光子

約束の日までに花の散りはじめ

辞書新調四月私も新学期

そのうちの一人にまたも向くカメラ

勘定は済ましといたと父の声

叩き台わが原案は跡も無し

寝屋川市 太田とし子

一休み茶屋には茶屋の草だんご

こんな日はだんごは要らぬ酒でよい

仏壇の芍薬 仏の顔も活気づく

藤棚の下には猫とワンカツプ

ああでもない斯うでもないと花活ける

寝屋川市 坂上高栄

散る美学大風小風もつと吹け

対岸の火とも思えぬコソボ地区

強がりの仮面の下のお人好し

青い目も茶髪もよい顔通り抜け

盲導犬野性の夢はもう忘れ

寝屋川市 酒井勇太朗

二度の職終えて余生は妻孝行

好き放題してて見た目は大往生

好きなだけ飲めと胸はるピアホール

手をこまね心で祈る孫受験

大中小ジョッキが揃う家族連れ

寝屋川市 北岡 波留吉

友情の証火中の栗拾う

仕来たりにこだわり進歩遅れ勝ち

ささやかなメニューに染みる妻の愛

賞味期限あつたかいなと金婚日

悪友が真つ先に押す車椅子

守口市 結城君子

五月好き町に芽がでた元気でた

連休を誘いに来たのは亡兄達だ

まな板のチヌの骨太尊敬す

大きな大きなしやばん玉に声かける

久々に家族が揃うフルコース

枚方市 海老池 洋

京都駅 東京色のきて座り

締めまり屋の財布きれいな札ばかり

私は私えっちらおっちらどっこいしょ

オカリナの音ひょうひょうと束ね髪

お子様のランチにしゃんと日章旗

枚方市 寺川 弘一

興味ない家族写真を見せられる

宝くじはずれたとても不幸な日

泣き顔の抱き人形を探してる

ありのまま映すわけではない鏡

留守電にしても伝言入らない

枚方市 森本 節子

ゴールまできめられた道黙々と

人生は回り灯籠いまは堪え

恐竜のように頸ふる椶の枝

よい樹ねといつもほめてた姉遠く

ゆっくりと歩調合わせて青木立

枚方市 前 たもつ

『五体不満足』ぐわんと打たれて読み終える

かわいそうの視点を变える車椅子

みんな違う人間の中になくも居

共生へバリアフリーに眼をこらす

たった一人の自分を活かし生きて行く

枚方市 二宮 山久

桜終え若葉で集う趣味仲間

タイガースほんに景気を変えそうで

髪切った妻へ不景気まだつづき

良し悪し話せばわかる友がいる

ふる里のみやげが届く酒の量

茨木市 藤井 正雄

同じ過去持つ私には笑えない

古里は変わっていない揚げ雲雀

飛行機の尾灯も混じる春の星

昼の酒もずくが美味しい妻の留守

銀河から馬車が出そうな湯治宿

茨木市 堀 良江

いつのまにか私噂の真ん中に
たおやかな下絵の線の凜として
忘れられた暑思い切り芽を伸ばす
お見合いのあとは大丸まで行った
鈴つけてボスとも見えぬ愛嬌よし

茨木市 井上 森生

新緑のパノラマがある賀茂の杜
薫風に輪廻の本は閉じたまま
春風が一味ちがう定年後
脳死劇いのちはそつと祈るもの
十牛もしっぽで軽く払われる

高槻市 川島 諷云児

酒煙草そろそろ年貢の納めどき
騙された傷は笑顔で消しておく
余命だけ見れば女に生まれたい
どたん場に立てばなんとかなる不思議
名刺にも紆余曲折の貌がある

高槻市 井上 照子

指切りを忘れられたか夢みせて
並木道靴音揃え語る過去
茶ガユ炊くきびしい時代ふきこぼれ
店じまい弱い者には容赦なし
亡夫七回忌読経の字がかすむ

高槻市 傍島 克治

誘惑に負けた蜜の甘い水
父の日もあるぞと男女均等法
道草に童顔戻る塾帰り
反応が遅くジョークが肩落す
終点の見えぬレールを妻がひく

豊中市 田中正坊

ていねいな言葉で妻がもの申す
美人だが注射はうまくないナース
小さは小さきなりに花をつけ（もくせい十五周年）
振り向けば去り行きし人逝きし人
人生の縮図つまっている集い

豊中市 吉田 あずき

五月の光あびる命をいとおしむ
母の日のプランへ母は疲れ気味
風にめくれるわたしのうすっぺらな刻
チューリップはや花閉じる夕仕度
藤垂れて未来へ流れ出すゆらぎ

豊中市 井上 直次

御法話に嘘もまじって有難し
居酒屋で学ぶ処世の裏表
待合室学ぶ病気の耳学問
勇ましい声がしている永田町
訥弁のセールスマンに買わされる

豊中市 湯浅馬洗

さり気ない言葉で嘘のとどめ刺す

こいさんと呼んだお人も古希の顔

電話口妻も娘も間違われ

生き字引インターネットで影うすれ

旅と写生うるおい重ね魁夷逝く

池田市 栗田久子

幸せのあしたへ扉開けておく

過去未来今綱引きの中にいる

戦争に勝利者は無し華は無し

竹とんぼ宿したようなもみじの葉

手を触れて棘の痛さを知る野バラ

池田市 岡本吉太郎

美しい女皆やさしと勘違い

定年後妻に世渡り教えられ

話上手嘘かまことか分からぬ

オバタリアンレオタードびったり若返る

赤ちゃんのやわ肌そつとふれてみる

箕面市 岩津ようじ

倒産の夢リストラの夢社と社員

リストラでなくて左遷ですんだパパ

これはこれは豚が真珠を買ってきた

据え膳を夢でも食えぬ意気地なし

考える葦の末路は惚ける葦

箕面市 椎江清芳

身から出た錆がカルテに記載され

舞い降りた蝶にも花の好き嫌い

宴席に下戸も無理する美女の酌

満ち足りた気持で洗う米の粒

節くれた掌からこぼれる土の唄

箕面市 出口セツ子

踏み出せば現在が輝き出してくる

虚と実の狭間で揺れている女

憎むより許せば楽になる自分

会えぬから想いふくらませる手紙

良妻と言えば忍耐だと夫

大阪府 榎山隆盛

父の日に父から所望されし本

母星にいちばん近いマウナケア

酔うほどに行ったり来たりするはなし

ドキュメントファイル小脇に詩人なり

葉緑素一年ぶんを吸う五月

大阪府 八十田洞庵

夕暮れの鴉 山頭火も急ぐ

矢印に逆らい迷い深くする

キュラソーを飲んで昔の恋思う

満月を待ちこがれてる無縁仏

勝者の目は美酒に酔うてる隙がある

大阪府 米澤 俣子

樹木医に守られ息吹く老桜
疑いは抱くまい世間狭くなる
来し方の答を詰めた玉手箱
通り過ぎた昨日の風は戻れない
何があったかお屋敷が売りに出る

奈良市 天正 千梢

「すまんのう」これで解決出来る人
たけのこの皮をはがして風邪を引き
チューリップグラスにしたい青い酒
蔵王堂ほろびの美学かいま見る
心してお茶たてまつる蓮如忌

奈良市 米田 恭昌

じいちゃんならいいおじいさんはやめてくれ
子が生れいよいよ娘母の顔
当り前のような顔して御相伴
待っていた老父に出番の村祭り
まほろばは世界遺産の息吹く町

生駒市 麻生 アート

かさね来た年月傷を舐めながら
ただ一つ悲しきものよあまねー
七十七今もさまよう羊にて
その熱い涙が大事君の春
割りきれぬコンマ以下にも夏は来ぬ

生駒市 北山 悟郎

終幕を飾り度く汗流してる
道頓堀昔を偲びああ傘寿
貫徹へ骨砕けよと体当り
軍国の古き家をば持て余す
ロマンスの一つや二つ僕もある

大和高田市 岸 本豊平次

新緑に風害の傷隠れてる
故里は囲炉裏があった黒い家
可愛がった孫はその頃覚えな
い選挙ポスター働く姿で貼ってない
日の丸を売ってる店はどこだろう

大和郡山市 坊農 柳弘

床開き京の風情の夕涼み
湧水を飲んで私の深呼吸
石楠花の好きなあなたと添って今
柿の葉の緑眩しい法隆寺
杜若夏の序曲へ咲き競う

香芝市 大内 朝子

風みどりころもみどり命燃ゆ
発酵の恋へおんなをとりのどす
亡母さんの風に逢いたい花手桶
笑い皺味なおんなを生きるなり
花の咲く駅を信じてひた走る

京都市 都倉求芽

逆転劇地球にされては一大事

もう耳にタコできました兆に億

宇宙にはよっぽど大きい歯車が

グーチョキパー三つ巴であるはずが

読めぬくせやっぱりカルテ覗き込む

京都市 山海友熙

七月の母なる峰は東山

逢うために濃い目のレモンティーを飲む

髪染めてみても何処へも行かぬ恋

くちびるが乾く真夏の人嫌い

抱きしめてみても開かぬ女傘

富山市 酒井輝

炊事する妻に打ち込む隙が無い

頼まれて酷評すれば腹を立て

例えばの中に本音が詰めてある

オカリナが滝のリズムに溶ける朝

童画展どれも落とせぬママの顔

富山市 島ひかる

母の日は亡母好きだった散らし鮎

ケンケンパー今片足で飛んでいる

なにわ川柳どっぷり浸りまだ飽きぬ

名水が濁った川に流れ込み
ファックスで流されて来る愛のメモ

富山県 増田紗弓

行列にいつい並ぶ癖があり

少年の孤独がたむろするネオン

深く深く亀裂を覗く第三者

努力する両手をさすお湯の中

時刻表柳友の地へ行けそうな

犬山市 早川盛夫

顛顛のあたりにNOという答え

酒ビールどちらも美味いから困る

手術痕ちよっとだけよと見せてくれ

末席と侮るでない咳払い

叱られに行く菓子折を買っていく

可児市 板山まみ子

チョコトルテ三日坊主のダイエツト

筈とウドで一杯春よ春

夕飯がだんだん遅くなり立夏

冷凍の一年前の初鱈

一つでもなれば喝采茄子の苗

富士宮市 渥美弧秀

浮雲の行方は彼方刻流る

窓外の桜点滴ゆれて視る

病床へ富士からの風心地よく

ピチヨ・ホケキヨ啼き合いつづく皐月晴れ
窓は雨雨だれの曲しんみりと

静岡県 蘭田 模 沓

野仏の台座の下に棲むもぐら
千年の古木の下で無心なり
背の丸みおばあちゃんの型になる
再会に過去をかなぐり捨て握手
粉飾の平成繚乱倒産劇

横浜市 菱田 満 秋

老いの句を作らぬと決め老いてくる
連休のうち一日を孫が来る
数の子がみんな育つと怖い海
マネキンに似合うファッション買ったがる
水道の水で金魚があえぎだし

横浜市 清水 潮 華

とりあえずマジックで書く新メニュー
急坂で会釈ついでに腰伸ばす
リハーサルきかぬ明日へ早寝する
お料理は苦手掃除に精を出す
天ぷらを揚げると隣からも来る

横浜市 菊地 政 勝

絵手紙をいただいてから片想い
花の名を覚えぬうちに次が咲く
長命の相と見られて酒減らし
うっかりと病気になるぬ医療ミス
還暦を故郷の母から祝われる

横浜市 後藤 早 智

三楽章春の嵐が用意され
神様に近づけそうな三楽章
木も花もやっぱり好きな甘い蜜
おみくじを引いて強がり言っている
旅行欲広い地球に追いつかぬ

町田市 竹内 紫 鏑

余生にも刺激 修学旅行船（近海クルーズに参加）
クルーズの贅 清流を抱く緑（四万十川遊覧）
高齢も唱歌につどうホテル船
元軍人うなずく壱岐の砲座跡
熱弁のガイドよ壱岐の地理社会

八王子市 播本 充 子

家中が小さな盾に拍手する
献血の予約をしてる太い腕
カルチャーを休んで好きな事をやり
金曜のスーツに意欲補充する
生かされている病棟か音が無い

大宮市 八田 敏

通販で要らぬ安物ばかり貯め
爺なのに逆上りしたと孫がほめ
姉妹とも杖ついて来た親族会
クラス会七十路の話題にバイアグラ
義歯折れたその日に無二の友が逝く

仙台市 川村映輝

桜満開縄文人の住みし跡

狭い庭ながら鶯鳴きにくる

戦争は嫌いだけでは済まされぬ

小路一つ誤り崖つ渚歩く羽目

老いすすむ子らもつぎつぎ停退す

弘前市 斉藤 岳

桜っていいなあ皆とまた飲める

競りの声弾む高値のりんご達

クロン牛もう食卓に來るとやら

満開の桜見に來た登山囃子

花びらの舞いは精霊かもしれぬ

弘前市 相馬銀波

汗のない初夏にのんきな挫折感

減反を忘れ早苗と泥の中

カッコウもりんごも遅れ春津輕

書き止めるだけで日の目のない日記

素直さに期待ふくらむランドセル

弘前市 蒔苗果林

老いボンと言葉尻から見抜かれて

花粉まみれ怖いこわいと花まみれ

多かった一言やはり花の所為

紙に書き燃やしてやろう言葉尻

逃げ口上うまい人です風のように

弘前市 高橋 岳水

花は葉に再就職は儘ならず

競うのをやめると錆びてくる色香

羽化したる少女の胸の曲線美

矢印が朽ちて行き手が黄昏れる

盃洗の底で虚実が混り合う

弘前市 岡本花匠

親ごろころほうふつさせる路郎の忌

雑念に朱墨が一閃吾を消す

約束へ歩幅が弾む夏帽子

闘魚一閃おとりにかかる悲しさよ

川原の趣向に酔うて鮎料理

弘前市 一戸ツネ

ひとりにも花の季節はやってくる

でこぼこを均してくれる般若経

薬一本老いの祈りの杖となる

青葉風桜花に贈る追供養

夕焼ける色即是空波の下

弘前市 高瀬霜石

道草は多分大人の味だろう

マイナスを発条にどうにか生きのびる

知らないでいるしあわせもきつとある

長い長い葬儀故人も苦笑する

神さまにみえぬ女神も死に神も

弘前市 富士慕情
自惚れを相手にされぬコップ酒

しぶとさと脆さも見せる鬼瓦
天罰と受け止めてから丸く生き
輝いた過去をこっそり出して見る
さりげなく生きて余白がつまらない

弘前市 今 愁 女

リストラに縁ない父の野良仕事
諍いを嫌う父の背丸かった
たんぽぽもつくしも笑う皐月晴れ
どの家もプラランター並べ同じ趣味
蔵がり鶯の声側でさく

弘前市 須 郷 井 蛙

後方の支援は親に見守られ
年金の寄生虫だよ介護法
旗立てたほどに売れない振興券
酒二合朝まで安定剤になる
旅三日お酒の量もグツと落ち

黒石市 相 馬 一 花

五月でも雪崩の怖い北の国
長生きと長寿は違うと言う名医
飲み水をトイレに流す日本国
大物をさん付けできるわが吟社
農作業する若妻は目だけ出す

十和田市 阿 部 進
ブナの森消えてイワナの悲鳴聞く

進む世の波に乗れない老夫婦
飽食に育って野性失せた猫
用件をすっかり忘れ長電話
ポリユームと味が自慢の屋台店

八戸市 島 田 昭 治

亡妻植えた丹精の花真つ盛り
水仙を特に好きだった亡妻恋し
花毎に亡妻の想い出噛みしめる
植主が逝ったの知らず花満開
ユーゴーの行司世界にないものか

青森県 西 谷 大 吾

多情多恨 椿の紅が黒ずんで
振り向けば枯野に風が吹くばかり
人生はあつという間の一転び
左遷地へ父はひとりで汽車に乗る
ガーデンング途端に妻が蝶になる

砂川市 大 橋 政 良

そんなことあったと記憶薄くなる
嘘の息紙風船がよく弾む
串を焼く匂いにたぐり寄せられる
裏話傷つく人がまだいます
髭と爪だまって伸びている無職

香川県 木村 あきら

持ち味を出して老舗の衰えず
傘寿でもバッグに手鏡詰めている
路地裏に人情たっぷり落ちてゐる
七人の敵何のその靴磨く

香川県 工藤 吟笑

飽食も飢餓もかかえている地球
花の色判らぬままに種を播く
恩を売る人とは知らず買いかぶり
一票の重さを運ぶ車椅子

香川県 成重 放任

除草剤すぎて橙まで枯らし
ふる里の新聞詰めた宅急便
夕暮時万歩計が呼んでいる
前後ろ見分けぬほどの色の良さ

松江市 浦辺 静江

品格を保っていても出雲弁
来客ごとランドセル見せる入学児
五七五頭ひねって庭いじり
沈む陽を盗み見してる地蔵さん

松江市 安食 友子

春びなの鑑別まるで神業だ
病むベッド朝だ夜だの繰り返し
絵手紙で画伯気分になっちゃった
あの慕情やっぱり胸の奥にある

出雲市 富田 蘭水

咲くりンゴ私と二人みつめ合う
孝行の言葉を自問自答する
三歳に見すかされてる我が心
読むの会晶子の情に若返り

鳥取市 春木 圭一郎

男なら誰にもできぬ技磨け
男なら大きな花をいつも抱け
男なら子育てだつて上手くやれ
男なら出処進退いさぎよく

鳥取市 富山 檳榔樹

朝顔の笑顔が並び夢が湧く
人が皆笑顔に見える花の園
老いてなお媚薬を求め武者震い
人生の長いトンネル共白髪

倉吉市 淡路 ゆり子

散る花へ感謝をこめてありがと
子を発たす母が選んだ大安日
煩惱が溶けてしまった青い空
勇気を出して流れを変える杭となる

倉吉市 山本 玲子

新緑の山白刃の滝垂らす
ぬき足さし足鶏冠ゆらゆらさせて追う
蟻の口ひそひそ話して飽きぬ
人込み避けて鎮守の森へピクニック

始球式恵三投手子供並み

米子市 本吉宗光

山つつじ街の家風になじめない

惚けたかな鍋がこげてる はいしもた

失敗を亡妻に告げよか香をたく

鳥取県 山本正光

真剣に間違いないと薬のむ

スピードを出してる車逃亡者

渋皮を剥がれてからは只頑固

しくじりの度に怒っている奥歯

鳥取県 國森武子

輪になれず孫と二人で踊り出す

新しい町に古城がよくはえる

天気良し一日毎に田も変り

上天氣農家一斉に生きかえる

鳥取県 幸家單車

あわ良くば誤算で通す積りです

見通しの明るい内に足洗う

失恋のショック魂まで消える

信用の誤算が事件引き起こす

鳥取県 黒田くに子

スランプを野原へ捨てる深呼吸

ひざ枕野心持つてる顔でなし

幸せがこの場かぎりでないように

すんなりと本音ださせる聞き上手

尼崎市 的場十四郎

春の鬱脱出しようか妻の留守

ビックリ箱こっそり開けて火傷する

狙い玉あの女いつも隅にいる

やり遂げて男ゆっくり靴を脱ぐ

西宮市 菊池トミエ

ダンスには思い切り派手に赤い靴

国宝の壁画見ている皆静か

自己主張壁の厚さを知らされる

世代交替壁取り去って広く住む

西宮市 井上信子

紙芝居思い出たぐる幼き日

新劇を月1見てた青春期

労演日脱兎のごとく職場出る

白沙村この静寂の温かさ

相生市 中塚礎石

山と川気持ち合うて手を握る

どこまでも別れられない影一つ

老人力女の手前無理が過ぎ

揚げひばり人間どもは空見上げ

和歌山市 榎原公子

風と陽と対話野菜がよく育つ

ニングルを探しに森に樹を植える

背伸びして明日を覗いているんだよ

踏み外したことすら気付かないもつと

大阪市 寺井東雲

辛抱が値切るコツだと教えられ
テポドンは何時飛んだのか知らなんだ
もつたない一粒の飯残さない
雷を落す親爺が沈んでる

堺市 黒田真砂

病めば尚一層優し夫も娘も（入院 3 旬）

まぶしいほど春光あふれ四人部屋

点滴の一てきずつの命なり

唇も爪もブルーで翔んでる娘

堺市 柿花紀美女

幻に我が終焉を描いて見

喝采もないが気楽な凡夫婦

勝ち負けへ阪神ファンの唸り声

古里を訪ね見知らぬ人ばかり

貝塚市 池田寿美子

シューベルト歌曲に惹かれ生き延びる

少し疲れてみどりの風の中にいる

テレビでは見えないものが見えてくる

取材記者過疎のみやげはふきのとう

藤井寺市 福元みのる

叩き上げ社長の説法身に染みる

叩きつけたい辞表も不況故我慢

政党不利益々高まる新世紀

習いたい読みたい見たいものが増え

羽曳野市 酒井一壺

不況にも関係なしに花が咲く
あちこちの土の中から春の顔
投げ返す石がだんだん弱くなり
磨かれて墓石となり拝まれる

豊中市 松岡久留美

幸せは一家だんらん夕餉どき
商いも終えて夜道を子のもとへ
不出来な子ため息ついて見てる母
出稼ぎの古郷思う縄のれん

池田市 藤井計光

抜き衿のうなじの白さまぶしすぎ

シンブルなくらしに心軽くなり

勝敗は度外視トップ月見草

医の心忘れた医師がたんといる

枚方市 鈴木政子

同性のながらタバコに目を背け

木蓮の花びら風に誘われる

ガーデニング無視で足早御堂筋

香焚いて迎えた客が花粉症

京都府 稲葉冬葉

花が咲き鳥さえずっているメーデー

新札に折り目を入れた罪悪感

血糖値すったもんだの修正案

姿見に今日一日の身繕い

七面鳥そんな習慣止めにして

弘前市

中山雅城

七分粥みんながほっとする朝だ

七輪で焼いた秋刀魚の物語

七五三一人っ子にはつまらない

弘前市

小寺花峯

問いかける鏡に化粧厚くなる

均等法手玉にとった女王蜂

にこごりがそろそろ溶けてくる野望

怒り出す足を沈めている渚

弘前市

櫻庭順風

コアラと撮す感激知らぬ貌してる

しがみつくコアラの爪につまされる

撮される度レム睡眠を破壊され

コアラ権を忘れた振りをするひと科

十和田市

小笠原敏人

チューリップ見て大感激の一歳児

薄着して田んぼの風にどやされる

農作業慣れた振りしてやり直し

八年がかり待って咲いた白のリラ

青森県

諏訪柳々

多言無用男じつくり奥歯噛む

ひげはやすから君の顔嘘っぽい

神さまの祈る数ほど戦かな

搾るほど搾って医者 hands 離す気

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長 尼 れいじ

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町 2 8 4

吉岡 きみえ 方

TEL0853-22-1068

佳句感想

橘 高 薫 風

事実の句

写生は真を写すのであるが、先ずは見た目のありのままを表現する技を習得する。正岡子規が短歌で示す一例で有名なのが次の一首。瓶にさす藤の花ぶさみじかければ

たたみの上にとどかさざりけり

ここで言う事実の句は写生とはいささか異なる。写生の外に附随するものがある。

阪急が見えて旅から帰って来 正本水客
旅帰りの車窓に阪急百貨店のビルが見え出したのは写生であり旅帰りも事実だ。藤の花の短いのは写生のままで、旅帰りに阪急の見えるのは、いささかの感慨がともなう。旅の終りの疲労倦怠感がずしりと存在する。

花火黄に空の重心全く西 大山 竹二

黄色い花火が西の空にあがる。これが事実。それへ作者は空にも重心があるという独創的な見解を提示する。それはそうだろう、東の空は真っ暗なのだから。空の重心の傾きは坂空の事実。それでも読者は同感共鳴する。

聖書一冊菊一輪の二階也

麻生路郎

一冊一輪の潔さ。黒と白の色の簡素な組み合わせの効果で二階は敬虔な雰囲気である。これは事実。書齋らしいことや主の人の想像までもそそののは単なる写生だけではないからだ。

次の句なども、それぞれの事実でその味を出している佳句である。

手術痕ちよつとだけよと見せてくれ

早川 盛夫
手術の傷は糸を抜いたあと、まるで火事場のようにむさいものだ。うら若い女性が、恥ずかし気にそれを見せようとするしな目に見える。恋人か、好意を持つ相手であることとを推察出来る。

そのうちの一人に又も向くカメラ

堀江 光子
一對一のデートとまでは行かない同士、女性性が友だちと一緒に来たのであろう。写す目標の人は一人でもあからさまには出来ぬ心理、カモフラージュに心を配る様子がしっかりと分かる。心理描写は川柳の一領域だ。

興味ない家族写真を見せられる

寺川 弘一

女性に多いのだけれど、家族の写真や独立した子女の家族のまで、それは孫自慢に繋がるのだろうが、写真を見せる人がいる。むげに拒否は出来ないから相槌ぐらい打っておくが調子に乗ると白けることになる。

一寸した事実だが、巧妙にすくい上げられると、そっだそっだという気にさせられる。

留守電のようにポストにある名刺

江口 度

営業マンになったとき、如何に人に会って貰えるか、如何に名刺を多活用出来るかに腐心する。訪問先が留守のときでも名刺はポストに入れておく。そのさびしい空振りの名刺を留守電に連繋させたのが、この作者の才覚で、うがちのユーモアといえる程にとんぴしやりなのである。この作者の個性、本領だ。

仏壇から庭の老松よく見える

野坂 なみ

仏間の正面に仏壇、庭の正面に老松、これが事実の描写。それだけで、亡き父が手塩にかけた松であることや、作者の子供のときの父母兄弟と松との関りなどを思っ作者を想像する。仏壇の父と一緒にひと時松を見るたはずまいが絵画の味になってくる。

自選集

阿 萬 萬 的

僕を氣遣う妻がうるさい時もある
齡だからランク落して時を待つ
お互いに喜劇のような老夫婦
情報過多ついて行けない歳になり
自己主張過ぎた男の隙間風

遠 山 可 住

一筋を来て人生が短すぎ
熟年よこのすばらしき未完の碑
一万円札タクシーに叱られる
フルムーンの一日だけを富士が晴れ
握手した掌が一票とつながらぬ

板 尾 岳 人

夏祭り済んだら逢える水鶏笛
夏祭り別れ話はせぬことだ
祭り笛聞える街で別れよう
愛染もよし大阪は夏まつり
情死する鎮守の森は賑やかに

八 木 千 代

藤棚の木の下の闇もうつつにて
人の世にうすむらさきの花の寺
遅蒔きに咲いてながらく咲いている
当然の刑よ微熱の七夜十夜
かたくなな枕さまよいから醒めぬ

恒 松 町 紅

男老いて爛漫に酔い酒に酔い
初対面話囲んでいるコーヒー
騙されてやろう心は見えてきた
油断して小さな石を見失う
囲む座で味にうるさいのが一人

高 杉 鬼 遊

アンパンのへそ恥ずかしく凹ませる
きまじめを抜けて遊びの飴細工
注文の品が忘れた頃に来る
人の世に馬鹿と言われるむつかしさ
あの世への入口がある御仏壇

小 西 雄 々

宣誓の声青空に吸いこまれ
ガイドラインよりも大事な晩酌だ
マネキンの顔で行こうかキリギリス
逃げるより死んだふりして生きのびた
満天の星に胸の炎のぞかれる

辻 白 溪 子

雑魚狙うための弓矢は持っていない
勘ちがいされて聞かれている話
冷やで飲む酒が詰所に並んでる
嘘ついていると友人には解り
コーヒーが冷えきっている待ちぼうけ

月 原 宵 明

しまなみの名をただ貰うた凡句集
外向いた闘う靴の疵だらけ
巨人勝ってる誰も風呂には入れない
雑兵の愚痴聞き飽きた縄のれん
穴のある軍手何でも掴みよい

松 川 杜 的

久し振りポップン吹いても鳴りません
陶蛙ちよっぴり位置を変えてやる
暗証番号 生年月日にもうしない
ジベタリアン少年Aが独り居る
いちはず満開子規の歌口ずさむ

波 多 野 五 楽 庵

菜の花を村のポストが待ち侘びる
薄暮から薄暮をつなぐ浅い夢
とばとばと愛も悲もゆく雨ざらし
夢枕いつも死ぬこと生きること
うかつにも自嘲を人に見られたり

金 井 文 秋

串と言う文字のだんごは二兄弟
手抜きするほどの仕事もない老後
希少価値ないが米寿を越えました
あばかれると困る秘密を狙うペン
それなりに映す鏡に罪はない

藤 井 明 朗

高原の宿しのび寄る秋の風
米寿がすめば黄信号へ要注意
二〇〇〇年としより介護福祉になるまいぞ
ふる里のちまき恋しい母は病む
生涯教育とは知識を高め運動を高めそして健康

正 本 水 客

泣き笑いして済むほどのことであり
こだわりの強い男と覚えてい
無口の方がいいと二人で笑い合う
追い打ちをかける心算はないと言う
心まで売らぬと芝居めいてくる

野 田 素 身 郎

古希が来て立ち居振舞父に似る
昼寝でもしろと恵みの雨が降り
何故いまになって初恋夢に出る
五月雨に閉じ込められて老い二人
メーデーの旗手を務めたこともある

野村太茂津

暑がりの寒がり冷え性暑い夏
なんのその老兵だから派手に舞う
崖の真上で明日の構図を舞うてみる
アドバイスしても器が小さ過ぎ
ケラケラと笑って薬のみ残す

小林由多香

景気よくなるまで待てぬ火の車
素直にはなれぬわたしもへそ曲り
ボランティアわたしにできる恩返し
飽きもせず毎日三度飯を食う
不況風打つ手打つ手が空回り

宮口笛生

酒のおかげ風邪も引かずに冬を越し
どっこいしょよっこらしよつと妻も古希
コーヒーのタイムへ座る老夫婦
かけ足の夏へおいしい缶ビール
美しい女に弱いのも男

黒川紫香

似たような話で過去を振り返る
何気なく置かれた部屋のオルゴール
残業もなくて豚マン買って去に
女子寮の窓のカーテン華やかだ
ジグソーパズル首のすげ変えまだ出来ず

藤村 女

寺に来て木魚を叩き無我にいる
長旅に出掛ける長閑なカタツムリ
山越えて谷の深さも知りました
田園の緑波打つ銀の風
舟唄もしぶきに光る川下り

河内天笑

浮気したことがないとは頼りない
五体満足なあいだは浮気せよ
健康のバロメーターにする浮気
酒タバコ止めても浮気やめられず
啓蟄や浮気の虫の啓蟄や

西田柳宏子

弁当食うまでが愉しいピクニック
損ばかりしてる親分憎めない
気紛れかヤングすぐ晴れすぐ曇り
ご念には及びませんとキレている
序列など気にせぬ世代リードする

橘高薫風

悼 大石鶴子女史

朱鷺生まる鶴の魂魄は雲に消え(五月二十一日)
路郎忌の酒不死鳥と瓶に書く
胸の笛鳴り出す梅雨入り三日前
若者の海を歩けるような靴
尺獲虫回転寿司へ急ぐなり

大石 鶴子

東野 大八

「私の生れは明治40年（一九〇七）6月20日、東京神田駿河台南甲賀町8で生れました。ご承知の如く父は井上剣花坊という川柳家です。母は信子、この間に次女として生を享けました。下田歌子校長の実践女学校に入り、裁縫ばかり習っていました。この学校は良妻賢母型尊重で、皇室尊重がモットーなのですが、父の剣花坊は父兄会長に選ばれたものだから、毎年級長でなければ学校にやらないと申しましてね。それはきつい父でした」

これは筆者宛書簡の一部である。

インテリジェンスに溢れた、美しいその筆跡の見事さは、これが九十歳を出た老女の筆かと疑われる程の出来栄である。左様昭和30年代からの封書・ハガキ類は、洋酒の手頃な空箱から溢れるほどで、推定約二百通は超えていそうなのである。

「母信子は、明治二十年十月山口県萩市の生れで、広島赤十字看護婦を志願したのは明治二十七年日清戦争がはじまったため、信子二十五、六歳です。女でも何かお国のためにお手伝いしたいという気持を抑えかねて、家庭の反対を押し切って志願したと『婦人朝日』一九五一年三月号誌上の、記者との対談で述べています。勤務年限は確実に聞いてはおりませんが、結婚したのは明治三十二年始めであり、剣花坊が信子の勤務先の病院長に求婚の応援を頼んだというエピソードも耳にしていますので、同三十一年頃迄は勤めていたものと推定出来ます」

剣花坊夫妻の子―長男麟次（明治26年生れ・昭和55年死亡）次男鳳吉（明治28年生れ・昭和57年死亡）三男亀三（明治31年生れ）長女竜子（明治34年生れ）次女鶴子（明治40年生れ）。

剣花坊の初めの妻トメは三人の子を残して産褥熱により死亡した。信子はいわば後妻で夫剣花坊こと井上幸一より、一つ年上の姉さん女房だった。

「私から見た剣花坊夫妻は、既によく言われているように、一人は天衣無縫、感情を抑える術を知らず、怒りまた直ぐ何々大笑する男です。信子はその正反対で、冷静、緻密、剣花坊の綻びを縫いつづけ、よくバランスをとっていました。信子は、戦役看護婦の手柄により、勲八等宝冠章を拝受していたので、剣花坊はよく人に、うちの女房は何分勲八等だからな」と言っては笑いとはしていました。内心それが自慢らしい反面、一種の恐妻気分でしたようです」

齒に衣をきせず、彼女は次女鶴子として控え目ながら父母の在り様をよく見ていたらしい。書くのを憚るようなことも書信にある。「さくさくとほうれん草を切る青い束」という句を或る日台所で何気なく口ずさんだのを見た剣花坊が「うん、いい句だ」とホメてくれた。これが私の本当の処女作でした」というのは笑ましい一幕も書いてある。

「鶴子と夫大石泰雄との結婚式は、昭和六年十一月九日でした。新郎は理研ゴム勤務の技師で、『郵便報知』主幹矢野竜溪の甥で

した。この兩人とも読書の虫でしたが、川柳や俳句には根柢から関心がなかった」

そうかと思うとこんな書信も眼についた。

「柳誌が『大正川柳』の頃、編集担当の白石維想楼氏と父が意見が合わずよく激論し、白石さんが怒ってブイと家を出ると、そのあとを信子が追っていつて、平謝りの末、一緒に家へ帰ることがよくあった。『剣花坊先生より、奥さんがニガ手だな』とよく白石さんが愚痴を言っていたのを耳にしました。下駄の鼻緒を切らして、半分裸足の吉川雄子郎（英治）さんを見兼ねて、こっそり泥だらけのその下駄の鼻緒をすげかえたのも母信子の優しい思ひやりでした」

というホロリという一幕も記されていた。

「見よう見まねで、私（鶴子）が川柳に手を初めたのは、昭和三年学校を了え、家に居る所在なさに、自然と父母を見習って川柳のお仲間入りをしましたが、その時の婦人作家は三笠しづ子、吉田茂子と母の信子の三人ぐらいいましたが、四、五年次には沈鐘会という女性の会が柳樽寺グループの中に生れるほどに女性の参加がありました。然し、昭和六年私が結婚した折には、川柳を離れていました。が、三十三、四年頃（高木夢二郎師編集時代）再び『川柳人』に句を発表するようになり、

今日に至っています。信子の死が一つの動機になりました。私の思い出の句は次の通り。

怒涛からホロリと落ちる桜貝（昭和初期）
算盤をはじき平和を出し惜しみ（垂天賞）
如露の水いつも届かぬ隅の鉢（〃）

千里ゆく凡駒のあとを追う羊

この句は、剣花坊の「後五百年凡駒産れて又千里」の句に對し、剣花坊の遺志を継いでいくという意味です。剣花坊は午（うま）年で、私はひつじ生れですから。

月天心ころろ一つを掬いあげ（金大中事件）
政治家の脳天を射る星一つ（市川房枝の死）
子鴉も悪食真似る冬景色（現世相）

転ったとこに住みつく石一つ（日川協大賞）
鶴彬の鶴のペンネームは、鶴子さんからとったものとの説にお答え致します。

昭和37年10月号の『ふあうすと』に「鶴彬のこと・河相すすむ」の文中に「鶴のペンネームは、鶴子さんの万能にあやかるところで書いてあるので愕き且呆れているところでございます。（江森盛弥著「詩人の生と死について」より）の但し書もありました。要するに私に對する「万能」とは、鶴彬自身の持っているものであり、甘ったれの文学少女でありました私などは、鶴氏は別世界の人と考えておりました。家族と一緒に食事をとった思

い出もありますが、鶴氏の真価を見抜く眼もなく、議論の好きな青年、そして特高がつけたりにしている気味の悪い青年ぐらいいに考えていました。若い人の好きな剣花坊や信子は、この青年を高く評価し、嫌な態度など少しも示さず遇していたようでありました」

「母の信子の句集は、初めてのものは大正15年1月で、第二句集は思い出の『蒼空』からとり昭和5年4月の発行です。『川柳人』は、昭和10年7月号を以て廃刊。同12月号より信子主宰となり『蒼空』を発行。昭和12年1月号で終刊。同3月号より『川柳人』復活。然し同12月号は発禁、責任者として信子は拘留四日、高田保は信子の「国境を知らぬ草の実こぼれ合い」と「何う坐り直して見てもわが姿」の信子の川柳句を中心に、彼女を「烈婦」と「ぶらりひょうたん」（東京日々新聞紙上で賞揚してくれましたが、母信子は寸毫も鶴彬を怨むこともなく、冷静沈着におかみの処断を甘受している様でした。この姿に、私は『川柳人』永続こそわが使命と銘記いたしました。柳樽寺死守といえは、おこがましいでしょうが……」

平成11年5月21日没。91歳。

▼前号の予告を変更して大石鶴子氏の急逝を悼む。次号が「北川絢一郎」

誹風柳多留二四篇研究

7

橋本秀信・粕谷長生

山田昭夫・伊吹和男

大野秀二・小栗清吾

清 博美・佐藤 要人

佐藤 賛

43 八月の一ッ眼コに客はにげ

清 「一つ眼」には、幾つかの意があるが、本句では化物の意ではなからうか、それが転じて白無垢を着た遊女と考えられないだろうか。

句意、遊客が八朔の紋目を避ける、との意に取りたいのだが、もつといい解があるのかも知れぬ。

小栗 賛。八月十一眼で他に思いつかぬ。

佐藤 礎稿賛。

44 かきつばた四字と六字の上に置キ

清 業平東下りの折りの折句「かきつばた」を詠んだ句。

和歌は、五・七・五・七・七の三十一文字で構成される。業平の杜若の歌は折句であるから、各五文字・七文字の最初の文字に折句の一字がはいる。従って、五文字・七文字が四文字・六文字になる勘定。

つまらぬ句ではある。

佐藤 賛。

40 ふん／＼とたはこハにほひ銭ハなし

中葉

清 遊びたくとも銭がないので、ただいたずらに煙草ばかりふかしている、という句だが、吉原素見とするのが妥当か。素見とすれば、煙草の匂いは格子の内から漂って来るとも考えられる。

煙草と言えば国府、国府と言えば薩摩藩士となるが、そこまで引きずって行くこともあるまい。

橋本 賛。あまり芸のない句なので、後解に持っていくたくなる。

佐藤 傾城自身ではないか。

41 万歳ににがやせ、らやあざハなし

清 正月三河から来る万歳は、家の繁栄を予祝する歌舞を舞い、かつその仕草は滑稽で、心の底から笑えるものである。其処には、苦笑いやせせら笑いましてや嘲笑いなどない、極めて純粋な目出度い笑いだけがある。

橋本 賛。笑いの類語づくし。

佐藤 賛。

42 ふらすこもちびり／＼と青くなり

清 「ふらすこ」は舶来のギヤマンで、頸の長い容器。

この容器に酒を入れて置き、ちびり／＼やると、顔は赤くなるが、容器の酒の減った部分は青く見えて来る。不純物の多い当時のギヤマンだからである。

当日の御しうきてつほうのはつね

天五信³

粕谷 すさまじいは、④色などさめきつて白っぽい（『広辞苑』）。

八朔の白無垢の句としたい。ここていう祝儀は白無垢そのものである。凄まじいは、引用した『広辞苑』の意で、即ち、白無垢の形容である。

句は、吉原の八朔ともなれば、その祝儀（白無垢）は凄まじいものである、との意。

八朔のしうきこんやの手をはなれ

安一満¹

山田 賛 なれど「祝儀するなら当日よりも、翌日吉日に祝え」（俚諺）を踏まえてはいないか。つまり、「よい事が重なるとかえって悪くなる（ことわざ大辞典）」で、「すさまじい」が生きてくると思うが如何。

大野 礎賛 「すさまじい」は暑い最中に白無垢を着ることをいうのではないか。

小栗 主題句の意味は「『当日の祝儀』ということが『八月』にあてはまる。それは『すさまじいことだ』」ということではないか。

「当日の祝儀」という成語は、管見の限り辞書類に見当らぬが、おそらく山田兄の指摘されたような意ではないか。

主題句と似たような構成の句に、

がある。これは四月の鉄砲のけいこ始めの時
が丁度時鳥の初音と重複することを詠んだもの
とみて間違いないだろう。とすると、主題
句は、「八月という月は『当日の祝儀』み
いなもので、八朔の紋日と月の紋日が重ねて
行われる。まったくもうすこいことだ、あ
きれたことだ」と吉原遊客の心情を詠んだ句と
解せるように思うが如何か。

清 山田氏引用の諺、及び小栗氏引用の例句
貴重。

句意は小栗氏説であらう。紋日が重なって
とてもつき合いきれないという客の心情かと
思う。

佐藤 単純に解し、礎稿賛。

46 子を捨てるやぶへ息子ハ金をすて

粕谷 「子を捨てる數は有れど親を捨てる數
無し」からの文句取だが、内容的には「子を
捨てる數は有れど身を捨てる數は無し」から
であらう。「子を捨てる數」とは「女兒を他
所へ渡す」形容で、転じて吉原などの遊廓へ
の身売りも含まれよう。

句は、吉原などの遊廓で道楽息子は金を捨

てるように使つ、との意。

子を捨る數とハ見へぬ五丁町

宝七・八・25

橋本 賛 貧のために身売りして（娘が身売
りして）金を得た數に、道楽息子は六枚の金
を捨てるという暗喩がある。

清 捨てる物にもいろいろある。孝行で捨て
不孝で捨てる。

佐藤 賛。

47 人よせにぬりたつて居る旅の留守

粕谷 あそこの家の女房は、旦那が旅で不在
なものであるから、まるで人寄せパンダの様に塗
りたてている、という意。

旅の留守こらへじやう無クつくりたて

明六宮¹

山田 「人よせに」とは何ともすこい表現。

小栗 「人寄せパンダ」の意味とは、少し違
うように思う。近所の男共の注目を集め、ち
やはやされたいということ。

清 同。つまり派手好きで目立ちたがり屋の
女房でしょう。

佐藤 同。

秀句鑑賞

同人吟 福本英子

— 6月号から

風薫る五月、小さい庭も新緑が艶々と輝きとても爽やかな風が通り抜けてゆきます。

そんな一日、秀句鑑賞のゲラ刷りがどさりと届きました。

以前故某先生から、勉強は良いが背伸びした無理な句はだめ、他人さまにも自分にも解る句、やさしい言葉で心を打つ句をと教わりました。それをモットーに今も川柳の先生、先輩の方々に従って励んでいます。

とは言っても新しい句が目から耳からどんなに入る此の頃です。おいてけぼりにならぬように、そして沢山の秀句と対峙して緊張しながら鑑賞させていただきました。

恩人が亡くなったのに腹が減る

高瀬 霜石

よく耳にする句と思いますが、恩人がとても大切な人でお腹など空かしては申し訳ないと恐縮している姿が浮んできます。

きっと生真面目な方で、遠慮しながら精進あげのお膳に付かれて、戸惑っていられるのではと、人の優しさが伝わってきます。

ビデオカメラへ姑は直立不動なり

川上 大輪

まだ幼稚園へ上らぬ子供たちがポーズをとるカメラ慣れの時代、お姑さまのコチコチの様子が伝わってのはのびてきます。ビデオカメラと直立不動の対照が良いですね。

人間を上位に据えた神のミス

諏訪 柳々

人間の奢りが最近話題によくのびります。動物も植物も万物皆平等と謳われている此の頃、神さまのミスにすれば何処からも苦情が出ません。さすが川柳の人と感心しました。

自由とはこういうものかバックめし

舟渡 杏花

やっと得た自由でのびのび出来ると思ってた参加したツアーなのに、行く先が全部バックですっかり当てが外れた杏花さん。こんなはずではなかったと、憧れていた自由との違いをつくづく感じられたのは。隣の芝生はやっぱりこちらから眺めているのが良いようです。

話下手だから口数多くなる

西出 楓楽

そうそう思い当ります。話をしている中に横道へ外れたり、元へ戻すまで口数はかなり多くなつてまとまりの無いこと、手紙を書いても脱線ばかりしている私に身につきまされて解りやすく納得出来る良い句と思います。

玄関を出ればおしとり夫婦です

川端 一步

玄関を出るまでどうだったのかしら、と気になる一句「仲の良い夫婦でとおすバスツアー」と言う句も以前ありましたが、何処でも家と外とは違うのがよくわかります。世間体を気にして生活している様子が出て面白い句になりました。若い人達には出来ない芸ですね。

おーいお茶答えなどない花の冷え

宮西 弥生

テレビのコマーシャルの場面が浮かんでくる楽しい句。そして少し佗びしさの漂う女らしい句の仕立に弥生さんらしさを感じます。独り住居で慣れていても誰かに返事を貰いたいことがよくあります。お茶にしますか、コーヒーにしますか、などと独り言で紛らわせています。「花の冷え」でしっかり心の中が通じる綺麗な春にして下さいました。

かぐや姫見送つたらし竹の花

江口 度

今年は何故か棕櫚や棕櫚竹まで沢山花をつけました。何となく無気味で木が枯れるのではと気掛りです。

竹は花をつけると寿命で枯れてしまつと聞きます。カグや姫を見送つたらしいと、お役目を果たした竹の一生を思い遣る優しい心で、枯れるなどと淋しい言葉を使わずに竹を案じる度さんに頭が下がります。

今が旬この私も竹の子も

田中 みね

女つていつまでも若いと思つていたいですね。「竹の子」としたのは少し遠慮がちに、あつと言つ間に過ぎてしまふ筈の旬、昔は女の適齢期もすぐに過ぎると、親にやいのやいのと急かされたものです。平成の今は死ぬまで旬と頑張りましょう。

赤や黄に色変えたがる青い鳥

山口 美穂

本当にそうですね、青い鳥が来てくれたと思つて良い氣になつていた掌の中で、何時の間にか赤や黄色に変わっている慌てよう。よくあることです。

青い鳥が逃げたと言わずに色を変えたがると促え方が素晴らしい旬に仕上がりました。

仏ではないので三度目はあかん

杉澤 汀

仏の顔も二度三度と言いますね。まして人の身、借金申し込みでしょうか、それとも良い人に甘えられたおねだりか、やっぱり駄目なものは駄目とはつきり言うのも愛情でしょう。誰もが知っている仏さまのお顔を借りて上手にお断りしましょう。

重箱の隅にあなたの綿ぼこり

上田 宣子

大らかでほつておいたのか、みみちちくて重箱の隅をほじくつたのか。「あなたの綿ぼこり」が川柳にしてくれました。ほんわかと伝わる温みが嬉しいですね。このユーモアたっぷりのお二人の関係、あまり深く考えずに温めていきたいですね、これからも長く続いていくお二人と思います。

見えた日とやっぱり違う雨の音

堀江 正朗

この句は誰にでも作れる句ではありませんね。目を閉じて雨音を聞いていても雑音が多くて、薄目を開けてみたり、雨音の聞き分けなどとても出来ません。強弱ぐらゐを判別するのがやつとです。戦官の正朗さんの長年の御苦労が滲み出た心の詩と頭が下がります。やはり実感句の強みでしょうか。

公約は砂の器に盛つてある

矢内 寿恵子

本当にそうそうと頷いてしまいました。山盛り公約は砂の器だったのね、道理ですぐ漏れたり何処かへ消えてしまつたり。公約を信じる方が馬鹿でした。

千羽鶴もう翔べそうな彩でなし

平田 実男

いつも千羽鶴の最後が氣になります。心を込めて一羽ずつ折った鶴が、彩褪せて部屋隅か、あるいは病室の何処かに吊り下げられたまま随分と日が過ぎて、目に触れるたび淋しき、遣る瀬なきが込み上げてくる様子が手にとる様に伝わってきます。頑張つて下さい。

平成の男子をさくら値踏みする

永田 俊子

ああ桜 男魂地に墜ちる

北山 悟郎

受付で僕の名刺が透かされる

岩佐 ダン吉

男性方の少し心細い句が目につきました。別姓も別居も大手を振れる時代に、逞しい男性に憧れを持つ私が古いのでしょうか。後の句のようになりませんよう祈ります。

夫とはとても身近な他人です

宮本 欣史子

水煙抄

河内天笑選

健康を貰った父母に有難う

高知県 百田 幸

あの人に聞けば大抵知っている

何よりも若い気でいるのがくすり

鍵かけた筈の本心顔にでる

オイコラッと呼ばれいつしか五十年

大阪市 中澤 伽羅

食べに行く店も決まって通り抜け

わたしにはいやな春だなクシヤミ攻め

種蒔いた芽吹いてきたと書く日記

諺を上手に母のお説教

透明なガラスに頭ぶつつける

和歌山市 森口 美羽

ヒロインのつもり鏡へ演技する

愛の脆さに釘も効かなくなってくる

誉め上手な愛が私を離さない

ときはきと動いて太る暇がない

子の投げる球はしっかり受け止める

少子化のこれから担ぐ荷が重い

八尾市 與田 明

コーヒーで結ばれ酒で固められ

しんどいな平均寿命また延びて

老いふたり長期連休もてあまし

鯉のぼりダラリ昼寝の時間です

大阪市 立藏 信子

人気者に共通点がひとつある

億の絵を千円でみる美術展

言えなくて幼い愛を抱いている

君だけに弱味を見せて生きている

千円で一日くらすこともある

横浜市 三村 八重子

鈍行のレールの先は春霞

手に受けて口で迎える岩清水

悠久の雫で作る地下ロマン

偏差値と別れたカバン軽くなる

背中搔く場所知っているクジラ尺

篠山市

円増純子

高知県 桑名孝雄

帰ろかなふる里が市になったから
今日からの誇り田園文化都市

伝統がいきづく街を誇りとし

炎の中へ投げる懺悔の二つ三つ

骨の髄まで沁みついている個性

大阪市

星野ひさ

吹田市 三浦 憩

追伸でまだ弾んでるハネムーン

日向ぼこ淋しい顔は似合わない

のんびりと過ごそう明日はクエスチョン

トーストがふっくら焼けて今日ラララ

あしたまたつづき書こうか遺言書

羽曳野市

山本 たけし

愛媛県 藤山 太朗

忘れむと瞑る臉に浮かぶ君

待つことも待たせる事もなく茶房

他愛ない話弾んでいるジュース

折にふれヒートアップもする二人

抱き寄せる勇氣もなくて焦がす胸

和歌山市

武本 碧

三重県 尾崎 勤

還暦の駅を元気で折り返す

父と子の垣根を払う将棋盤

額にして取って置きたい嵌まり役

偏差値で人の未来は計れない

控え目に煮えて小豆は満ち足りる

まだ懲りぬ株式欄へ目が光る

休肝日一合だけの許可が出る

肝臓が休暇届けを出し渋る

俎の鯉だ胃カメラ腸カメラ

あの店この店どうしてるだろママの顔

吹田市 三浦

習っても使いたくない六法書

憎らしい人だ洗ってやろうかな

出す物を出せてゴミの日ホッとさせ

日本の良さを地酒に教えられ

やすらぎを大事にしたい新茶買う

愛媛県 藤山 太朗

橋脚の一番底よありがとう

ぶつぶつと仏に話す冬遍路

池の面にぼつりぼつりと降ってきた

きりのない思案の果てに切手貼る

母さんの私語は悲しいことだろう

三重県 尾崎 勤

するめ噛んでると頭が冴えてくる

洋風に建てて子供をつなぎ止め

トイレ貸す見返り狙う道の駅

見えている魚数えている甘さ

焼き印を変えて各地の名産に

糖尿と減量という夫婦箸

札幌市 三浦 強 一

洋画から学んだ青春の文化

災害のたびほぞを噛む危機管理

フルムーン湖畔の宿もひとつ入れ

自分史にリストラという一頁

宇部市 高山 清 子

約束を信じた小指焦れて待つ

辞書に無い言葉で話すコギヤル達

眠ってる欲呼びさます甘い罠

若作り首筋の皺邪魔をする

初デート遺影の夫に詫びて行き

新潟県 高野 不二

三割減反で百姓生きている

呆けという言葉がこわくなって来る

利子よりもティッシュの方が高くつき

鐘一つがあつて楽しいのだ自慢

連休が兼業農家の農繁期

野田市 那賀島 雅 子

塗りたての壁とあるので触れてみる

学舎は想い出秘めて朽ちてゆく

資源無い国と言いつつゴミの山

はじめから当てにしない介護法

散歩道よその時計が鳴ってるよ

売り場からだんだんとエンドレス

千葉県 大川 晩 翠

庭園の見事な藤は借りた物

差障りないお互いに傷を舐め

子供の日田植えを教え後継者

その音を聞くと虫酸が治まらぬ

秋田県 湊 修 水

待つことにいらだっている四ツの鳥

金婚に夫婦茶碗も元気です

里帰り囲炉裏かこんで茶碗酒

みちのくで大会嬉しさこみあげる

使い捨てで緑の野山撮りまくる

福岡県 岩崎 和 女

乗せられてはまった足が抜け出せず

愚かさは己を責める他になし

唇をかむほど悔し自閉症

寝たきりの母へうなずくだけで暮れ

一言がみんな無口にしてしまい

米子市 猪森 スミエ

知恵借りに行って隣も鍋焦がす

勿体なくてつい包装紙コレクション

弟がいて応援歌響き合う

鍵掛けて回る私の守備範囲

素直さに添え木一本しておこう

米子市 足 立 由美子

太陽にそっぽ向かれた事がある
よく笑うそれでも門に福が来ぬ
山坂を越えてなおさら弾む毬
包み方だけで性格読みとれる
新聞に包んだ匂が顔を出す

鳥取市 福 永 ひかり

事故現場すまぬと言った方が負け
退職をするまで白髪見せられぬ
はいチーズ一番若い今日を撮る
マイペース足はしっかりつけている
手や足で学んだことは忘れない

鳥取市 宮 脇 道 子

おさげ髪自転車とばし夏匂う
熟年のハードル越えて欲が出る
母の日に孫もカーネーションくれる
峠から鳴いてる小鳥夏間近
極楽は短く終る玉手箱

鳥取市 松 本 つね子

姉妹五月節句に女兒を産む
福祉サービス弱い者から遠ざかり
カラオケにはまって心若くなり
老い二人料理持寄り夕の飯
花植えて春を楽しむ寡婦の庭

鳥取市 録 沢 風 花

アカシアの雨が少女に戻らせる
初節句らしい黄金鯉光る
ストレスの甲羅を干して気が晴れる
ぜい肉がトンとなかったその昔
南北の境 不穏な雲走る

鳥取市 中 村 金 祥

核実験ゴールはどこにあるのです
お似合いの夫婦も別に姓を持ち
カラオケで心の扉開け放つ
木簡に都氣質の字が浮かぶ
古々米よ泣くなよ今に飢餓が来る

鳥取県 橋 谷 静 江

前向きに生きて人生楽しもう
平凡に終った日記書きにくい
藤棚の花にみとれて食べすぎた
呼び止めた孫デート中とは知らず
一つだけ特技を持って生きる匠

鳥根県 菅 田 かつ子

晩酌は梅酒夫とさしむかい
大輪の牡丹に圧倒されそうな
日足延びにわかに騒ぐ恋蛙
お話がとぎれて最早大いびき
倅せのまんじゅうひとつと新茶の香

島根県 武 島 ちよえ

このあたりだろう噂の震源地
陽の昇る方を選んで岐れ道

孫にまで脛かじらせて元気です
テレカード送って電話待っている
母の日に黄色いバラの宅急便

島根県 松 本 聖 子

勤行を唱えて涙滴るよ

先立たれ憶えば至らぬことばかり
春なのにすっきりしない吾が心
立ち上がりくよくよしない事にする
お喋りは巧いがまぬけたとこがあり

島根県 福 間 博 利

飽食で忘れかけてた労働歌

孫の居る町へ梅干持っていく
古い二人膝掛けもらう空の旅
棧橋をはなれたとたん旅情湧く

お互いにあげだこげだ(ああどうだ)と立ち話

横浜市 芦 田 鈴 美

口開けている富士山の上を飛ぶ

故郷で修正をする自分流
手をさするだけしか老母にしてやれず
親バカをコレクトコールで呼び出され
おさがりを待たれて袖が通せない

横浜市 田 中 笑 子

春の彩着るなら少しグイエット
木々の葉のささやきを聴く芽吹きどき
余ってる元気を友へ分けに行く

車座がくずれ始めて宴佳境
癌検査結果出るまで酒自重

横浜市 小 野 句多留

バーコード俺につけたらいくらか
ホームレス福祉施設の粹嫌い
無料バスすみませんねといつて乗り
冗談がわからず話つながらず
嫁姑父が間に丸くおり

横浜市 保 田 絹 子

うまい汁口八丁に吞まれそう
肅正のニュース絶えない世紀末
瀬戸際に心許無い生返事
涙にも酒にも弱い父を見せ
俺よりも先に逝くなと虫がいい

横浜市 秋 元 和 可

存在をアピールしてる咳払い
雑学がとぎれた話つないでる
山菜と今年も会えた五月晴れ
カーネーション届いて亡母を思い出す
心まで整形メイク出来ません

横浜市 近藤道子

大胆なへそ出しルック眼をそらす

中年の指パソコンで恋もする

冬山を甘く見てたと叩かれる

モノクロの映画の余韻今も抱く

山のオゾンたっぷり吸って肺洗う

横浜市 金森徳三

姫めだか孵化一年のサバイバル

お隣のふとん気になる俄雨

報告をすれば責任上に行く

廃校の噂に揺れるビルの街

もう無駄に出来ぬ日々追う癌告知

横浜市 布山嘉信

啄木忌しみじみ職のありがたさ

喧騒が続き桜が不眠症

雑草も芽吹きるときは華の貌

年金の軽き諭吉にすぐ別れ

ぺんぺん草愛せない名に春のうつ

東京都 清原悦子

見守ってくれるからこそ出る元氣

WOWOWを見たくて英語習ってる

ナチュラルな化粧で若く見せている

幸せになりたいからと会いに行く

果てしない道に悩みがついてくる

八王子市 井上京一郎

絵手紙に託す五月のみどり色

新緑が褪せる渋滞二十キロ

自動ドア待たせて傘の水を切る

上りには軋み下りは笑う膝

凡人の右脳左脳でつつがなし

大阪市 三浦千津子

老いてなおチャレンジ夢の燃え残り

我慢するこれが私の特技かも

充電完了心はすでに翔んでいる

春よはる高ぶるものがある夕べ

最後には金がもの言う孤独感

大阪市 亀井円女

課題は一つ嫁の負担にならぬよう

残念ですがドナーになれぬ年となり

子を嫁に託してからは極楽だ

クール便あれやこれやと温い嫁

弱った足を口が助けてくれている

大阪市 中村叡子

春愁に優しい夫邪魔になり

デパートの地下食品部市が立つ

極上を一度新茶の出る頃に

明日にと用事を延ばす春の寒

若者の歌番組に老いかこつ

大阪市 榎 本 日 出

背広にも袂があつて袖の下
日記には書けないことを胸に抱く
主人にもひとり暮しの体験日
脳みそをからっぽにして旅に出る
トイレにも相田みつをの詩を読まし

大阪市 一 本 勇 太

朱を溶かす絵皿にまたも齡忘れ
蜥蜴の尾その一片を責めたとして
レリーフに安らぎがある涅槃絵図
風向きが変ると嘘が落ちてくる
黄昏の愛は無口な方がよい

箕面市 釣 部 高 希

碁敵が居ればと思う春の午後
ブライドは捨てても夢は持ちつづけ
今ならば長生きよりも恋に生き
結婚しても同居はしないお友達
愚かさにやっと気がつく七十一

高槻市 乙 倉 武 史

学校が怖い野放し銃の国
初歩的なミス病院も怖くなる
マスコミが煽る熟女の大喧嘩
身から出た錆は他人を恨めない
花咲いて故郷恋しホームレス

和泉市 横 山 捷 也

ソロバンに合わせぬ菜園無農薬
うつむいて女がセダンから降りる
ささやかな内緒を持っている二人
タコ焼きを大阪弁で買ってみる
しばらくは休ませてみる夏の敵

富田林市 中 井 ア キ

愛されていると信じて咲いてくれ
失敗に触れず一途をほめられる
カルチャーで眼を開かれた妻の乱
愛してるなんて言うからややこしい
フルムーン財布は妻のものと知る

大阪府 澤 田 和 重

募金箱へ幸せお裾分けをする
後輩が楽に資格を取ってくる
理屈では妻には勝ったことがない
あの話ジョークだったといなされる
悪童の頃を出世が美化させる

河内長野市 大 西 文 次

資産など無いが遺言書いておく
恋人の声を受話器が聞き分ける
付き合おうと言う名目で飲むお酒
人生に定年などはない米寿
順不同にもけじめあり偉い順

河内長野市 印 藤 智 子

連休に隣はどこへ行つたやら

連休を年寄り二人持て余す

母の日のカーネーションに少し飽き

腰痛の友と痛さを比べ合い

春風に老女も少し移り気に

泉佐野市 大 工 静 子

ゆっくりと度胸をきめた大手術

院長も我が家と同じ壇家なり

大恩のある弟に先立たれ

食事前お尻の重いお客様

豆の蔓椿の枝を抱きかかえ

岸和田市 村 垣 鹿太郎

一坪で自然楽しむ祖父の顔

のんびりと点滴同士無駄話

桜シャワー全身浴びて巣立ちゆく

歩達が皆成金の夢を見て

外れても楽しき夢を宝くじ

堺市 荻 野 正 雄

羽毛でも炬燵の温み欲しい足

頻尿で粹な夢など見る間なし

鼻歌が溜息になるへば将棋

嫁が捨て姑が覗いたごみ袋

捨て兼ねたブレザー案山子に着せてやる

堺市 見 本 ちや子

ぼちぼちと進んで行くもまた楽し

ゆううつな日損して生きているみたい

お洗濯今日のもやもや流す水

どんどんと楽しみ増やすカレンダー

苦しみを乗り越えた日の赤いバラ

堺市 梶 本 哲 平

湯豆腐を差し向かいして老夫婦

おみくじを見て公然とチューしてる

おおかたの企業は脛に疵をもち

窓あけて寝よかみどりの風沿びて

身蟲屑でなく日の丸は美しい

堺市 矢 倉 五 月

アイラブユー孫からもらう投げキッス

ちっちゃな笑顔そこが幸せ発信基地

禁酒ひと月傍もストレス溜まり出す

御詠歌を楽譜で勉強しています

遠景の灯大事な友の街

堺市 村 上 靖 雄

肩書がなくなり名刺作らない

競い合い夫婦で孫にプレゼント

青い目をして流暢な大阪弁

店仕舞いセールばかりが花盛り

朝顔の一輪ごとに話しかけ

羽曳野市 川口信子

茶を入れてみても話のないふたり

コーヒーではじまる愛と終る愛

水赤く染めて金魚のせりの声

旅の宿サービスというほたる籠

おたがいに變つてないと久しぶり

羽曳野市 森田四三郎

無責任報道目立つ事件記者

福耳で何が不足かホームレス

無愛想の自販機ガタリ缶を投げ

いじめ自殺 駆け込み塾を作れぬか

可愛いなと言つてもらえぬブルドッグ

羽曳野市 安芸田泰子

蟻り解けたとたん腹が減り

他愛ない話の中に棘もある

華やかな思い出包むたとう紙

閑人へ噂話が吹き溜まる

きっぱりと別れた人と夢で会う

羽曳野市 西村りつえ

いざとなれば薬一本が見つからず

宝船に乗りかえたのが泥の舟

欲な手が旨い話にすぐ握手

未練かな何度消しても浮かぶ顔

横に振る首も太なり母強し

藤井寺市 岸本寿代

亡き夫のいい事ばかり思い出す

捨てる人拾う人あり粗大ゴミ

誕生日くるたび若くなりましよう

広告に魅せられていまくやまれる

能舞台心の汚れ洗われる

藤井寺市 太田扶美代

彼岸花悲しい記憶蘇る

甘い言葉へ溶けてしまった自尊心

春満開こんな小さな庭だけで

街は今嘘の流行歌があふれ

鯉のぼり序列はちゃんと心得る

鳴門市 八木芳水

へそ曲り同士ウマ合うコップ酒

教え子と再会至福なる宴

カラオケで黒ネクタイが供養する

特ダネが限界超えて罪つくり

まだ住める家を機械で踏みつぶす

香川県 瀧井勝

好奇心行かずにおれぬ向う岸

女房は正直嘘がすぐばれる

慌てると単細胞になっている

失敗があつて思わぬ道も知り

女故どの子も母になる資格

香川県 向山治延
急がずにのんびり行こうフルムーン

真夏日だ今日はどうする万歩計

捨てないで川岸が泣くゴミ袋

腰痛も宇宙へ行けば楽だろう

傘寿の祝 母が好みの白い花

愛媛県 安野 案山子

機械化に充実感がない田植え

宇宙から眺めてみたい新世紀

一仕事終えた安堵へ風邪を引き

とんでいる噂の女から電話

曖昧な返事で役所煮え切らぬ

愛媛県 中居 善信

裏切ったおんなを許す還暦よ

試されるように小役が山と来る

ナスかぼちゃ土は答えを出している

農政の歪みに土が痩せている

苛立ちが土の温みに萎えてくる

今治市 塩路 よしみ

最高の幸せ瀬戸の海に住み

つまずきをバネに意欲を膨らます

あきらめがかんじんなどと言う他人

ハミングの母は陽気な台所

白旗を振れば肩の荷軽くなる

かたつむり方向音痴らしい跡

百合の白生き生きとして陽を弾く

卵酒妻はほんのり桜色

或る時は胸で笑っている仁王

叫びたい心抑えて不整脈

兵庫県 西山 八重子

独り言一寸聞いてよ野のすみれ

それなりに燃えた日もある落椿

変化球ばかり投げてる倦怠期

転んだら起きるしかなし凡夫婦

篠山市猿や狸も出て祝う

尼崎市 軸丸 勝巳

極楽浄土見て行けと説く当麻寺

親の夢名は大輔と決めている

誕生日一番風呂は妻のもの

歳かいなアあちこち五体不満足

ふる里会 少年になり渾名とぶ

尼崎市 田辺 鹿太

飼い主の方が犬よりよく吠える

関白のボクは今でもオーイお茶

父の日は誰も知らない間に過ぎる

一区間だけの恋です一目惚れ

吸殻を溜めて連休ひとりぼち

兵庫 県 広 瀬 房 江

嘘つきと叫びたくなるのだ仏
混浴と聞いて浴衣がうろたえる

私より先に死んだら殺します

月ヶ瀬のくず餅恋し御堂筋

旬の味だけのご飯にウツが消え

神戸 市 船 津 とみ子

自転車の主は逝きぬさくら散る

雨に濡れ風に打たれる自転車よ

杖ついで見舞いに行ったことがある

あれは冬木枯しの吹く坂上る

付き合って四十余年風止みぬ

兵庫 県 山 本 泰 子

わき道にちよつとそれたい月明り

欠席でうわさ話の主人公

素手だから心を分つ車椅子

母の日のばあさん一人残される

乗りたいなあロマンズ誘う口車

和歌 山 県 杉 山 精 子

B面の日の当たらない私小説

ワイン呑む知ったかぶりのフルコース

テッセンの白眩しかり五月晴れ

少しずつ自我を削って丸くなる

傷つけぬように本音は伏せておく

和歌 山 市 上 地 登美代

オクラの葉揺り籠にして青蛙

おだてられすぐ木に登る癖がある

ジャスミンの香りに呼ばれ振りかえる

欲のない顔ではあちゃん日向ぼこ

ひと言に平常心が乱れだす

和歌 山 市 木 村 親 路

介添えの妻にわがまま言える幸

老いて赤娘時代は黒モンペ

トビがタカ生むはずがないあきらめろ

涙腺がまたゆるくなるニュースなり

逢うて来たほとぼりさます歩道橋

和歌 山 市 吉 村 さち子

品と値比べ買物はかどらず

倅せの形で大豆煮えあがる

ダイレクトメールが夏を連れてくる

友情に甘えてばかり借りばかり

条件が良すぎて肝を据えていく

和歌 山 市 水 田 秀 男

大阪の街は地下から人が湧く

税金が振興券に化けている

粗衣粗食忘れてしまった日本人

喧嘩だけしないでおこうフルムーン

弱者には厳しい風の吹く日本

大阪市 中井正秀
福耳にこことよく聞くおべんちゃら

お隣のラッパ水仙嬉しそう
貴方のは苦勞のうちに入らない
ボランティアしてから暮し弾みつく

北九州市 岡田幸生

旅人の貌で箸割る駄うどん
体調のよい日の妻は油売り
重い腰変らぬ妻のダイエツト
竹割ったようだと言気ほめられる

唐津市 岩崎實

正当を楯に戦火の打ち合わせ
好天に車の渋滞あるばかり
メモ書きもなくて出かけるようになり
えんどうのはしりを先ずは少しだけ

京都市 高島啓子

石臼のもう唄わない労働歌
お茶だけのはずが箱寿しまでよばれ
孫出来る予定日を書くカレンダー
母親に愛されたらしフェミニスト

京都府 前上英一

出稼ぎに幸せそうな窓明り
渋滞の前後ベントに挟まれる
朝シャンの香りほのかに電車待つ
難民の涙が重いコソボの絵

京都市 勝山美千代
新茶入れ至福のときの風なごむ

子育ての苦勞の時が花だった
若者に精氣を受ける三世代
氣が弱く本音が言えずいつも損

京都市 高村吉之助

春の芝生素足になって踏みしめる
ぽっかりと時間あいたが金がない
愛乾き日々の惰性で米をとぐ
やさしくも厳しくも森にいだかれる

京都市 三宅満子

野草摘み野に寝て土の氣をもらう
オオバコの根のしぶとさを真似したし
フキタケノコ いっぱい食べて春惜しむ
筍をたっぷり炊いて子に送る

奈良県 出井澄子

労いのことばに眼熱くなる
一日の話に花が咲く夕餉
的を射ることばで笑い誘う孫
旅行着にいかかと嫁の贈りもの

奈良市 田中賢治

不景氣もダンゴの歌で痛み止め
遊学に反哺の孝を妻が説き
出来ぬ夢笑って聞いてくれた母
五月晴留守電押して大掃除

三重県 佐々木 森 哉

ころ病む私に昏れていくみどり
僕の過去聴かせて諭す酒を酌ぎ

自画像は酒で描いた抽象画

少年兵老いてころに鳩を飼う

尼崎市 清水 久美子

シュミーズで泳いだ頃の海がない
エリートも隠し持つる五月病

死角から家族守っている夫
母の日も父を労る母である

尼崎市 内田 美也子

孫たちを呼び込んでいる子供の日
うわさには口用心の戸を立てる

ひとり身をゆっくり包む臘月
せかされて旅立つこともない余生

尼崎市 尾宮 弘治

寂聴を膝に見惚れる寺の薔薇
リフォームの跡を見せない裁ち鋏

同居して家の段差に手を入れる
夫には聞かせぬ娘との内緒

尼崎市 森 安 夢之助

さわやかに笑う私は馬鹿みたい
腹の底割って見せたいときもある

誕生日一人で祝う縄のれん
イベントのお陰で駅が動きだす

伊丹市 延寿庵 野 鶴

捨てるにはちっとおしいとまた拾い
可動堰稚アユ輝く春の彩

マスクして友を呼んでる花粉症
兄嫁が蒔絵で描く未来絵図

宝塚市 飯西 ミサヲ

鍵かけて確かめてみて抜き忘れ
シャツパンツいっしょに回ることに慣れ

健康食 食べ過ぎちゃって胃が痛む
寒いけど五月だからと服替える

三田市 北野 哲 男

ペランダの鯉の尻尾に撫でられる
保育園ウマの合う子が居るらしい

不肖でも相続権は知っている
客ヨイシヨ 仲居ヨイシヨの笑い合い

川西市 田中 喜 俊

顔みしり話はあるが名が出ない
こだわりを忘れて友と茶をたてる

美人だが年相応のお顔です
万歩計挨拶づくめで進まない

篠山市 仲井 素 水

大阪府背負うノックは今太閤
老衰の計報哀しいおない年

老い独り目刺一匹焼いてすみ
好き気まま出来る吾が家が天下一

兵庫県 北川 とみ子

陽がおちる人の噂も消えて行く
花冷えの財布に今朝の茶がしぶい
おだやかに流れを変える姑の舌
欠点を許し過去など覗かない

和歌山市 上地 忍

五月雨に花房重く垂らす藤
鳩が食うその分足して豆を蒔く
連休を雨にも負けず使い切る
犬を飼う話に乗らぬおばあさん

和歌山市 和田 美寿子

暢気者渡る世間は吾のもの
年金があつて社会に感謝する
浅はかな世渡りいつも赤信号
金よりも眼鏡を探す年になり

和歌山県 村中 悦男

手術後の歩幅気になる試歩の道
灰色の返事巧みな公務員
顔色を変えないうそにだまされる
ステッキを持てば振つてもみたくなり

和歌山県 中村 君枝

蹟いた痛み忘れて欲の皮
開店へ早早夢のモーニング
頬染めてばあちゃん恋をひもときぬ
絵手紙に挑戦したい師を探す

和歌山県 坂東 和代

ギブアップお前の勝ちだ夏草よ
巣立ちした子の部屋シャツが吊つてある
待合室昔の美女がよく喋る
電線の鳥もあきれる長話

倉敷市 家守 政子

あれこれと気が利き過ぎて煙たがれ
七人の孫の行方に夢を組む
夫婦げんか寡婦のわたしは羨まし
夢追うてよろよろと古希を生き

岡山市 清水 金太郎

病院で旧友に逢い元気がい
竹の子に糠をもそえて子に届け
利子の事言うほど金は持つてない
子も孫も悪いところは俺に似て

鳥取市 有沢 せつ子

大きめの制服親の期待着る
小心ですぐ反省の顔になる
安売りのふと採算を考える
初孫が笑い家族が遊ばれる

鳥取市 夏目 健一

小さな差気づかぬうちに大きな差
馬鹿になりきれれば人は一人前
風船は針の穴でもいのちとり
放された時から稚魚は岐路に立つ

鳥取市 田 賀 八千代

もしもして女が買える世で怖い
耳だけで足らず鼻までリング付け
シヨックです命あずけた医療ミス
悪友が囲みふる里捨てきれぬ

鳥取市 谷 岡 清 子

思い切り喋りストレス軽くする
嫁さんが裏で気をもむお人好し
街灯がぼんやり口づけを
ストレスは地球にもある核兵器

鳥取市 山 本 益 子

ボロボロの心も癒す演歌好き
リストラも何処吹く風の公務員
怠らず書いた日記は生き暦
正面で見る団子鼻憎めない

鳥取市 森 本 和 子

端正な祝辞を受けて娘が門出
我慢くらべが金婚祝う年となり
俺の腕止り木にして眠りなよ
胎動も花見に浮かれ踊りだす

倉吉市 大 下 智 子

もみじの手一つ指出す誕生日
母の膳一つ残さず食べている
素直にはなれぬ夫の朝帰り
高かった円が安くて国揺れる

倉吉市 牧 野 芳 光

不揃いの花えこひいきしたわけがなく
心配もなくて気持のよいいびき
停年が先かりストラが先か
桜散りようやくホッと春の山

米子市 小 塩 智加恵

鏡付き風呂に戸惑う孫の家
性格も背丈も違う子が三人
歯痛まで夫唱婦随でくる不思議
今日までを支えた脚が弱音吐く

米子市 森 脇 麗

さまざまに人間模様映す駅
更年期日替りのわが心模様
香ぐわしき藤棚揺れて酔いそうな
雨雨雨 私のうつつが倍増す

鳥取県 西 垣 美知子

汗拭いた私の顔が好きになる
古里はお金で買えぬ味がある
時々心洗う本を読む
することもやがてなくなる日が怖い

鳥取県 藤 山 弘 子

情報へアンテナ広げ花見する
兄たてて家族会議の真つ最中
長男を上手にのせる妻がいる
ピカピカの補助輪はずし風を切る

松江市 小川 注 湖

自慢話少うし距離を置いて聞く

鮎漁の解禁が呼ぶ背伸びする

キヤミソール胸が揺れてる重いだろ

忘れ事元にもどって考える

松江市 山根 邦代

人気度を見るかのような選挙戦

惚けたかなと感じることのふたつみつ

無理するな無理しないでと声かける

心配をかけたなくて笑顔見せ

出雲市 梅 ミツエ

刻刻とせまりくるよな夢を見る

花びらに雨の知らせの雨蛙

十六夜に息子の幸を祈ってる

我が庭に赤黄ピンクが勢揃い

川崎市 和泉 あかり

疑って吞んだクスリも効いてくる

お喋りが苦手で妻を連れている

肥えてきた娘に妻をダブらせる

ときどきは自分のために手を叩く

静岡市 大村 正雄

遊び方孫に教わる新玩具

リストラで積る努力は水の泡

落選の後に待ってる逮捕状

青い空富士をうしろに献茶摘む

静岡市 中西 雅

眼くばせはうなずきなのかノーなのか

おもちゃ屋で座りこんでるやんちゃくれ

優曇華の花咲いていたあああの日

初夏の風陸橋越えて渡りぞめ

横浜市 長島 亜希子

ビキニでも地中海なら泳げそう(スペイン旅行 4句)

日曜のミサ村中が盛装で

スペイン式食事に太る訳を知り

願かけて撫でるマリアが光ってる

横浜市 豊田 羊子

連絡口でくなくてくと歩かされ

整頓をした部屋何故か落ちつかぬ

改札のブザーに視線向けられる

二階から魅を落としたい鯉のぼり

横浜市 鈴江 純子

産声を待ち侘びている缶ビール

梅雨空を蹴散らし孫がやって来る

ささくれた心を癒やすありがとう

ときどきは会いに来るよと子が巣立ち

横浜市 北沢 街湖

足裏のツボも商魂見逃がさず

朝採りの野菜へ妻の腕まくり

地主からホイと竹の子二三本

バイキング女盛りが群れている

横浜市 山下省子

パンジーの笑顔に負けぬ園児たち

夫には悪いが昼のいいお風呂

障害は一級ですと悪びれず

どうせなら笑顔でご飯作りましよ

横浜市 山梨雅子

パニックが過ぎても不眠残される

振興券ボクの奢りとレストラン

目覚しを兼ね乱暴に雨戸繰る

連休はどこへ消えたか人まばら

今治市 中村好恵

泥かぶるつもり役を引き受ける

忘れもの頭を少し巻きもどす

空爆のニュース恐怖が背を走る

壁の傷巣立つた子等の声がする

今治市 加川はく文

木も仏石も仏に見えてくる

運のいい石が美人の胸でゆれ

わたくしも案山子も淋しさは同じ

鬼瓦三代前を恋しがる

今治市 渡邊伊津志

風の向き関係のないほどに古い

対象を写す自信が揺らぎ出し

大時化のお陰養殖魚が売れる

小心を海の広さに笑われる

愛媛県 黒田茂代

娘の指へならば素直になるピアノ

娘の芯の強さ義足の苦に触れず

とつときのミニが履けない娘の義足

復職の娘を空港へ送る春

松山市 山之内八重美

うやむやな話の裏にある打算

スタートでもうライバルと言うさだめ

良く笑う暮らし長寿の薬かも

一言が出ない鈍さがもどかしい

香川県 松村輝夫

踏ん張れば後がつかえる老いの坂

開通の橋がゆっくりゆれている

ジュース入れ乾杯だけは友にする

毎日の日課仏壇数珠があり

箕面市 唐住実

冗談のように聞こえるあいらぶゆ

筋書をそらす答弁続いている

手間かけて飴を売ってた紙芝居

鉛筆の削らぬ端も芯はあり

高槻市 江原秀夫

大声の羅漢を取り巻いている無口

鳴るテレビ妻の寝息にそっと消し

嘘少し混せて和やか午後のお茶

木には木の主張が染める花の色

病室は七階 花見は見おろしで
入院に当用日記と川柳塔
豊中市 みきわきみ

ペースメーカー白内障の次はなに
連休を楽しむ人と稼ぐひと
東大阪市 今岡貞人

吹田市 後藤志津香

冷泉家 和歌のこころに魅せられる

貝合わせ雅の世にへ思い馳せ

竹の子を掘りたてですと隣から

ガーデンの萌黄の楓胸を撫で

東大阪市 北村賢子

白萩咲いて幼き日の友の墓

齒ぐるまのアチコチ狂い出してきた

ウレシクテ思わずレモン厚く切り

まあまあと目立つところへ座らされ

八尾市 井尻民子

昼寝する時間も余る定年後

菊判もCDもある広辞苑

咲きはこる妻の丹精小さき庭

タイガース勝つと紙面が踊りだす

交野市 森本益弘

脇役に徹してみえた満足感

お人好し ゆえに今だに平街道

人情に溺れて足をすくわれる

ローン終え城主あちこち要治療

遺言状書く気持には程遠し
お早うの一言実感あふれでる
定年でお払い箱のゴマスリ器
東大阪市 今岡貞人

ところどころ言う本論は甘くない

東大阪市 北村賢子

思い切り酔って泣きたい時がある

ふりむけば貧しかったね若かったね

悩むのはもう止めました青い空

生き上手仮面いっぱい持っている

八尾市 井尻民子

言い訳を眉間のシワが聞いている

赤ちゃんのずしりと重い存在感

続発の事件風化も早くなる

ストレスがビールの美味さ覚えさせ

八尾市 山本宏

出番きて何はともあれ深呼吸

返せない恩を山ほど背負ってる

喜びを祝う言葉の裏に棘

てのひらを返す他人の冷たい目

堺市 和田つづや

早寝した朝は不思議に起き辛い

珈琲が香るお早うブローグ

鳴き止まぬ野鳥は高い樹が好きだ
上品な顔でなまこを食べている

富田林市 山原昭水

隣ピアノ前バイオリンうち尺八

グルメ旅俺はやっぱり妻の味

呑んでるねやっぱり医者に見やぶられ

友人に俳優がいて自慢する

岸和田市 木村正剛

抱き癖をしつかりつけて返します

てぐすねをひいて待ってる妻の顔

車椅子どっちが先に乗るのかな

喉仏お前もビール欲しいのか

八尾市 中島春江

子に頼る事思わずに興味に生き

古稀になりひた走るのはもうやめよ

今笑顔枕の濡れし日もすぎて

芝居見て流す涙は幸せよ

羽曳野市 永田章司

府知事選 選出出来ぬもどかしさ

意味不明のカタカナギャグに孫笑う

ウルフにはまだあどけない甘い顔

ユース勝ち二〇〇二年に希望の芽

羽曳野市 川田晋

形見分け思いも寄らぬガラス玉

定年後下戸晩酌の手が上がり

脱税を考えるほど売れもせず

いかなこの釘煮を提げて呑みに来る

河内長野市 水谷正子

ガラクタを捨ててガラクタ買って来る

好きだから素直にハイと聞いてます

その調子貯金しつかりタイガース

また一人ほろびの美学計報欄

泉佐野市 稲葉洋

ハイテク犯増えて十手じや間にあわず

物証に覚えがないとにらめっこ

老い先もおおよそ見えた持久力

不審船草の根わけてともゆかず

松原市 和気慶一

草分けののれんも消えた此の不況

手鏡で見事に作る七変化

七連休空気のうまさ知らされる

悲劇には何故だか似合う花吹雪

富田林市 大橋鐘造

根回しが効いたか今日の風当り

六法を読んで癒した不眠症

割り勘の財布気になる三次会

エレベーター互いにそっぽ向く他人

大阪市 松岡千恵子

愛し子に父が勧めた遍路旅

庭掃除鶯の声聞きながら

今日もまた苦楽無量に生きている

借用書あなたの胸に預けます

大阪市 尾崎 黄紅
自己主張啄木さんもかなわない
行進曲歩きにくいな老いの脚
知っていてそうかそうかと聴いてやる
三球三振見事な振り上手

大阪市 伊藤 博仁
ひたすらにプールを歩くひたすらに
戸を開けるコツを教えるインターホン
竹の子が風邪引かぬよう紙布団
防犯灯家主の頭を真似てきた

大阪市 安達 はじめ
金婚へ子らが手配の旅の宿
さわやかな風に誘われ旅支度
花菖蒲雨にうたれた舞姿
ペランダが満艦飾の梅雨晴間

大阪市 大川 道子
お見舞のまた来ますねと空手形
来客の顔みてランク決めるお茶
テーマが決まらず画布は白いまま
変人と見られた個性強すぎて

堺市 藤井 一二三
吉岡美房氏を悼む

男ひとり若葉のなかを旅にたち
「帽振レ」で送る同期の髪白し
妻の待つ浄土へ友の急ぎけり

堺市 斎藤 さくら
五月晴れ結婚祝う鯉のぼり
待ち合わせ携帯電話主婦も持ち
早起きのつばめの夫婦仲が良い

高槻市 西谷 治三郎
相談をされたことない定年後
おいお茶なんてこと俺よう言わん
五段階介護保険の通信簿

豊中市 岸田 知香子
午後の雨連休の地下販やかに
競争で歯医者通いの老い二人
初夏の風につられ手が出る花いじり

八尾市 鷺見 章
初夏の陽のまばゆきまでの光かな
吹く風は吠えるが如く泣く如く
涙する事が世間に多すぎる

八尾市 田中 トシエ
爆心地今は園児の砂遊び
かけ違うボタンに歳を覗かれる
通夜帰り故人にふれずむだばなし

河内長野市 杉谷 カズエ
米寿まで無理でしょうかと神に問う
水かけ論忘れ上手にかなわない
ミニガーデン主婦の生きがい垣間見る

河内長野市 木太久 正一

葉桜に生きる力をまたもらい

雪の壁立山黒部春のバス

メーデーの歌に青春よみがえり

岸和田市 徳庄 美智子

若さでは負けていませんクラス会

シースルー心のひだは見せません

水もらう花に嫉いてるおーいお茶

岸和田市 不破 仁 緑

高価な花母に贈って叱られる

天童にパワー授かりマムシ食う

トンボリへ飛び込む準備するファン

岸和田市 宮野 みつ江

デイサービスに姑をゆだねて私の日

あげ底の自慢話に肩が凝る

慎重に選んだ栗に虫がいた

大阪市 榎本 舞 夢

待合せ一番好きな服で行く

新茶のみ初夏の会話が弾んでる

悲しみを引き出しに溜め明日生きる

大阪市 平井 露 芳

鯉のぼり集まり泳ぐ川の上

這ってでも医者に来ているお年寄り

公約をやっと果して橋三つ

大阪市 小泉 ひさ乃

鯉のぼり団地の窓で風を待つ

人の波掻き分けながら見るぼたん

不況風馴染の店の灯が消える

香川県 原 賢

煙草税払って喫煙場所がない

俺が先私が先よと余命表

携帯で監視している妻の知恵

徳島県 安宅 美代子

医者知らぬままではすまぬ聴診器

そつとして置こう年頃氣がもめる

こんな事あるから貰う領収書

鳥取市 西尾 敬之介

屋台店古びた猫が客招く

鯉幟嫁の親御の見栄強く

目移りを忙しくさせ陶器市

鳥取市 福島 庸二

絵馬祈願込めた思いの文字躍る

二日酔い水の旨さは酒以上

さあ出番姿見眺め武者ぶるい

鳥取県 竹森 富久江

失った時を要領よく庇う

ふところに未来しつかり草の精

また明日も普通の橋をかけたいな

和歌山市

岡本八重子

吾が浜に蜃気楼立つ夢を見た

お祭にすくった金魚皆元氣

メルヘンの家が吾が家のそばに立ち

綾部市

藤田芳郎

よく来たと母がちつとも座らない

一幕へ愚鈍の日々をくり返す

金になる話善人ぶって聞く

姫路市

服部一典

過疎の嫁鐘や太鼓で迎えられ

子の名刺出して自慢の縄のれん

迷惑をかけぬと頼む保証人

兵庫県

安達厚

春草に負けじと妻の鋏の音

欲の皮甘い話にのせられる

初物を食べて長寿の道をゆく

兵庫県

高見末野

花まつり手作りおはぎで供養する

田植済み深いねむりも明日の夢

銭湯で母の日に娘と流し合い

東京都

井上つよし

タンポポが森の小径に楽譜書く

一輛編成のジーゼルカーの旅をゆく

蚊取線香行儀正しく燃え尽きる

東京都

吉田土風

チョイ役が意外に光り見い出され

滔滔と辻褃合わぬ弁を打ち

恋敵事情があつていなくなる

横浜市

岡田芳江

山を見て空を見あげてホツとする

十五夜の風に吹かれて母思う

買物は車で楽しみは散歩

横浜市

川島良子

ハイハイと二回言うから嫌われる

当ても当らなくても評論家

富士山と話が出来る露天風呂

横浜市

福島かず子

なおざりな去年が庭の花に出る

不況など知りませんよと樹は緑

百円の店で気楽なさがしもの

横浜市

巖田かず枝

病み上がり知られたくない厚化粧

誕生日今年もチキンライスです

席譲る茶髪ピアスも微笑まし

横浜市

伊藤ふみ

吹き溜まりは居心地がいいだんご虫

筍の氣勢いたたく万歩計

ふる里が新茶と共にやってくる

滋賀県 中 宗 明

ボロボロになるまで着てる好きな服

勝負より話のはずむ囲碁の会

花植える時期を迷わす温暖化

榑原市 西 本 保 夫

酒たばこ飲まぬとわかる胃の透視

問診へほまれタバコの話から

結局は心配の無い太りすぎ

熊本市 北 川 一 進

一番旗拍手の中で迎えられる

書く前に正座の姿勢教えられる

成人式済んで平気に喫う煙草

岡山県 国 米 きくゑ

温もりを部屋に残して孫巢立ち

時折りは嫁とワインを抜いてみる

毒舌のはしばしに見る人情味

日立市 加 藤 権 悟

どの彩も東風へ優しくなる台地

悪友が味方と思う定年後

まだ青いリングに虫がつきだした

倉敷市 森 本 文 子

霧島の深紅が庭を一人占め

頼り無い記憶を叱る閻魔帳

ばあちゃんが嫌で赤着てカブに乗る

鳥取県 加 藤 公 子

私も新緑並みに萌えている

新緑のトンネル老母に腕をかす

横浜市 福 田 由 美 子

はや弁におなかと眠気満たされる

長電話焦がした鍋があざ笑う

高槻市 左 右 田 泰 雄

古都の夜落花の舞に酔いしれる

勘違いされてお札の品とどく

安米市 原 煩 悩 児

苗物を買う百姓の郷祭り

老いの意地未だ負けられぬ辞書めくる

岸和田市 亀 井 皎 月

OB会病気の話職のこと

昔美人そう言われてももう遅い

高槻市 執 行 稲 子

マイペースが好き蝸牛もわたくしも

醍醐寺のしだれバイオで生きかえる

静岡市 増 田 扶 美

勝ち進む球児の日焼け胸に沁む

ふるさとの味語り出すしらす飯(解禁日)

鳥取県 高 尾 京

朝夕に藤の初咲き惜しむ春

童話読み聞かせし母の懐かしく

鳥取県 平井 栄翁
自転車を飛ばして憂さを捨てて来る
妻の愚痴人形に成り聞いている

松江市 松浦 登志子

選挙戦まけずに蛙大合唱
一年生お地蔵さまに花飾り

和歌山市 福重 美子

都会抜け価千金鳥の里
軸の字が達筆すぎて行き詰り

出雲市 加藤 スズコ

売り出しの活気呼ぶ旗春の風
立ち合いの呼吸に合わせ肩が凝る

横浜市 荒井 広和

親切の裏で打算のエゴ動き
酸欠の街でボエムの独り言

愛媛県 宮本 末子

男にも言えず後妻のもつ苦勞
二三本のわが歯が頼り義歯の中

和歌山市 土屋 起世子

花だより聞けば歩幅が伸びてくる
文明の利器で頭が退化する

宇部市 中田 忠夫

啖呵切る割りに内心気が小さい
愛煙家この一本が止められず

枚方市 大昇 隆広
海開き不況知らない子等の声
街に出る我慢菓を懐に

兵庫県 徳平 穂子

いぬふぐり我も我もと萌え出する
萌える如エネルギー欲し六十代

尼崎市 河津 正治

幸せの夢を拡げる披露宴
弱気かもカゴメの輪から抜けられぬ

兵庫県 倉垣 恵美

真似るからおつむてんばかりさせ
テーブルの角もいっしょに撫でてやり

八尾市 高橋 明子

動物愛護夜毎焼肉パーティーか
捕えたらすっぱりジャンパー顔かくす

横浜市 生坂 サト子

懸賞に当る指南の本を知る
手引書の通りポツポツ花を見せ

大阪市 木村 青生

肩書はみんな部長でセールスマン
苦勞して塾を選んでサクラチル

出雲市 岡 あきら

曖昧な返事へ口が尖りだす
新緑が溢れ遠出がしたくなる

出雲市 川 島 和歌子

思ひ出を塗り変えたくて旅に出る

追伸に酒ほどほどと母の文

浜松市 田 中 知行

噴水の前キラキラと手話ふたり

おぼろ夜の家の中から父が呼ぶ

鳥取市 近 藤 秋 星

大型連休ひっそりとしてわが施設

きょうもまた自作自演のドラマ描く

伊丹市 樫 谷 郁 子

セピア色写真が語る旅日記

山迫る久しい我が家母が待つ

出雲市 城 多 喜

忘れっぽい私時々捻子を巻く

図太さもちよっぱり持つて世を泳ぐ

岡山県 土 居 ひでの

潮騒を枕に聞いて娘と眠る

不況風案外強い小商い

横浜市 平 達 也

酒煙草断つて妻への恩返し

自立して歩く悦びりハビリ

五呂八川柳祭全国誌上大会

影Ⅱてじま晩秋・野沢省悟・野中い
ち子・佐藤ヒサ 雑詠Ⅱ墨作二郎・山崎蒼平・宮川蓮子・岡崎守

1000円 7月30日締切 小樽市奥沢4-2-23 横田守人宛

第四回 大砂丘川柳大会

とき 7月18日(日) 午前10時開場

ところ 福部村湯山2028 砂丘センター

電話 0857・22・2111

兼題と選者

「節」 西原 艶子(川柳塔おとり)

「合図」 上田 宣子(うぶみ川柳会)

「そろそろ」 谷口 次男(倉吉川柳会)

「バラバラ」 林 瑞枝(川柳塔きやらばく)

「背伸び」 新家 完司(赤崎川柳会)

「華やか」 土橋 螢(川柳塔鹿野みか月)

「あれこれ」 小西 雄々(松露川柳会)

「風紋」 河内 天笑(川柳塔)

席題なし 各題2句 欠席投句拝辞

表彰 最優秀賞・優秀賞・各題天の句

参加費 句会2000円 懇親会2000円

出句締切12時半 開会午後1時 閉会午後3時半

懇親会午後4時 宿泊8000円(砂丘センター)

連絡先 689-0115

鳥取県岩美郡福部村八重原349-1 橋本多哥由

主催 川柳塔ふくべ

後援 (社)全日本川柳協会・鳥取県川柳作家協会

福部村・福部村教育委員会

大空の、、ろ

(102)

橘 高 薫 風

★春霞立つ中空へ、う・わ・あ・んと黄鐘調

の旋律を撒き広げて十八日から四天王寺はお彼岸の幕をあけた。中日に一寸のぞいて見たが境内はいま仁王門の工事中で、あちらこちらに巨材が積まれ空地が少なくなっているため名物の見世物も大きなものは少ないが、それでも船木嘉吉老人の蛸々踊、娘サーカス、大蛇、七不思議、のぞきなど童心にほほ笑みかける興行物や、竹独楽、野菜きざみ、八つ目鰻、もぐさなどの露天商約三百が線香の煙りにかすんでならんでいる。

私は人に押されながらも数年前、故人になつた其象の

竹独楽の音も春らし天王寺

の句を思い浮べていた。肺を病んで刀根山の療病院にいた其象が退院後、句会に来て、私が演壇に立つと、すぐ眼の下にいて熱心に私の柳話に耳を傾けていたあの丸刈頭を思わされた。

★三月号で正岡芸陽を容君の父だと書いたら「小生の父とあるのは嘘です」と容君から抗

議があつたから取消すことにした。アレは幽蘭女史の直話をウツカリそのまま書いてしまったので軽卒の罪お咎れしたい。「去年は子規の息とある所で書かれて恐縮しました」とある。単に同姓だということで勝手に他人の息にしたがるのもおかしい癖だと思う。子規ほどの息子にされることは満更腹も立つまいが肺病の系統視されてお嫁さんの来手がないと、ソレも困りものだ。

★三月下旬大阪帝国大学の記念会館で川柳動物慰霊句会を開いた。尤も兼題は「動物一切」である。その時の句の二三を紹介して見る。

追うなればわれ走らんと駝鳥いる(利生)
握りずし蝦の長さに出来て居り(柳秀)
逢引を見付けたように鹿が来る(たけを)

★森半豊君が赤倉ホテルから、橋本緑雨君が長野の藤長屋ホテルから、福田山雨楼君は松島から、西田艸楽君は吉野路から石崎柳右君は広島から等々、春はホテルからといった風に頻りに旅の便りがつく。せめて学校の休みにこども等を引き連れてそこらの若草を踏み

たいと思っていたが、其の機会さえ与えられない私にとっては羨ましい限りである。

★耳がクシャツク、机上の鏡を覗くとピンと白髪が突つ立っている。それがギラギラ光っているの、小さな西洋ハサミでチョン切った。晩春初夏は悩ましい。

★ あや美 句抄

人生の凡てを恋になげ出して

気儘さを異性へだけはかくして

未来など忘れ女のあたたかみ

馬鹿にする中に親身を見せてくれ

彼女だけ愛し消極的に居る

失恋へ我が名をかえんなぞ思い

真剣な恋を遊戯にされている

小康の眼先へベルシア猫が来る

★月末に野口雨情氏を土佐堀の京家に訪ねた。

幾年ぶりに会つた雨情氏の謹厳な態度に変わ

はないが、頭髮が薄く白くなっていることは

私のこころをさみしくさせた。一盃飲みたい

と思つて南へ誘つたが、播州の高砂から迎え

に来る人 wait っているの、出掛けられないと

のこと。それに近頃はリユーマチで弱ってい

るので飲めないのですよと言いがら、私

のためにビールを命じようとした。恰度そ

こへ高砂からのウイジターがあつたので再会

を約して引揚げた。

沙湖抄

八木千代選

えこの花 挙動不審を訝るな
交響曲ひとりひとりが一人名なり
落ちるべくして落ちた枯葉の後始末
ジャンケンボン明日が見つかるかも知れぬ
飲み込まれそうな霧の日でも逢おう
焦げついた蛍が籠の中にいる
大きな道の掃除は他人に任せよう
明け方の声が神だとしたならば
知らぬ振りして驚いてやるわーっ
影法師あめが降るから定休日
どの家も昔はあった火消し壺
暗算の端数が集う縄電車
見るべきは見つ転生の蛍とぶ
一通の手紙わたしを包囲する
春眠や いのちを忘れそうになり
紫は苦手僕より偉いから
倅せが怖くて一歩退いておく
朝顔よ違った道も這ってごらん
愛を出すと愛が返ってくるポスト
しあわせの隣の席が空いている

西宮市	牧瀬富喜子	大阪府	神夏磯典子	堺市	桜沢 千世	大宮市	新井 朋子	同	鳥取県	土橋 螢	米子市	政岡日枝子	松原市	小池しげお	寝屋川市	森 茜	和歌山市	古久保和子	高槻市	乙倉 武史	富田林市	池 森子	和歌山市	木本 朱夏	松江市	川本 畔	藤井寺市	高田美代子	和歌山市	川上 大輪	島根県	松本 文子	米子市	野坂 なみ	吹田市	山本希久子	八尾市	村上 剛治
-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	---	-----	------	-----	-------	-----	-------	------	-----	------	-------	-----	-------	------	------	------	-------	-----	------	------	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------

赤い薔薇わたしの中に飛びこんだ
豊かでは無い娘からカーネーション
耳朶が痒い油断をせぬことだ
まさかの時は風呂敷包みひとつ
ほころびる薔どの木も生きていた
信じようあすは鴉が啼くだろう
エプロンの紐の長さと遊ぼうか
かき裂きをして快哉を叫ぶ釘
ひよっとこの隣に並ぶ亡父の面
しあわせの椅子は三本脚である
収納の箱だけ増やしかたづける
カラスの子 嫌とも言えず黒いまま
あすはわが身と思うよわいになりけり
いずれみな消えてゆくのが見えぬだけ
わたしは女優 今は悲しい役どころ
手を貸さず見守る愛は冷たいか
ガイドラインまさか赤紙来はすまい
平凡に毎日暮らす そりや凄しい
絵の春にうつつの春のせわしさよ
妻の名をちゃんと知ってる郵便屋
敵はいないが味方もいない独り酒
旅行かばんに歎異抄もいれところ
般若経まいにちあげて淋しいね
守護神がきつとそっぽを向いたんだ
そっぽ向く影よ私を背くのか
縫い代はしっかりとった笑い袋

八尾市	高橋 夕花	富田林市	藤田 泰子	横浜市	清水 潮華	米子市	光井 玲子	砂川市	大橋 政良	和歌山市	野々 圭子	あきる野市	佐藤 季穎	枚方市	寺川 弘一	和歌山市	川上 富湖	鳥取県	岩崎みさ江	横浜市	福田由美子	西宮市	奥田みつ子	尼崎市	春城 年代	米子市	青戸 田鶴	藤井寺市	太田扶美代	八尾市	高杉 千歩	箕面市	岩津ようじ	鳥取県	谷口 次男	弘前市	蒔苗 果林	米子市	鷺見 正子	鳥取県	新家 完司	鳥取県	乾 隆風	京都市	松川 杜的	米子市	木村富美子	三重県	佐々木森哉	京都市	都倉 求芽
-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-------	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------

かさぶたが笑い転げて剥げ落ちる
多数決 撃ちてしまはんすぎないか
炎天下 人みな寂と十五日

ひとりだけお参りをする墓がある

きざはしをゆっくり鐘の音と下りる

いないいないバアとさつきが満開に

右向いたままで世の中渡りきる

愛なのか責任なのか背なの荷よ

受皿の底にこびりついたのは愛

抽象画の中で眠ると夢を見ぬ

桃流れ海まで流れ消えました

帽子脱げば自分の役目もう忘れ

こないない水に遇えた蛙鳴く

やり残していることありそうでまだ死ぬ

口開けて眠るもうすぐ新世紀

夫と子のことしか話さないオウム

かわいそうだから毒殺せぬカラス

定年に第一ボタン出番なし

百年を語ると動く世界地図

真剣をだらり私はすぎだらけ

要領の悪い次男に看てもらう

子守歌うたってやると犬も寝る

爪伸びて余生の話 死の話

うんざりとしている絵馬は雨ざらし

今日みんな言ってしまえば楽になる

ハンカチの昨日の汗はもう他人

綾部市 藤田 芳郎

海南市 三宅 保州

唐津市 久保 正剣

今治市 月原 宵明

西宮市 西口いわゑ

横浜市 豊田 羊子

和歌山市 牛尾 緑良

米子市 茂理 高代

羽曳野市 吉川 寿美

尼崎市 春城武庫坊

八尾市 村上ミツ子

米子市 石垣 花子

今治市 放矢野 佳雲

和歌山市 桜井 千秀

八王子市 播本 充子

鳥取市 石上 悦子

愛媛県 中居 善信

横浜市 菱田 満秋

米子市 林 瑞枝

鳥取市 春木圭一郎

和歌山市 福本 英子

米子市 足立由美子

和歌山市 吉村さち子

岡山県 小林 妻子

鳥取県 土橋はるお

三重県 尾崎 勤

久々の第五鈕を開けて干す

ていねいに生きてたんだ三つ揃い

夫より三日長生きしたい妻

自治会の役にも主流反主流

一分の停電ご飯炊けてない

当然の如く車が抜いて行く

観覧車それはのんびりできる恋

鬼さんはこちらと誘うけもの道

花屋の前 呼ばれたようにたちどまる

負の庭にしょんぼり月見草が咲く

高瀬川 人も蛭も還らない

そばにいてつくしてみたいひとにあう

江戸むらさき廃れていない杜若

マンションの窓で街ごと深呼吸

力抜くことを覚えた峠です

同居した孤独は誰も気がつかぬ

校庭の木々にいのちを教えられ

燃えている証 老廃物を吐き

寂しさを言えばうなづく柿の花

悲しみが溢れてくると蓋をする

生き残るために鼻呼吸していよう

珍しい物を探しに家を出る

坂の上なにかいいことありそう

揺れるだけ揺れて人間らしくなる

それから其の時どきの風に聞く

長らえて今も花火を引きずって

倉吉市 野口 節子

高槻市 左右田泰雄

奈良市 田中 賢治

米子市 小西 雄々

三田市 北野 哲男

枚方市 前 たもつ

寝屋川市 江口 度

和歌山市 山田 高夫

鳥取市 福田 登美

鳥取市 徳田ひろこ

出雲市 石倉美佐子

香芝市 大内 朝子

米子市 白根 ふみ

和歌山市 楠見 章子

池田市 岡本吉太郎

唐津市 井上 勝視

弘前市 齊藤 劔

鳥取県 西原 艶子

尼崎市 田辺 鹿太

大和高田市 鍛原 千里

和歌山市 福井 桂香

唐津市 相葉 あき

豊中市 田中 正坊

岡山県 福原 悦子

鳥取県 石谷美恵子

大坂市 三浦千津子

仏像の艶には勝てるものがない

花悠々 風の流れに逆らわぬ

平凡に雨戸繰る音 朝の音

わびしいね食後の葉そろえつつ

新緑へするべき事がはかどらず

傘の水切つて気持ちを立て直す

波紋の原点にある嫉妬心

電話待つわたしひとりの空間に

老いと死を父の介護で見つめてる

ハードルが突然高くなることも

歩かねば老化が加速するばかり

気になるなあーお酒が弱くなった父

こでまりとジャンケンをして仲直り

蛇口全開させて鳴咽を噛みしめる

よい目覚めわすれ上手に救われる

スズランはやっぱり北に似合う花

懲りもせず夢をさがしにブーメラン

オレンジの並木の味は思わせぶり

真実が知りたい涙涸れるとも

今聞いたことは内緒にしてあげる

しなやかな生き方 甘く見るでない

生きてる限り上げねばならぬご神燈

弟の優しさはせせらぎに似て

ピカピカの厨は妻の砦なり

気短に向いていそうなフライパン

いくばくの余命ぞ喜劇まだ続く

今治市 野村 京子

鳥取県 さえきやえ

倉敷市 小野 克枝

岡山県 富坂 志重

富田林市 片岡智恵子

和歌山市 武本 碧

弘前市 一戸 ツネ

東大阪市 北村 賢子

横浜市 近藤 道子

米子市 澤田 千春

和歌山市 山口三千子

寝屋川市 坂上 高栄

横浜市 山下 省子

島根県 伊藤 寿美

米子市 小塩智加恵

弘前市 中山 雅城

寝屋川市 籠島 恵子

横浜市 長島亜希子

河内長野市 水谷 正子

鳥取県 田村きみ子

尼崎市 長浜 澄子

西宮市 門谷たず子

米子市 森脇 麗

香川県 木村あきら

川西市 松本ただし

松原市 玉置 重人

引算を始めてからの広い視野

理髪館ちよつと世間を広めて来

最良の日の噴水は虹になる

マネキンは喪服を着ても出ぬ涙

目に見えぬ糸は縫い目を知っている

桜より短い恋の余韻抱く

満開のうちに何でもしておこう

言い勝ったことのないのが取り柄かも

カラフルな屋根にひよっこり鯉のぼり

塾のない頃の子供の鬼ごっこ

泣き砂は浦島さんの語り部か

シグナルのノーをイエスと間違える

構想はゴロ寝しないと浮かばない

幸せだと言われ幸せだと思ふ

留守電から四角い声が流れてる

生きとし生きるもののすべてに風薫る

横浜市 後藤 早智

熊本県 高野 宵草

弘前市 高橋 岳水

箕面市 椎江 清芳

唐津市 岩崎 實

和泉市 中川 楓

河内長野市 植村 喜代

堺市 志田 千代

寝屋川市 太田とし子

枚方市 濱田 良知

唐津市 山門 タミ

鳥取市 美田 旋風

横浜市 川島 良子

海田市 谷口 義男

八尾市 宮崎シマ子

弘前市 岡本 花匠

牧淵富喜さんの挙動不審にはきよつとさせられました。えこの

木という植物をはつきり知っているわけではありませんが、きつと、

うつむいて咲く花だと思われれます。ふつと見上げたとき後ろめたく

どきまぎするののは人の方でしょうか。そう。小高い所から静かに

ずっと見られていたのです。神夏磯典子さんの交響曲の大きな孤独

には参りました。いくつかの楽章それぞれのパートの中でも完全に

一人。それも全体を構成するために高度なわざを身につけての一人

ずつです。ぴりぴりしてきます。桜沢千世さんの枯葉は落ちるべく

して自分の責任は全うした枯葉です。やすらいで落ちてゆくだろう

枯葉の後始末は、また始まりへのセレモニーとなるでしょう。

水煙抄

秀句鑑賞

— 6月号から

舟木 与根一

ここだけの話に耳は貸さぬ主義

亀井 田女

ここだけの話は、得てして他人のプライバシーを侵す場合が多い。聞かないに越した事はない。作者は主義を高く宣言しました。お茶会へ少しきつめの足袋をはく

高島 啓子

日頃習い覚えたお点前を披露する、絶好の舞台でもある。その緊張感が、足袋を使って巧く表現されています。

恋になる予感ベージが埋まり出す

矢倉 五月

毎日が人生の一頁です。作者の年齢は知らぬが、句の充実感は正に青春の謳歌です。

嘘つけず年中肩がこっている

川口 信子

嘘も方便、仏も許します、人を救う嘘もある。肩の荷を軽くして血圧を下げましょう。

頼つてた主治医が先に逝つたうつ

西内 朋月

主治医とあれば、単なる医者の不養生では済まされぬ。信頼も厚く尚更である。自分の病状や常用薬に不安が付きまとい、そのうちは計りしれない。全く凄い皮肉です。

トラック便 命を削る音がする

牧野 芳光

高速道路網の伸展と共に、長距離トラックの使命感も大きく、正にトラックラッシュの時代となる。それにしても命を削るとは巧い表現です。トラック野郎の心意気を上手に捕えています。

指紋たつぷり残る大事な杖である

船津 とみ子

歳と共に杖が頼りとなる淋しさを、何気なく詠んだ積もりでも、この指紋は語りで愛用以上の悲しみが窺われます。ちなみに愚妻もこの頃杖が必要になり、他人ごとでなく、実感句のような親近感を覚えました。

行間に思ひ出うずくまる日記

前上 英一

仕事主体で私の日記は後何もない。然しこの日記は興味津々だ。うずくまる思い出が面白い。一期一会の情けや愛がうずくまって居たりして：懐かしいでしようね。

当り役演じ人生終りたい

安達 厚

どうしても渥美清演じる「男はつらいよ」の寅さんを思い出します。

「賞」は生きてる内に貰いましようね。
反対へやっぱりついてゆくメダカ

渡邊 伊津志

雑魚はやはり、ボスに従うしかありませんね、悲しいことです。この頃メダカも貴重になりました。

過労死の記事を読んでるコップ酒

国米 きくゑ

対照的な人生ですが、これが現世の現実です。凄い皮肉ですね。

耳遠いことは隠している笑顔

福田 由美子

よく出合う場面ですが、タイミングの悪い笑顔は気を付けましょう。この人アルツハイマー病ではと、間違えられます。

次の三句も気に入っています。

言にくい話は帰りがわにする

澤田 和重

わだかまり解けて出雲はお茶どころ

原 煩悩見

夫看ていて新聞を見ない日々

山梨 雅子

尚香のむ

西出楓楽選

文学の道で迷子になつてゐる

まん中も案外肩がこつてくる

想い出を入れ替へている衣替え

ロスタイム下さい羽根が開きそう

嘘でしようでも掌が暖かい

レトルトで生活臭が消えてゐる

遠い日が箱にひしめく端切れ布

生かされてわが身に合つた服を選ぶ

追いかけてゆくから虹が遠ざかる

ときどきは妻という名を忘れたし

その時の流れで変える泳ぎ方

偽りの胸に光つてゐるクルス

海はときどき私を呼びにくる

弟に母を預ける顚末記

すぐに賛成かなり淋しい人だろう

他人の眼鏡 借りれば視野が変わるかも

どろんこにならねば底が掴めない

語り部のまぼろしでない瞳の光

満天の星には心あかさない

倉吉市	野口 節子
今治市	野村 京子
横浜市	三村八重子
和歌山市	川上 富湖
弘前市	佐治千加子
和歌山市	福井 桂香
熊本市	永田 俊子
西宮市	門谷たず子
鳥取県	岩崎みさ江
吹田市	山本希久子
富田林市	藤田 泰子
和歌山市	木本 朱夏
八尾市	高橋 夕花
米子市	政岡日枝子
今治市	塩路よしみ
和歌山市	玉置 当代
尼崎市	春城 年代
米子市	林 瑞枝
出雲市	城 多喜

淋しさが時々首を横に振る

手の中の切り札出番忘れてる

狂わない時計持たされ疲れぎみ

幸せは小さい枀で計りましよ

願いてくれるばかりで頼りない

忙中閑しつかり夢の端つかむ

環状線一周すると思ひ出す

ストレスをリュックに詰めて旅に出る

一ツ屋根きれいい事では生きられず

失礼をしますと鮎に串を打つ

放心状態ポロリと刺がおちました

この歳で人生若葉マークかも

放たれた礫を入れる笑い袋

黄昏にまた口ずさむ手毬唄

門の無い家でお客の絶え間無し

騙されて騙して絆太くなる

算盤のない友情に背を押され

可も不可もなかった春の陽が落ちる

草餅のレシビ今年も訊いてゐる

その他大勢の中にいる安堵

なんとなく美人に味方したくなる

仲直り小さな嘘を一つ入れ

播いた種みとどけるまで行けません

飾り棚 自己満足が載せてある

石段を数え見合わす花の寺

買物が上手 貯金は苦手です

藤井寺市	太田扶美代
米子市	小塩智加恵
富田林市	片岡智恵子
堺市	志田 千代
和歌山市	桜井 千秀
堺市	矢倉 五月
大阪市	津守 柳伸
八尾市	村上ミツ子
和歌山市	榎原 公子
和歌山市	古久保和子
藤井寺市	高田美代子
尼崎市	長浜 澄子
西宮市	牧瀬富喜子
西宮市	奥田みつ子
西宮市	神夏磯典子
大阪市	近藤 道子
横浜市	小野 克枝
倉敷市	西口いわゑ
西宮市	芦田 鈴美
横浜市	鍛原 千里
大和高田市	大石あすなろ
岡山県	植田 一京
鳥取市	石垣 花子
米子市	稲本 凡子
大阪市	和泉あかり
川崎市	岸野あやめ
寝屋川市	

とどのつまり影法師だけが味方
 生きてきた足跡顔の皺になり
 ひと言で閉じた心に灯が点る
 生きている証拠に爪がよく伸びる
 友達の友だちまでもお人好し
 大地今心の詩をきいている
 昔のままのふる里恋しもう行かぬ
 幻の恋を好みの色に塗る
 人生の淵で覚えた変化球
 後出しの言葉は棘がぬけている
 すばらしい文化がときに落し穴
 待ちかねた手紙ときめく波の音
 初夏の風君が両手に溢れ出す
 女としての悔いはなかった実山椒
 夕焼けを追いかけている農繁期
 絵手紙の墨の雫も生かされる
 別姓にしてもやっぱり皿洗う
 凜と咲く野草一輪踏み込めず
 子に残す宝はないが息災だ
 何もかもせかして過ぎた桜の季
 恍惚の手はやさしくて悲しくて
 生きていく望み無くした日々もあり
 ダイエットに負けてオハギを食べている
 萌ちゃんに泣かされてからご出勤
 メンバーの共鳴和音響き合う
 嫌な事すぐに忘れるのが特技

出雲市	園山多賀子	和歌山市	吉村さち子
鳥取県	西原 艶子	岡山県	矢内寿恵子
鳥取市	福田 登美	大阪府	本間満津子
今治市	野村 清美	米子市	鷺見 正子
和歌山市	吉村さち子	大阪市	板東 倫子
岡山県	吉村さち子	寝屋川市	籠島 恵子
大阪府	本間満津子	大阪市	町田 達子
米子市	鷺見 正子	島根県	伊藤 寿美
大阪市	板東 倫子	松江市	川本 畔
寝屋川市	籠島 恵子	羽曳野市	吉川 寿美
大阪市	町田 達子	岡山県	福原 悦子
島根県	伊藤 寿美	八尾市	高杉 千歩
松江市	川本 畔	和歌山市	福本 英子
羽曳野市	吉川 寿美	横浜市	保田 絹子
岡山県	福原 悦子	米子市	光井 玲子
八尾市	高杉 千歩	尼崎市	内田美也子
和歌山市	福本 英子	堺市	桜沢 千世
横浜市	保田 絹子	和歌山市	山口三千子
米子市	光井 玲子	富田林市	前田 登子
尼崎市	内田美也子	横浜市	川島 良子
堺市	桜沢 千世	和歌山県	杉山 精子
和歌山市	山口三千子	美面市	出口セツ子
富田林市	前田 登子		

人間万歳 泣いて笑うて愛語る
 山彦が投げ返してゐる国なまり
 つやつぱい衣裳こらして新芽出る
 それからの事が聞きたい村雀
 常識が後ずさりする横車
 辛口の意見は入れぬ砂糖壺
 眠つた糠床起す春の声
 雪のようになんじやもんじやの花が咲く
 地中海シルバープラン候補にす
 戦つてまずは安堵のヘルメット
 若葉風 見舞法事と忙しい
 身のどこか鳴る音してる更年期
 娘の住まうシカゴタイムに置時計

和歌山市	中川 楓
八尾市	生嶋ますみ
米子市	澤田 千春
鳥取県	石谷美恵子
倉敷市	家守 政子
和歌山市	武本 碧
横浜市	田中 笑子
出雲市	石倉美佐子
横浜市	長島亜希子
横浜市	伊藤 ふみ
守口市	結城 君子
大阪市	三浦千津子
西宮市	緒方美津子

節子さんの句―文芸の創作にかかわる者は、心奥に吐き出さなければならぬ業(ごう)を持つてゐるという。一つの作品を編み出すのは産みの苦しみだからである。「迷子」に含蓄があり、句に奥行を作っている。京子さんの句―家族の中で大切にされている母親像が見える。それは最高の幸せと本人はわかっているのだが、時にはふと孤独にあこがれを持つ。自分自身も周囲も大切にしている人柄であろう。八重子さんの句―着る物に對する思い入れがますますなくなく、女性でなくては出来ぬ句である。日々を丁寧に生きておられることが伝わり、好感が持てる。富湖さんの句―具体的な事柄を指すのではなく、心象風景を詠んだ句。立ち止ることを許されない現代生活に、心の中でふとロスタイムを希求する。羽がきつちり閉じなくなつた鳥に自分を譬え、忙しさの中でつぶされそうになる現代人の様子が、迫力をもって浮き上ってくる。

乾 杯

酒井一壺選



総員起立 受賞に乾杯だ

乾杯の前に毒味の要る時世

乾杯が済むといつもの顔になる

ライバルの乾杯白い火花散る

乾杯がすんだらすぐに居なくなる

お別れの乾杯うしろ振向かぬ

誕生日妻が乾杯してくれる

教え子と乾杯すればよく回り

盃を高く上げよう新世紀

乾杯で温もり貰い夢もらい

乾杯に老人力の捨てどころ

乾杯をした手謀反の矢を握る

カンバイとやけに叫んでいるやから

感無量上棟式の乾杯だ

息子乾杯やつと高嶺の花手折り

乾杯に仮面をつけた人もいる

乾杯はスタートラインかも知れぬ

乾杯をしながら次の手読んでいる

乾杯で次期会長が見え隠れ

乾杯が済んで宴会動き出す

あした咲く蕾に乾杯してやろう

乾杯に涙を見せた肝っ玉

あきら

一花

充子

政良

英子

たず子

ひかる

たもつ

あずき

郁子

螢

あすま

隆盛

あやめ

一風

美子

健一

俊子

一齋

庸佑

倅子

アキ

乾杯のビールに酔っている女
健康に乾杯今日も酒うまし
乾杯へ母エブロンをかけたまま
目出たいが何度乾杯してくれる
ライバルの乾杯他人行儀なり
乾杯のグラスが重い棒グラフ
渋滞でまた乾杯に間に合わず
ライバルの乾杯を見て無表情
乾杯のビールで酔って寝てしまふ
乾杯へ明日のいのち約束し
乾杯へ味方ばかりでない拍手
ミルクもお茶も乾杯の輪にいる至福
乾杯をするのに理屈など要らぬ
乾杯のあととも消えないわだかまり
古希からのわが人生に乾杯を

佳

祝勝会のビールを浴びているダルマ(劇美代子
ひとりになって乾杯したいことがある

乾杯の代役こなし株を上げ

乾杯と仲よくなったのに誤爆

乾杯はローン終わった日と決める

人

乾杯のリボンがすこし照れている

地

町の顔乾杯役が板に付き

天

ドナーカード乾杯などは期待せぬ

軸

当選へ真夜中高く乾杯す

狸村 岳水 洞庵 哲男 愛論 清史 晋

四三郎

利武

よしみ

寿美

ミツ子

大輪

扶美代

靖巳

保州

四郎

啓

晴翠

重人

志洋

牛尾緑良

尾

尾

尾

尾

尾

尾

尾

スプーン

植田一京選



スプーン箸使いこなせて孫二歳

スプーンに追いまわされる離乳食

スプーンから貰う命の三分粥

子のスプーン好きなカレーをまたねだる

スプーンに半分ほどの恋だった

運動会スプーンレースなら得意

スプーンを出してジャンケン負けになる

スプーンよりおてて大好き離乳食

スプーンより確かな母の目分量

スプーンにも満ため致死量ビコグラム

滞日三年スプーン箸にもちかえる

病む妻にスプーン運ぶうすい粥

心の飢えを掬うスプーン見当らぬ

スプーンのリボンうれい誕生日

ナプキンの上でスプーンかしこまり

思いやりスプーンに盛る塩加減

スプーンなら器用に使う握り箸

スプーンより男は勘で味付ける

スプーン持つ手に手を添える三分粥

大切なスプーン一つほどの愛

スプーン一杯程の甘さで丸められ

物思い続くスプーンぎこちない

喜子 喬水 強一 旋風 睦子 俊路 緑良 美也子 庸佑 保州 久仁於 宗明 雄々 美代子 ひかる 孝男 満秋 水笑 潮華 圭一郎 寿恵子 帆雀

スプーンぐるぐる愛は進行中

スプーン一パイの愛飢餓の子に

離乳食母のスプーンも口をあけ

苛立ちへスプーン何度かき混ぜる

スプーン混せてませて思案が浮かばない

スプーンで誰か食べたか月の顔

スプーン一杯の水をのんだ亡父

銀スプーン女の指の細かりし

スプーンでは掏えぬ愛も盛ってある

スプーン曲げ下手な夢居だと思つ

スプーン手に別れの言葉切り出せず

スプーン持つ指まで脆くなつてきた

スプーン曲げ程のミラクルなら許を

スプーンが一つあまつたフルコース

佳

スプーン持つ作法横目でちらと見る

スプーンを落とすとボーイ飛んでくる

色即是空スプーン何を掏いとする

恋ひとつ終るコーヒ掻き回す

ティースプーンとても素直な愛でした

人

スプーン手に一つ足りない味さがす

スプーンなど曲げて遊んだよい時代

地

あの頃の銀のスプーンを出してみる

軸

ふとスプーン止まって浮かぶ五七五

典子

たす子

正 剣

善 信

さち子

勝 巳

あずき

健 一

愛 論

風 花

大 輪

あらた

日 枝 子

周 洋

周 信

羊 子

英 子

螢

芳 郎

ア キ

政 良

たもつ

泳 ぐ

前 たもつ選



健康な街だメダカが泳いでる

一網打尽今はゆっくり泳がせる

歓声がプールの水を温くする

髪切つて園児の額泳ぎ出す

水鳥は座つたままで泳いで来

コンニャクに豆腐違つた泳ぎぶり

品行方正みて見て僕の立ち泳ぎ

このボチが泳げるなんて思えない

喘息を癒す泳ぎが腕を上げ

泳がずにプール歩いてる熟女

泳がない水着が誇る胸の線

泳ぐ時は別の水着を持つている

泳がない水着はいっち派手にする

鯉のぼり泳ぎ同居も順調に

ちのぼり古い序列のまま泳ぐ

逆らわず楽に泳げたいものを

大海で泳ぐ夢もつ葉がえる

浮き沈み八十余年泳ぎ切る

白寿まで泳ぎサメとも擦れちがう

寄り添つて親子鯨の波しぶき

月光を泳いで逢いにゆくあなた

犬かきで影も必死な不況波

平泳ぎ終えてひとりのひなたぼこ

お人好しカエル泳ぎでついでいく

難しいことは言わずに平泳ぎ

どう泳いでも貧乏はついてくる

温泉へひとりとつかると泳ぎ出す

力泳のいらぬ余生だ浮かべよい

マイペース何時か何処かへ泳ぎ着く

四方海泳げないのが不思議です

トツプきる抜手に波が高くなる

濁流を泳ぐ小さな鰭だけど

友がいる我が遠泳に頼みあり

白杖の手引きで泳ぐ闇の中

泳ぐのに飽きたか金魚死んだ振り

本日晴天ゆつるり泳ぐ鯉のぼり

佳

泳ぐほど向こうの岸が遠くなる

天地無用どこで泳ごうとも独り

溺れない深さでわたし泳いでる

煩惱と泳ぎ何かを見失う

泳法は一つ信念持っている

人

泳ぐのは疲れる浮いているんだよ

地

上流へ向かねば魚流される

天

大海に出てみたものの泳げない

軸

泳ぎ下手子にしつかりと見せておく

勝 視

ツ ネ

次 男

めぐみ

宵 明

啓 子

充 信

雅 城

潮 華

寿 美

隆 広

ミツ子

洋

美代子

とし子

日 枝 子

よしみ

緑 良

あずき

螢

満 秋

三宅保州

初歩教室

題 — とまごき

吐^は田^だ公^{きん}一^{いち}

前月号の「迷惑」の出題で、川柳には自由

吟（雑吟）と題詠とがあることはご承知の通り。題詠にも、題そのものを句の中に詠み込んで作句する場合と、その題の意味をよく理解し、題を詠み込まずに作句する場合とがある。この迷惑については後者（つまり題を詠み込まずに作句する）に適する題の一つだと思つて出題したのですが、案に相違して迷惑の文字を詠み込まれた句が多かった。このことが、同義語の弊を生む結果となつたことも否めない。

今後の作句にはこのような考え方も心の隅に留めていただきたいもの。

添削句

○煩惱がときどき起る老遍路

煩惱児

○ときどきは未だ煩惱の古稀の春

煩惱児

二句を噛み合わせてみると

▽煩惱がときどきよぎる古稀の春

○時々は可愛く見える妻なれど 正雄

中七に言葉を使い過ぎ。下五に情景がない。

▽愛妻が時々謀反考える

○時どきは親子揃うて飲む世代 西八重子

親子——世代を意味する（同義語）

▽時どきは親子が揃う祝い酒

○しよちゅうがときどきになり来ない客 勤

来ていた客が来なくなつたその客の安否を

氣遣うようにすれば——。

▽たまに來た客が途絶えて気にかかり

○ときどきは親孝行の真似をしろ 敬之介

下五の命令調がそぐわない。

▽ときどきは親孝行の真似をして

▽魂胆がときどき孝行しに帰る

○ときどきは長電話にて憂さ忘れ 郁子

長電話にての傍点の表現が好ましくない。

▽ときどきは憂さ晴らしする長電話

○細いすねときどき来てはかじられる 和可

もつ少し具体的な内容が欲しかった。

▽孫が来てときどきかじる老いのすね

○折にふれ愚痴こぼし合う友が居る つよし

説明句に近い。

▽耳障り時々こぼす友の愚痴

○やさし顔でときどききつい放言を 四三郎

下五はいただけない。

▽やさしい顔がときどききついことを言つ

○朝の道ときどき逢える楽しみで 純

このような場合ははっきりとあの人（方）と表現された方がよい。

▽あの人ときどき逢える朝の道

○ときどきに便りよこせと過疎の母 美恵子

ときどきにではなくては適切。

○一円に諭吉ときどき世話になり 徳三

諭吉（一万円札）が一円の世話になるとはどういうことでしょうか？

▽一円にときどき困る消費税

○ときどきは話通ぜぬいい夫婦 宏

話が通じなければいい夫婦とは言えないのではないだろうか。

▽ときどきは話通じていい夫婦

○ときどきはわたくしだつて省みる 省子

歳と共に妻の立場が強くなつてくると

▽ときどきは妻の立場をふと忘れ

○単赴任慣れたら電話ときどきに 一典

造語は勝手にしない方がいい。

▽赴任地へ妻がときどき探り入れ

○貸金庫ときどきなのでドキドキし 山雅子

中七が説明句にしている。

▽株券をとときどきのぞく貸金庫

○ボランテアときどき古老様子見る 宗明

下五はそのものズバリで味がない。

▽ときどきは孤老と話すボランテア

○ときどきは奥を盗んで芸の道 禮子

奥はやはり奥義とした方が――。

▽ときどきは奥義盗んだ芸の道

○ときどきは親切仇になつて来る 篤子

上下を入れ替えてみたりすることも必要ではないでしょうか。

▽親切が仇にとときどきしてやられ

○ときどきも人と事情で数違ふ 章司

言わんとすることは分るが、一度に多くを詠もつとしたところに無理がある。

▽好き嫌いがあつてときどき輪を外れ

○ときどきは鬼に成らねば孫天下 賢治

下五は解りますが句が直截的

▽ときどきは蟻の鬼になる祖父母

○ストレスはときどき川へ捨てに行く 美弥子

前後を入れ替えてみると

▽ストレスを捨てにとときどき川へ行く

○ときどきは誉めて欲しいと蟻の群 知華子

見付けはいいが視点を変えろと

▽ときどきは誉めてあげたい蟻の群

○ときどきは時計を戻し過去と居る 美也子

原句もいいが

▽アルバムとときどき過去を語り合い

○ときどきは電話で元氣確かめる 美子

元氣を確かめる相手を詠むと句が生きる。

▽父へTELときどき元氣確かめる

○先生もときどき小さい嘘をつき 勝久

着想は実にいい。ただ嘘をついたというだけよりは、励ます表現が欲しかった。

▽先生の嘘にとときどき励まされ

○気まぐれにとときどき動く古時計 泰雄

詳細は返信で

▽気まぐれに動くおやじの古時計

○子の夢に時には無心聞いてやる (三)八重子

説明句に近い。同じ内容を

▽ときどきは母を頼ってくる無心

○亡き母とときどき夢で会っている 君江

亡母との会話をいれると

▽ときどきは話が弾む亡母の夢

佳句

ときどきの見舞いに外の様子知る よしこ

ときどきは安否気づかう核家族 よし子

戦死した兄とときどき夢であう 美寿子

(ときどきの佳句、頑張つてね)

ときどきは愚痴ももらさずに胸が張る 志重

ときどきは道を変えたい人に逢う 輝夫

ときどきは顔を出してと母の愚痴 志津香

ときどきはきつい娘がアドバイス 円女

ときどきは譲って嫁と丸い仲 純子

時々が常連になる縄のれん 栄翁

ときどきは気分を変えてリフレッシュ 晚翠

小姑がときどき波をたてに来る 鈴美

心までときどきゆらく世が悲し トヨ子

病院の過失ときどきでも悪い セツ子

ときどきは歳の重みに生と死を トキ

ときどきはもしもの時を思案する 智加恵

正直な鏡ときどき意見する 民子

時々に見意を変えて世を渡る 靖雄

ときどきは思い出の糸手繰り寄せ 政子

涸れた愛ときどき探す玉手箱 タツエ

佗びしさに堪えてときどき羽目外し てる子

ときどきの言い訳灰皿山にして 青生

ときどきは喧嘩もします凡夫婦 ひさ乃

三世代ときどき出たい一人旅 春江

ときどきは想い出を酌む独り酒 節子

姑という鬼がときどき眼をさます てる代

釣魚提げてときどき呑みに来る トシエ

(楽しい友ですね) 舞夢

いかがです嫁がときどき電話くれ 舞夢

(いいお嫁さんですね) 舞夢

ときどきは女でいたく帯しめる (信) 信子

(いくつになっても女はおんな) 幸子

衝動買いそのときどきの悔いの色 幸子

(女の心理をつまく) 幸子

悲しみの仮面ときどき日に晒す 彩子

(言い得て妙)

私の句

初恋をときどき想う遠花火

■句画集紹介

『愛たしか』

恒松 叮紅 著

舟 木 与根 一

昨年の夏、叮紅さんが来年は句集を出すと言っていた事は知っていましたが、いずれ詳しい予定が分かるものと、つい暢気に構えていました。ところが去る五月の句会に突然、句画集をいただき恐縮しました。

帰宅後、早速句画集をひもとくと、愛たしか湯谷が二つ置いてある

この句画集のタイトルになった『愛たしか』の句と、俳画手法の草花が可愛い。

御夫妻の近影につづき二十二枚の色紙の川柳画と、二十幅の水墨絵が何とも言えぬ、落ち着きを見せています。さすが叮紅さんは水墨画の先生であり、水墨画の教室も持って色々活躍されています。特に達磨を得意とし、達磨を専門に勉強された事もあり、頼陽という雅号をお持ちです。以前、達磨絵の展示即売会を催された時、私も一幅求め、床飾りにしています。

次の短冊四枚の頁でも気が付くように叮紅さんは達筆です。それをいい事に私達は、大会の看板、兼題、席題の表示、選者名等々の表示も全部叮紅さん任せにし、大変迷惑をかけています。

あゝ紐を雨がつたわる八日の夜

一億が起きてる八日の残置燈

戦へる国健やかな寝息聞く

上燭へ世論ともかく僕は酔い

忘れたい事がつづいて秋深し

昭和十六、七年頃の句です。叮紅さんは十八、九歳と思われまふ。私はまだ十七、八歳

で、雑誌に載っている谷脇素文の漫画川柳を信じていた洩たれ時代に、叮紅さんは既に、

この様な句を発表しています。一歳や二歳で

なく、川柳ではずっと兄貴です。叮紅さんが

川柳を始めてから、もう六十年になるとか、

私でさえ五十年が過ぎました。

叮紅さんや、今は亡き通児君など郵政川柳

の人達と仲良しになってからでも、もう四十年にはなります。実は叮紅さんと私は、同郷

の生れです。昔むかし、朝廷の御用を務めた、

忌部氏が出向する際に精進潔斎をした地と言

われる忌(斎)部村の生れで、幼少の頃に、

恒松家(養子)に這入られたそうです。それで

特に親しくなり、現在に至っています。

人間の都合は酒が責めを負い
人間不信 部下も上司もそう思い
食べられるまではうなぎも芸がなし
悔いのない陽が退職の朝昇る

牡丹雪 人が倒産する話

このころに実父と実母を亡くされている様です。かつて「川柳塔まつえ」には祥月、晃男、叮紅、与根一、通児、孤呂一、鶴丸と意気のいいのが沢山居て「川柳塔」の巻頭言を斬る、のタイトルで本社へ投稿していた時期もあり、川柳塔まつえ七人の侍と持て囃された事もありました。

当時の侍も四人亡くなり、一人脱落で、現在では叮紅さんと私の二人です。

仏壇の横で聖書の子が開く

川涸れて亡母の洗濯石がある

ハナハトで育ち指先几帳面

幸せな顔が財布を開けている

跡継がぬ門が軋んではかりいる

辺鄙な地に住む私は叮紅さんに変お世話

になっています。句会后、叮紅さん宅へ押し

掛け、奥さんに迷惑かけているのも心苦しい。

この句画集に「素子作品抄」「白木蓮」と

花が添えてあるのも微笑ましい限りです。

この句画集の絵と「叮紅作品抄」の軽妙なタッチを充分に味わって欲しいです。



さようなら もうこれつきりさようなら

高田 美代子

美房さん、どうなさったのですか。まさか川柳の会場を間違えて、なんてことはないでしょうね。本社句会の真つ最中の五月七日夜八時頃、川柳塔の皆々様にお別れを告げるかのように、もう戻るつもりのない橋を渡られました。

昨年九月に二百号を迎えることになっていた「川柳藤井寺」の初代会長笠原吸江さんが六月末に、翌七月には長らく副会長をつとめられ、和歌山の岩出町に転居されてからも、相談役として当会を何かと見守ってくださっていた児島与呂志さんと、二人仲良く旅立たれたのでした。二百号句会には当然お迎えするべき主役を失ってしまいました。

しかし、これからは脂ののりも絶好調、新会長の美房さんの号令で新しい「川柳藤井寺」の誕生をと會員一同楽しみにしておりましたのに……。亡くなられたとは、未だ信じられなくて、なかなかこの文が書けませんでした。

何や彼とお忙しい方でしたが、生前にふと「その時には、美代子さん追悼文書いてや」と言われ、「そんなこと言うたらあかんよ、私は書かへんからね」と冗談に冗談を返したこともありましたが、どこかで体の変調に気が付いておられたのかも知れません。

ご葬儀の五月九日は母の日でして、昨年奥様の十七回忌をつとめられ、ホッとされていたご様子でしたから、ご子息様とお嬢様を立派に社会人として育て上げられました今は、つもる話を持って長い間逢つことの出来なかつた奥様の元へじきじきに出かけられたのだと思います。いいお爺ちゃまでもありました。

藤井寺百号記念句集より

女房から見ればせいぜい奴唄

美房

蟋蟀よ独りばつちになりました

〃

ランドセルうちの孫だけ何故可愛い

〃

一生を決めた故郷の丸木橋

〃

〃

藤井寺二百号記念句集より
新年の晴着は僕の情熱だ

美房

騒ぐもの歴史は雪を血で染める

まだ少し生きたし母の墓洗う

老兵にあれど世相をくやしがり

柿熟れて太子御廟に近き道

また、美房さんは子科練（第十五期海軍甲種飛行子科練習生）の御出身だそうです。

三重の海軍航空隊所屬で、同期会の方々がご遺体を霊柩車に移して、隊歌を歌い代表の方の「帽を振れ」の号令で、その昔、特攻隊が出撃する時の儀式に則って、一斉にかぶっていた白い海軍の帽子を打ち振って別れを告げられた。美房さんもきつと翼を振ってこれに答えられたことでしょうか。参列者一同肅然とお見送りしました。印象深いご葬式でした。

同期会の代表の方の弔辞がしみじみと「吉岡よ早かったなあ」で始まり「吉岡は気配りの達人であつた」としめくくられました。各方面から惜しまれての旅立ちだったと思います。今頃は吸江さん、与呂志さん、美房さんと顔触れの揃つた向こうで（奇しくも五月は栗先生の忌忌でもあり）賑々しく川柳の会が始まりそんな気がします。

長い間のお疲れにどうぞごゆっくりお休み下さいと申し上げてお別れと致します。合掌

本社 六月句会

六月七日(月)午後五時半

アウィーナ大坂

雨あがりの夕刻、六月句会は百十名の参加を得てにぎやかに開催された。

まもなく小出智子さんの三回忌を迎えるにあたり、会場にはあじさいが活けられ、遺影が飾られている。

はじめに五月に亡くなった同人の吉岡美房・矢野佳雲氏の冥福を祈り黙祷が捧げられた。

次いでNTTドコモの情報ポケベルにて川柳等の文芸を楽しむ「鈴句チャネル」の紹介、ポケベル柳壇への投句のお誘いがあった。

初出席に中井アキさん、中西康治・豊田敬司氏を迎える。

月間賞は谷口義(東大阪市)さんに輝く。(司会―金太) (記名―いわゑ・澄子)

席題「雨」

山本義子選

(受付―美代子・恵子)

あじさいの雨亡き人想う句集繰る 希久子
雨天決行安い玉子を買に行く 義

雨の日は棟梁家で棚をつる
とんぼりに浮かぶネオンは雨が好き
雨こんこ黄色の長靴お気に入り
雨上がり極楽浄土へ架かる橋
ピンとしたシャツで寝たい雨三日
愛されるために激しい雨期がある
煩惱を流す雨ならぬれて行く
恋するふたりやらずの雨が味方する
国宝の寺雨もよし花もよし
長雨にあくびしている万歩計
雨よあめ抱きしめられて炎えていく
傘持たず降れば迎えて来てと出る
午前様持って帰った女傘
梅漬けて梅より青い雨に会う
雨漏りを直して借家出てくれず
振興券で雨傘ひとつ買いました
降りだした雨に筋書きかえられる
雨降ると歩きたくなる嵯峨の里
人恋えばむらさき色の雨になる
人形の目が濡れている雨だろ
父の葬儀はどしやぶりの雨だった
雨風もびくともしな母の膝
みんな留守おかきバリバリ雨の午後
菜園に雨の恵みを教えられ
海峽の雨はあなたを忘れさす
雨が止む童話も虹が忘れておわる
雨だれのリズムへあわすひとごと
雨よ降れわたしの心澄むまでは
梅雨晴れ間男も女もよくしゃべる

石舟 靖巳 つづや 遠野 蒲絹子 森子 昭子 賢子 弥生 狸村 寿子 伽羅 かすみ 勇太 紫香 三男 信子 武庫坊 みつ子 鹿太 蒲絹子 かすみ たもつ 柳石子 保子 朝子 昭子 弥生

派手な傘買うて降のを待っている
住 どのや降りの中でひとこと聞きもらす
長雨にうなぎのぼりの電話代
智子の忌紫陽花寺の雨に付つ
言訳をしないで済んだ雨上がり
蟻ンコもせわしく動く俄か雨
人 雨にだつてそりや言い分あるだろう
地 物干しに家族泳がす梅雨晴れ間
天 祈りまだ届かず窓の雨烈し
軸 雨やどりつばめが居るとやさしい字
兼題「すんなり」 榎山隆盛選

扶美代 いわゑ 隆盛 寿美 愛論 ダン吉 勇太 みつ子 剛治 満津子 みつ子 高栄 朝云 諷云児 あやめ 笛生 千秀 倫子

お茶をつぐデカの情けについ負ける
 すんなりと研げない砥石に癖がある
 ごめんネがすんなり言えず胃が重い
 飲ませたらすんなり去んだことがない
 熱女対決すんなりことが運ばない
 ありがとすんなり言える子に育ち
 時刻表通りにいつも出る電車
 いいお湯で鬼もすんなり唄が出る
 すんなりと大きくなった子はいない
 すんなりと今日は謝る明日がある
 謝ればすぐに解決できるのに
 すんなりと話す決めて気が軽い
 すんなりと唇あげたのが不覚
 すんなり抜けぬ錆びた釘が効いている
 すんなりと逃げられ約束もつけない
 すんなりと着陸バンザイを叫ぶ
 すんなりと知恵の輪解けて茶がうまい
 透き通る太鼓はすんなりとひびく
 すんなりと誘われすんなりとほかされる
 すんなりとしないが茶柱信じよう
 すんなりと伸びた竹にも節がある
 すんなりと染まりたいから無垢でいる
 頂点にすんなり立った青い塔

佳

恭昌 恭雲 恭子 天笑 千秀 英子 大輪 陸子 伽羅 しげお 保州 愛論 石舟 一風 弥生 蘭美代子 まつお 森子 賢子 弥生 とし子 泰子 森子 陸子 勇太 楓楽 希久子

人 知恵の輪がすんなり抜けてから油断
 地 残照にすんなり溶ける夫婦の絵
 天 郷愁をすんなり包む童歌
 軸 すんなりと六月の朝衣替え
 兼題「虹」 高杉千歩選
 虹の橋世界平和を呼んでいる
 虹かけてひとつの恋に溺れるか
 どしゃ降りのときも心に虹を持ち
 六郎の絵の虹鳥が歌ってる
 恋すすむ虹を渡っているようだ
 離婚歴同士で出直す朝の虹
 夕立の雫と虹が残される
 母星に虹がかかる日逢いにゆく
 愛された記憶の中で消えた虹
 金婚の虹を待っているわけでない
 旅先できれいな虹を見た安堵
 寝返りをうつたたとんに消えた虹
 二人だけの虹を求めた観覧車
 二人ならきつと渡れる虹の橋
 虹を追う一期一会へ雨と晴れ
 母が残した十色の虹を掌に
 噴水の虹を見つめて待っている
 虹が出た子供のようにはしゃぐ妻
 虹を見た日から鱗が剥がれない

文 天笑 アキ ますみ 紫香 英子 いつぶみ 吐来 狸村 月子 希久子 泰子 いわゑ 信子 愛論 ダン吉 鹿太 義 夕花 保州 鹿太

虹の橋あなたと渡れたらいいな
 虹色の電車にのつた夏帽子
 ハードルの向こうに明日の虹が見え
 虹が出る隣の村が美しい
 振り出しに戻れば虹がよく見える
 虹などとは見たことのない塾通い
 さあ此処を渡りなされと虹の橋
 少年のまぶたに残る虹の彩
 虹見た日宝くじでも買いましよ
 いま虹のてっぺんにいる観覧車
 振り向いたあいだに消えた春の虹
 手のひらの小さな虹に気づかない
 虹を描くところを広く開けておく
 佳
 虹の輪に包んでやりたいコソボの子
 鮮やかな虹だ地球に核はゼロ
 髪染めで少女は虹に背を向ける
 しばらくのいのちを虹が演技する
 大阪の虹は笑っているようだ
 人
 病窓に女神のような虹だった
 地
 花火師も虹には負けたなと思ふ
 天
 難民の子が描く虹に色がない
 軸
 晩年の虹へ期待をかけすぎる
 兼題「怒り」 玉置重人選

天笑 アキ ますみ 紫香 英子 いつぶみ 吐来 狸村 月子 希久子 泰子 いわゑ 信子 愛論 ダン吉 鹿太 義 夕花 保州 鹿太

ママの目を三角に描くクレヨン画
 煩惱を叱る仁王の眼がこわい
 片寄ったジャッジ止まぬアイング
 トラ負けたぐらいで何で怒るの
 怒られる前にビエロになりきった
 怒ってるらしいピッチの早い酒
 すぐ顔に出している純な男はん
 怒り心頭プチプチ切れる感情線
 やり場のない怒りを花が慰める
 絵手紙に書けず怒りをおりたたむ
 怒るだけ損をしたよな青い空
 何もかも知ってて妻は怒らない
 無理してはあかんと言うて怒られる
 頑固だが心優しい怒り肩
 怒り狂った酒もやがてはさざ波に
 ドアボタン怒りを自分におつける
 鎮まらぬ怒りヘシヤワー熱くする
 怒ったら皺が増えると言いてあり
 正直でいっつも人を怒らせる
 怒りなと痛いところをついてくる
 怒ってるようだ鉛筆よく折れる
 耳も目も尖ってきたぞ怒ってる
 難民の子の目に怒り宿ってる
 ゲンコツの亡父の怒りがなつかしい
 ネクタイが怒りの邪魔になつてくる
 ガッツンと怒ってくれる人がない
 怒ったら何でも人にあげるくせ
 怒り心頭猫はそこらにもう居らぬ
 庭の草抜いて怒りもとけてくる

充子 剛治 充子 伽羅 節子 月子 天笑 富湖 鹿太 恵子 とし子 ますみ しげお 狸村 森子 昭子 雅文 冬葉 伽羅 哲夫 大輪 美代子 朝吉 朝子 靖巳 利武 一風 ますみ

テンションがあがる脛かじりの長電話
 大声で怒鳴った方がサギ師です
 声に出す怒りたいしたことはない
 カルシウム飲んで怒りをしずめよう
 怒ったら真正直な鏡です
 おもいきり机たたいて怒り
 佳
 怒ってる顔も知ってるコンバクト
 伐採の森が仕返し考える
 怒ってる人には同調してあげる
 今ここで怒ると敵の思っ壺
 風が止まって怒りを抱いたまま眠る 美代子
 人
 怒らすとバントタイムが湧えてくる
 地
 内堀をかためるまでは怒らない
 天
 ヒロシマの空は怒りを溜めたまま
 軸
 矛先を女将につこり包みこむ
 兼題「口」 福本英子選
 口笛を吹くと少年こちら向く
 花嫁もどうやら大分いける口
 投票に行かぬ男の減らず口
 口コミにつてコロッケ買いに行く
 突破口ガス抜きせねば納まらぬ
 三十年口喧しい妻といふ
 口止めの不味い酒だが美味い寿司
 千歩 保子 たもつ 房子 かつみ 利武 アキ アキ 金太 アキ 風云児 瑠美子 弥生 楓楽

夕花 かつみ 鬼遊 寿美子 あやめ 利昭 正雄

みな目の目が熱く集まるトキの口
 甘口のワインに本音吐かされる
 助けたい一心マウスツーマウス
 口紅の色ほんのりとまだ蕾
 出直しておいでよ私口説くなら
 口うるさく輪の真ん中で仕切る母
 口下手な私はペンを武器にする
 ときどきは出口を確かめておこう
 毒舌快調敵はまだだくたばらぬ
 病名を口止めされて行く見舞
 口元を掠めた私語を抱き続け
 口軽い男に噂流しとく
 一文字の口が妥協を許さない
 負け戦男無口な方がよい
 ありがとを口にしてたら敵はない
 口数が減ると心配してくれる
 力では勝てぬ女の口達者
 殻破る口生き生きと朱鷺の孵化
 ぶきつちよな手先を口が難したて
 あれこれと詮索好き口になる
 猫舌で熱い口づけ出来ません
 口封じの酒ならたんと飲んでやる
 片隅で野心を抱いている無口
 訴える力は口に負けぬ手話
 佳
 口裏を合わせた相手敵だった
 重宝な口があるから嘘をつく
 力ずくで開きはしないおちよば口
 傷心が無口な友といて癒える

保子 澄子 賢子 美代子 勇太 柳弘 千秀 義 大輪 かつみ 寿子 正坊 澄子 周信 三男 朝子 狸村 泰子 とし子 雅文 睦吉 丹吉 保太 文 諷云児 典子 楓楽

口止めのくすりは酒ですぐ溶ける

柳 弘

足腰の衰え口が引き受ける

いつみ

なるべくなら嘘を言いたくない口だ

信 子

辛辣な鏡の口を塞がねば

富 湖

災いの因にはしない口漱ぐ

兼題「運」

橋 高 薫 風 選

開運のお札毎年買ってくる

まつお

眉ピンと描いたら運が向いてきた

昭 子

これからの運は知らない子猫たち

たず子

ダービーを取ったぞ運が向いてきた

利 昭

三億円もしも当れば多すぎる

千 歩

運命を決める大学へ進む

螢

のほほんとラッキー賞を引き当てる

充 子

運だよと慰められてなおつらい

照 子

運がええだけでここまで生きてきた

天 笑

新聞の星占いを当てにする

鬼 遊

運試しもうこれっきりこれっきり

章 久

運命のリモコン電池切れらしい

弘 一

女運金運おまへん飲んでます

愛 論

運試し男の鼻をふくらませ

柳 宏 子

夫も娘も居て幸運の星の下

泰 子

運のない男のひげがよく伸びる

千 里

君と逢い俵せだった一本道

弘 一

杜運勝け乙旗あげる新企画

正 雄

運不運私に賭けた妻がいる

一 風

運のいい奴だ三度も妻を代え

かりん

無口だが運には強い姫だるま

月 子

母の背は運に關係なく丸い

澄 子

運だけで社長になったわけでない

瑠 美 子

これも運戦友会に並ぶ顔

武庫坊

運勢欄たはこの灰がおちている

とし子

運命の神とかけっこしています

ア キ

みぞおちのあたりで運が行き過ぐす

しげお

スーパへ出張してる占い師

かすみ

好運が続くすぎて毛に掛り

庸 佑

運のない男に惚れてからの運

半蔵門

運開く名もなき花の咲くように

保 子

二人分の運をたしてもこの程度

義

福助も猫も鎮座し運を待つ

遠 野

運命にノック無用と書いてやる

つづや

運なんてステンドグラスだと思ひ

瑠 美 子

なるようになるさと父は爪を切る

保 子

運不運神さまの沙汰待つばかり

剛 治

僕の運勢を誰かに覗かれる

扶美代

天 地

義 生 やし 運の向くのを待っている

義

軸

臘燭の焰と此の頃の運と

天 地

(清記—希久子)

藤本静港子川柳生活60年 記念川柳大会
句集『うたかたの抄』発行

とき 7月10日(土) 正午開場

ところ 兵庫勤労市民センター
(JR兵庫駅前・神戸高速大開駅南)

兼題と選者 (出句締切午後1時)

「匙」 長 島 敏 子 選

「仕組み」 里 嘉 矩 選

「守る」 西 川 けんじ 選

「静か」 奥 田 みつ子 選

「港」 田 中 新一 選

「子ども」 平 山 繁 夫 選

「ひかる」 中 川 一 選

席題なし 欠席投句拝辞 各題2句

会 費 3000円(句集呈)

懇親会 芳仙閣・会費3000円

主 催 ふあうすと川柳社

〒689-0405

鳥取県気高郡鹿野町鹿野一七九九
TEL&FAX〇八五七—八四—二一〇〇

暑中お見舞い申し上げます

弱きもの三つ絡めて日傘にも

中原 諷人・みさ子・汲香

老地獄

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔打吹

米田 幸子報

酔うほどに他人の妻に惚れそうだ
仇討ちをやつて見せると意地を張り
こつこつと努力を重ね今がある
こつこつと貧乏神が戸を叩く
仇討ちをするには丁度よい夜だ
赤ちゃんの握りこぶしにある未来
こつこつと働いたのにリストラだ
酔うまでは一合だけと決めていた
魂の叫びこつこつ聞いている
満天の星に酔わせてプロポーズ
こつこつと歩いた親の影を追う
花見行き人に酔っては酒に酔い
仇討ちも昔は筋が通つてた
騒ぎすぎ身元調査が仇になる
交差点ふとすれ違ふ恋仇
母ちゃんの茶漬がうまい酔いざまし
百までも生きるつもりか握る銭
こつこつと溜めて頑固な家が出来
運命の糸神様に握られる

喬水 禎元 貴恵 睦子 かつみ 和歌子 善江 芳光 多哥由 康子 順子 しろろ 信子 逸子 京子 孝恵 玲子 富枝 季芳

手を握る若い男女も板につき
妻の顔みたら観面酔いさめる
こつこつと前頭葉に老い溜まる
ライバルの弱味を握り春うらら
酔うほどに地金だんだん顔を出し
こつこつとやつと貯まらん葬儀料
こつこつと新世紀への戸を叩く
いのちを削るこつこつと音がする
お握りで真似るダンゴの三兄弟
こつこつと積んだ積木が総くずれ
酔うほどに妻が美人に見えてくる

うぶみ川柳会

上田 宣子報

人ひとり許し根雪が溶けてゆく
退き際を誤り株は落ちてゆく
風見鶏屈して暇がない
手漉し和紙さらさら夢がすきこまれ
勇退の名でリストラ仲間入り
難問をといて幸せ手ににぎる
問題をクリアしながら生きてゆく
問題はそこだそこだと煽るだけ
さらさらと命の枯れる音がする
出陣に男は退路断つておく
引退を考えてから活気出る
さらさらと過去押し流す大ジョッキ
怨みなどさらさら持たぬなど嘘だ
退いて腹に治めた強い妻
セクハラの間責避ける酒の席
不退転心に鬼を棲まわせる

玲泉 一夫 和枝 よしえ 博丈 一坊 玲瑩 勝見 節子 幸子 ひろこ 健一 静生 雅女 天雀 多哥由 ユリ子 正和 螢 良雄 あづま 黙光 洋々 也恵 葉士人

さらさらと書いただるまと睨めつこ
ブライドを一枚脱げば溶けあえる
定退のビルを仰いでもの想い
退くと見せて鋭い老いの剣
ごった煮の中ではよく溶けてくる

はびきの市民川柳会

安芸田泰子報

老夫婦たまの喧嘩もボケ防止
もう仮面外し語らう古希半ば
約束はきつちり守る砂時計
一陣の風に花びら滝となり
からっぽの頭に邪念よく入り
眼のあいたタルマへ公約念を押す
一本の旗を守って七十年
日の丸で送った人はそれつきり
君が代と国旗が揉めている平和
女房の優しさなにか気にかかる
目の届くところに優しい妻がいる
介護の手優しさだけは欠かせない
サクラ咲く瞳優しい子に戻り
見栄はらぬ靴がやさしく足に合い
ネオンなり傷口さける思いやり
駄々っ子がいらいらしてる長ばなし
いらいらとする針穴を逃げる糸
いらいらが箸に伝わる子沢山
富士山を背にシャッター押してくる
いつ見たらこんなきれいな時あるの
人見知りせぬ子にカメラ向けられる

華子 雄人 孝男 天人 宣子 俊男 たけし 重人 猿杵 専平 敏 志洋 吐来 昭平 敦子 かつみ 昇 辰子 絢子 りつえ 四三郎 庸佑 満寿蔵 末一 一貫 美喜

五パーセントシャッター重い日が続く
シャッターを上げれば外車顔を出す
シャッターを頼み寄り添うフルムーン
ライバルの振った尻尾に騙される

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

ゼロ敗の私に雨が降り止まず
ゼロからの出発 若さだけが武器
柿の種一つ童話が出来上がる
皇后さん童話にじむお人柄
童話の国めざして森へ迷い込む
ガイドライン怖い童話はやめといて
原稿にない話などうまく盛る
毒盛った皿だろ綺麗すぎないか
大盛りの愛食べ終り畢立つた子
スクラムを組むとフアイトが盛り上がる
ゆっくりと腰をすえれば先が読め
連休の街中ゆっくり老い二人
ゆっくりと話は後でまずビール
ゆっくりと歩けば孫に引っぱられ
終点が見えたよ急ぐことはない
一引いて一が残った日の別れ
機会均等やっとな俺も座る席
母鹿を探す子鹿の獣道
楽屋裏 夢がいつばい転がつて
見かえりの期待はしないボランティア
四面楚歌みどりみどりが目に沁みる
盗み聞きなんかしてない昼の月
ありがとぅ言いたい友がたんとい

ダン吉 利武 泰子 一壺 寿美子 正三郎 諷云児 吉太郎 庸佑 正坊 英子 柳宏子 享子 周信 悟郎 知香子 慶子 紫香 杜的 明光 肋骨 一笛 落児 石舟 萬的 しげお 重人

岬川柳会

八十田洞庵報

早起きが雨戸繰るのに気を配る
三歳児すぐ靴ぬいで走り出す
スピーチも以下同文にしたいもの
氣くばりをし過ぎストレス溜めている
ユニークなスピーチ多分へそ曲り
ほめすぎるスピーチ新婦苦笑い
震度三とび出し後で知るはだし
氣くばりが下手で横槍受けている
氣くばりの妻に差し出す感謝状
花嫁もこっそり欠伸金屏風
氣くばりで立派に咲かす胡蝶蘭
うたたねに妻氣くばりの忍び足
氣くばりも過ぎてイヤミと受けとられ
母の日に氣くばり嬉し子が揃う
浴衣着て素顔かわいいう駄をける
祝い酒スピーチ忘れエーエーと
英会話スピーチ済まし出る笑顔
披露宴スピーチ嘘ではめておく
言いたいのがぐつと我慢の Copp 酒
氣くばりの心に芽吹くボランティア
同じ地球にはだしのことも飢えている

寂子 年子 里子 とみ 幸子 みつ子 庄六 ユミ子 朋子 狸村 和美 正美 悦子 茂平 令子 孝子 通江 よし子 信博 みやこ 勇 洞庵

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

さくら咲く母さん五目ずしつくる
ムードに酔い夜桜に酔い人に酔い
大いちようぐらりくずれて勝ち名乗り

慶子 欣史子 喜美子

席を立つ機会失い苦悩する
妻の言う粗大ゴミとは僕のこと
春だ春だやっとなエンジンかかりだす
たくらみがありそう席があいている
こだわりを持ってあましてる昼下がり

香住 シマ子 能子 あずき 弘直

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

吟行に英一さんを偲ぶ丘
緑ふる恩智で元気ありがとぅ
春愁や大人になったさくらんぼ
石段の上で浄土の風さやか
こま大もあつんの呼吸でにらんてる
いい出あい追風うけたのぼり道
消えかけた命ゆすぶる五月風
無縁仏いつもやさしく風が舞う

隆盛 ダン吉 夕花 朝子 賢子 宏子 シマ子 一風

佳句地十選

(6月号から)

小白金 房子

ブライバシー固くしばったゴミ袋
本物の度胸は妻が持っている
せつかくの妥協へ割り込む風がある
幸せを探す草刈り鎌を研ぐ
善悪を混ぜ凡人として生きる
げんこつで示してくれた男道
さくらさくら私に元氣くれる花
本棚にとでも返せぬ恩がある
爪楊枝一本凄じ武器になる
川は流れてなき人の声つれてくる

能子 八斗 千 螢 武庫坊 しげお ますみ 希久子 勇太 やえ

どん底の風で育ってきた自信
子が去ってブランコ風をのせてくる
噛み応えあるご意見をありがと
あゝむかし悔し涙の恋だった
よう吠えるけれど噛んだりなどしない
ほぞ噛んで男の眉は太くなり
噛み合わずだまって私缶ビール
去る人は追うまい哀を噛み殺す

川柳大阪

坊農

柳弘報

陽ざし浴び道草楽し春の音
ありがとつ学びの友がここにいる
泣かされて痛みと知恵のつく一歩
学もなく金もないけど日々好日
主婦多忙しまい風呂浴び午前さん
学割が威張って座る電車内
経験が手とり足取り教えてる
幸せな孫に添い寝の妻の顔
経験がだんだん人を丸くする
夕日浴び今ふる里といふ錦
咲く花へ妻が慈愛を込めて朝
三歳児なんでんで学んでる
長男を真つ先に食う串だんご
善人で通すしんどいけど通す
全国のメダカの学校休校中
定年を祝う拍手にうれし泣き
窓際で経験生かしきれずいる
静けさが静かに動く朝日浴び
花吹雪浴びておいしい春の酒

欣之 三男 和歌子 柳宏子 ひろし 民子 森子 芳香 信醉 五郎 喜楽 楽子 かよこ 照月 隆司 叭笑 雅巢 洛醉 川童 本蔭棒 一風 青道 一步 比呂志 希久志 鉄心

恋人に振られた経験持ってます
逆風の度に経験強くなる
経験がこやしになった思いやり
クリントンしんどい男なんやなあ
経験の差はゆつくりと埋めていく
学校で学ばぬことが身を助け
経験豊富ゆつくり風をやり過ぐす
ナンバした事を話せば長くなる
八十五歳まだ下っ端の長寿国
喝采を浴びてうれしいカムバック
打たせ湯を浴びる女の恋いくつ

川柳塔なら

坊農

柳弘報

若き声選手宣誓空に浸む
札東に転んだ風がキナ臭い
代表の誓いさわやか甲子園
代表で表彰授与に手が震え
銭湯の煙突消える町の冷え
肩一人ただそれだけで帰省する
雨書きは代表腰の低い人
雨煙る峠の茶屋に置くりユック
あの人と居れば心が神になる
代表がそれぞれおらが国自慢
七転びまではよかつた母がいた
喫煙の父があわてた母子手帳
子を論す親よえんまの顔をして
最後まで仮面をつけて母の舞
昼休み少女の顔で吸うタバコ
転んでも一人で起きる癖をつけ

敏 元紀 朝吉 ダン吉 笑風 柳宏子 金太 まつお 三十四 重人 柳弘 高栄 美和子 李世恵 幸代 民子 春蘭 雅巢 たけし 天狗 悟郎 とし子 絹子 良一 孝子 あやめ 茂雄

代表の顔は自信に満ち溢れ
ここの一番やっぱり転び癖が出る
春一番天使の転ぶ音を聴く
日の丸の意識が堅くなり過ぎる
煙だけ見てりや繁盛してゐるらし
代表の姿勢くずさぬ靴の紐
心臓のカルテ禁煙迫られる
朽ち果てた番屋にころぶ酒の瓶
忘却の中を転がるラムネ玉
逆転のドラマ拾ったのはいのち
お茶の間で母は黙ってリングむく
古里を捨てて転んではかりいる
あかんたれいつも煙にまかれてる
寝転んで地球と同じ呼吸する

尼崎いくしま川柳会(前月)春城

年代報

平成ふたけた袴ひらひら卒業す
日の丸は無心ひらひら風と会い
春風にひらひら揺れるバスの絵馬
ひらひらと襟足撫でて風小僧
一つ山崩しからのとばっちり
山間の友の便り路の臺
がむしやらに明日を信じてのぼる山
山は春黄砂に乗って弥陀の雲
山を甘く見た春の凍死体
山動く都知事選に顔と顔
振り向けば小さな山に負けるだろ
一年のみにかきを見る桜かな

典子 直子 洋子 眞生夫 千梢 常念 隆盛 秋雄 朝子 一風 愛論 千歩 真理子 ヤス子 弘治 正子 義芳 歌子 ヒサコ 十四郎 伊三郎 光穂 節子 美子 キク子

さくらさくら歌うあの子も桜いろ

あやしげに花芯を見せぬ八重桜

ここは異界か桜の下の仄暗き

パスデーカードへ一片のさくら

世渡り上手だが尻尾を振っている

過去を問うもしもしもの多い過去

糸底に私の秘密かくしおく

メインディッシュの皿バネがすねている

春の貨車響き蛙も穴を出る

そっくりなわたしと歩く夜の廊下

整形をして見たものの同じ顔

錆付いたレール外して独り立ち

片隅に陣取っているわけがある

朝シャンが似合う瑞みずしい女

川柳塔鹿野みか月

土橋

罪ひとつ消えず浄土に遠く居る

助手席に人妻このまま消えようか

仏に遇って罪人だなと悟り

石楠花が投入堂の崖に咲く

海峡をなんとか漕いで渡っている

海峡を越せたおかげで嫁になり

力尽きた海峡のと真ん中

海峡をたずねた人と春惜しむ

何とも言えと海峡渦を巻く

海峡もソーラン節で賑やか

心重ねても海峡がよこたわる

雲集の中でトップを競っている

我を捨てて雲の流れに沿っている

愛 久子

薫 芳子

夢之助 恵子

千恵 静

武庫坊 紫香

一笛 沙置子

年代 翠子

蟹報

幸枝 明美

喜与志 陸子

久枝 保子

みさ子 富久江

八重子 子

鬼 茂

節子

山陰の雲は雨傘セットさせ

四季の雲知らず足許ばかり見る

雲になって千両箱を降らせたい

開通に雲ひとつない幕明けた

本音まで置き去りにする雲じやない

雲行きを陸船頭が読んでいる

雲を包む大風呂敷を広げると

雲行きにはやばや名刺持ち歩く

ばくろの街雲のない日もたまにある

輪くぐりに浴衣姿も粋なもの

小さいがみんな繋いで大きな輪

孤独にはしてはならない輪を作る

煩惱は切れず輪廻の続く道

同窓会それから愛の芽が伸びて

変声期それから部屋に鍵がつく

それから梨の礫になった女

それから禁句涙を零すから

かわはら川柳会

上田

ガラス越しウグイスの声さわやかに

ガラス越し見える隣はゆたかそう

みがいても光りそうないガラス玉

ショウウィンドー素敵な服は身にあわぬ

ガラス窓映える夕日に夢を追う

華麗さに鋭利感じるガラス器具

ゆつくりと老後の坂を二人づつ

一周忌すぎてゆつくり偲ぶ母

傷痕をゆつくり春の陽にいやす

ゆつくりとりハビリの足春の道

公子 盛桜

蟹郎 かつ乃

諷人 石花菜

はるお 実満

完司 菊乃

汲香 和枝

和子 弘子

忠良 螢

きみ子

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

螢

うさぎ歳ゆつくりカメときめて生き

司馬遼を手にゆつくりと道の駅

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

いつのまに亡義母の影絵を踏んでいる

勿体なくてつい包装紙コレクション

ピンク着て私も街の彩になる

名水売り出す知恵を持つ町長

ジャーマンアイリス仕立ておろしの顔で咲く

砂山に登りきれない蟻がいる

臓器移植に仏どきりして居るだろ

陽だまりの中へ悩みが溶けていく

我が家でも負けず劣らず花回廊

椿谷なんじやもんじやに会ってくる

虫も友れんげ畠に臥してみろ

続編もほどほど女野に遊ぶ

道連れはお天道さまという強味

花曇り乙女心が読みとれぬ

接ぎ木した樹に逢いに行く緑にぬれて

まっ先に知らず喜びの灯明

さみどりの中で若さをもらいたい

姑の形見の帯を捨てかねる

風船は川の幅まで考えぬ

針のせいか私のせいか無器用な

次の世も花守りさせて阿弥陀さま

目の内に揺らめいて藤の棚

日ノ丸の無念ずきんずきん染みる

頼られる傘でなかなかたためない

手作りを配り私はお下がり

悦子 俊路

麗

すみえ

文葉

花子

やえ

晶子

弘子

由美子

恵子

寿々子

春枝

瑞枝

てい子

八重子

日枝子

玲子

田鶴

天雀

千春

亜弥

ゆき

ふみ

富美子

なみ

残り時間と遊ぶ綾取りの指
あとからあとから椿が落ちて椿が咲いて
一筆を書き終えたとき鶴が鳴く

京都塔の会

松川

杜的報

幕引きもひと信号を待つゆとり
信号の通じ合うまで手旗振る
待ち人は来ず信号は青だけで
知ったふりの顔が並ぶピカソ展

知りませんと言つてる影が知つて
人柄を知った時から友になる
ライバルに知られぬようにバズル解く
子雀は隣の庭も知つて
祭寿司彩り嬉し紅生菱

とび出してそつと紅さすバスの中
嬉しい日少し濃い目になるルージュ
口紅は無駄やと妻に言えません
紅さし指 翡翠が匂う嫺の手

くすぐるような言葉はおかけにならないで
里心くすぐる母の宅急便
女心くすぐる春のモードショー

追伸にとつても効いたくすぐりが
くすぐられ笑つた顔が父に似る
疑いに命くすぐるレントゲン
くすぐるとぼろり本音が覚えてくる
愚痴も無き余生の一日春苺
頼むから親より先に死なないで
三姉妹それぞれ八十路の登り坂

荒介 千代 雨学 睦子 友照 吉之助 宏子 豊次 紫香 百合子 杜的 柳宏子 満子 波留吉 芳子 正坊 求芽 龍小 典子 飛鳥 庸佑 春蘭 笑女

半平太も小五郎も居る京の雨
来年も元気で会おう雛仕舞う
三階建てにはさまれやつと日足伸ぶ
カラオケでたいやきくんをうたつて来
親子連れ青葉にチラリ夏帽子
再生紙とことわつてあり興さめる

倉吉川柳会

松本よしえ報

大店に流れる客に都市悩む
三代目男生まれた鯉のぼり
宣誓の声青空に吸い込まれ
どこまでも流れてみたい君となら
青空が出れば釣り頃釣られ頃
裏金の流れる方へ票が行き
親のゆめ見栄なびかせて鯉のぼり
女の子私もあげる鯉のぼり
流し雛浅瀬でちよつと振り返る
男の子いるぞとばかり鯉のぼり
さわやかに癒りも溶かす五月晴
ああのぼり私の句を思い出す
鯉のぼり団地の窓でかんでん死
笹舟も流れにそえぬ意地がある
のぼり見て今日の献立決めました
客人の顔で女と擦れ違ふ
二次会が流れて下戸がホツとする
青空にこころは許せと論される
長男に期待をかける大職
青空を味方につけた五連休
青空にしまなみ海道ををつなぐ

達子 武庫坊 年代 美穂 とし子 水客 小生 天雀 雄々 節子 志郎 喬水 克枝 久子 玲子 ちよ子 康子 和歌子 一夫 西喜美子 十三男 季芳 よしえ 和枝 智子 悠子 賀寿恵

パソコンに変な客だと出て困る
騙されたままで流れに乗つてみる
イラク・ユーゴ武器商人のいいお客
客員の教授で飯を食つて
つまずいて流されながら生きて行く
それよりは高く揚がらぬ鯉職
同居して若い流れに負けておく
わたくしが流れつくのは針の山
青空の下ともだちの計が届く

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

バレードへ無理して買ったテレビジョン
バレードの余韻火花がしめくくり
バレードを追いかけべそをかく迷子
バレードの車日本一を乗せ
神戸まつり裏の更地に草のびる
パレードの熱気にウキウキする手足
叩いても埃も出ない平暮し
キイ叩くこの指炊事はしない指
叩かれ恨んだ親のあれも愛
出る釘は叩かず抜いて捨てましょう
出る杭にならず溺れぬほどに生き
老い迎え淋しさ叩きつけて春
なおらんなあビールの栓を叩く癖
石橋を叩いておれぬ世の移り
やつと花咲いて小さく手を叩く
人生の裏わざみがく辞書ほしい
本棚の中で昼寝の大辞典
あたたかい言葉をもろう 辞書を繰る

次男 ゆり子 石花菜 かつみ 喜美子 螢 睦子 きみ子 完司 直次 竹二 ただし 祥風 桂子 セツ子 正安 よしろう 見清 肋骨 千里志 久子 雪子 和歌子 吉太郎 善守 螢柳

生き字引おろそかにした報い今

辞書を引くワープロ叩く世代の差

辞書枕少女は春の夢を見る

辞書を手に首にルーベのペンダント

大廈なく礎石でたどる青丹よし

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

風みどり素敵なひとを連れてくる

葉桜の辻の交番いつも留守

新緑はいなき初心にもどるから

言われなき罪を引きずるカイワレ菜

顔見世はいつも天井棧敷です

午後の会議天井だんだん重くなる

包み込む度量の無さが嫌になる

シンフォニー天井棧敷の気楽さよ

嫁が来て流れが変わる水の音

風が変わるわたしも変わる夏の雲

今更に自分を変えることもない

変わったことも出来ず輪の中にいる

振り向けばもう葉桜になつて

嫁が来て俺でも気分若返る

大病を克服人生観変わり

妻でない顔に仕立てて門を出る

変りない鎮守の森の木匂い

いやいやを覚えた孫の片えくぼ

好きでない自分のために米洗う

以心伝心先方さまも嫌という

雑音の嫌な記憶があるラジオ

嫌ですと今叫ばねば悔い残る

勝

柳童

散子

保子

馬洗

しげお

トミエ

千代

嘉代子

義子

絹子

富喜子

信子

たす子

みつ子

いわゑ

能子

鹿太

哲嗣

静子

晴美

比ろ志

涼子

てる

春蘭

石舟

正とし

食べず嫌いの皿の円周率である

嫌煙ブームの中でさびしい煙草吸う

嫌という言葉の裏に深い謎

メーデーの旗に元気がおまへんなあ

拳骨を聞くこぬくい血が通う

山歩き鶯鳴いて一休み

自己主張過ぎて世間を狭くする

脇役で数をこなして生きている

川柳ささやま

酒井

靖子報

骨壺は小花模様と決めておこう

清貧の日々へ誇りをたしかめる

陽炎の誘いにのった萌黄服

自動ドア開いて客になります

重い口開いてばあさん意見出す

髭伸びた軍服姿遠い夢

喪が明けて笑い袋を持ち歩く

春萌える耳掃除する妻の膝

肩書きに髭もしっかり付けておく

知らん間に開いた距離が縮まらぬ

定年の行く当てのない無精髭

若草の萌ゆる思いに手をかざす

間魔から誘いが来ても暇が過ぎ

三分粥こんなに美味い無精髭

暇人の真心一途を編みます

開けゴマ使えればいい夢がある

年金のくらゐ暇までついてくる

掃除する暇もなかった子守唄

風采が落ちると無精髭がいう

比呂史

美智子

武庫坊

周信

哲子

松煙

萬的

房子

純子

恵美

多美子

美智子

末野

かほる

八重子

素水

とみ子

つや子

すず子

かつ子

富美

芳郎

ヒサ子

泰子

美沙子

房江

美緒子

萌える日へ指切りがある蝶の風

家計簿を開くと悔いの跡がある

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

新緑の息吹にこころ洗われる

東の間の一生でした春の雪

一生をすばらで通し悔いはない

白衣脱ぎ膳に座ればタイの人の

いい目を演じすぎてた結果論

母の日にそつと手渡すプレゼント

パリトンの受話器イメージふくらます

一生を笑顔で母は苦労する

ラーメンの美味いイメージ良く売れる

イメージの悪さ眼鏡でカバーする

一生の残りテクテク百度石

若い頃は美男子だった写真帳

百歳の地図に定年などはない

偶像に衣服をさらう印象派

産声から親はイメージ膨らます

ふるさとの森に残してきた若さ

若いのが一人交じった華やかさ

はまゆう川柳会

中後

清史報

料亭の密談聞いた錦鯉

少子化の生命をつなぐ鯉のぼり

公害のない空が恋しい鯉の群れ

鯉も見た池の主の浮き沈み

差し上げた子も入れて撮る鯉のぼり

イベントに役立つ古い鯉のぼり

可住

靖子

江美

鹿太

哲嗣

モトコ

イサミ

亀子

幸子

まさ

六浦

勇次郎

弘治

夢之助

正治

満寿蔵

澄子

十四郎

紫香

佳子

たけし

すみれ

利ぼん

太一

華水

不況風受けてだらりと下がる鯉

二人目の孫で期待の鯉職

友情を裂いた合格不合格

合格へ神を信じたピアスの子

合格が明日の夢を加速させ

合格はしたが授業に追いつけず

合格の裏に涙の不合格

合格に一足早く春を知る

合格へ春一番が心地よい

内緒事孫の口から零れ出る

番傘をさしてボタンが咲きこぼれ

両の手に零れるほどの母の愛

子に零す母の涙にある温み

落ち零れすれすれの子に世話を掛け

サークル檸檬

小林

一夫報

からだの中を風が吹く日は食べ過ぎる

骨密度がわたしの歳を言いふらす

無料パスを示す花曇りの老人

団子汁ばかりだった日の青春

イデオロギーの違いを敵にしてみよう

気付かれぬうちに傷口縫っておく

四角いだんごあってもいいね新世紀

アンパンマンの鼻がいい味出している

だんごコロコロ兄弟みんな仲が良い

同病がうなずいている立話

もめごとの座を抜けて来てかたつむり

妥協するたびに心がささくれる

野宿者数千 桜満開 大阪市

サト美 雄造 優子 公治 清史 修也 美佐子 平和 恵美子 さだ代 国彰 生米子 雅視

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

仏心を杖に訪ねる花の寺

訪問看護やつと笑ってくれました

ふるさとを訪ねて拾う生きている知恵

困ったらいつでも来いと言ったのに

音沙汰のなかった人が来ると言う

訪ねたら井戸だけ残りハイウエー

期待して訪ねる宿にあてはずれ

訪ねると犬は吠えるが人は居す

もう一度きつとと惚れる青葉山

思い出を訪ね沢蟹買いに行く

往復キップあれば極楽訪ねたい

花籠の訪問母の日の舞台

幻を掴む手だからよく洗う

変幻自在妻は鬼にも仏にも

百万本のバラに囲まれ目が覚める

幻想の世界へ誘う考古学

ゴミ抱いて川も疲れているだろう

新緑へ五線譜疲れてから覚める

言い勝って見ても気疲れだけ残り

お疲れさま嫌味たっぷり朝帰り

濡れ燕疲れも見せず子等へ餌

俺の目に狂いはないと信じてる

秘話洩れて注目の中くずれゆく

注目を集め物おしせぬ子役

注目がはしくて君を通せんば

親切な茶髪皆の目を集め

倅せであれ三三九度に注目す

高夫 裕美 利治 保州 豊太 あつむ 百合子 吞天 公子 ふみえ 良一 英子 大輪 和重 さち子 鉄治 富湖 寿子 紀美女 三男 泰子 射月芳 佐代子 千寿子 稚代 美子 輝子

注目のなかで自分の相撲とる
当選者のその後注目していよう
マスコミに注目されて出る埃

川柳塔唐津支部

松涛庵正剣報

悪の華大きくニュースうたいあげ

鈍行に乗る順番を待っている

もう遅いうっかり乗った口車

寡婦覚悟妻が老後に備え出す

山里の灯も一票選挙カー

竹の皮おむすびころり思い出に

默契の撒き餌に集まる雀たち

激みに新しい芽は育たない

挫けそに成れば故郷の母想う

春の宵鳥よ遠慮しておくれ

カルチャーで泳いでみせるうちのママ

核廃の悲願も吊るす竹の笹

竹原川柳会

時広

一路報

妻になる準備あなたのためにする

何歳になったら大人なんですか

妻の実家で妻を小さな声で呼ぶ

妻よりも母で来ましたというは坂

年ごとに貫禄つけた妻が座す

何事も丸く治める妻の口

妻の愛言葉はいらぬ心だよ

妻の背が丸くなったとふと思っ

健やかな妻の寝息に救われる

波乱万丈妻がいたから越えられた

克子 富美子 実 輝夫 勝視 水笑 タミ 幸夫 晴翠 高明 虹汀 四郎 正剣 史子 高千枝 蘭幸 千年枝 笹舟 節生 夏喜 貞子 喜美子 一枝

共稼ぎ妻にもあったスケジュール

川柳を愛する人の懐かしき
桜さく生きる火種を掘りおこし

満開の桜に魔法をかけられる

旅人がいる町で買う春の旬

竹工房トンボ ススキとゆれている

ドライブの眼に爽やかな竹並木

もついちど作戦練って坂登る

不景気ヘリストラという急な坂

老いてゆく坂だ何を残そうか

坂の途中で春に出合った寒椿

なつかしい坂だ黄帽子が通る

この坂の上に天女の飲んだ水

遅々と船海にも坂があるんだな

歩には歩の哲学がある登り坂

坂登り切って仏の慈悲に会う

坂の途中で休みたくなる店がある

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

雄々

騙された胸のしこりに縄のれん

朴訥が華奢なうなじに騙される

恍惚の父を騙して褒めている

いつも騙している私の心

拗ねる子を騙し気をもむ老眼鏡

騙されそうない話聞いている

油断から出た一言で仲間割れ

緊張がはぐれてふっと油断する

ライバルへ油断は出来ぬ棒グラフ

油断してすこし狂った花時計

房子

喜久恵

太虚

比呂子

年子

規代

正宏

節力

美佐雄

笑子

栄恵

不効

静風

菁居

一路

油断してお隣さんに騙される

スパイとは知らず油断を口惜しがり

湖茜余生の見栄は捨てました

ささやかな見栄かも知れぬトロの味

見栄張った買物重し気も重い

ノーという見栄を少し悔いている

しがらみと見栄が織りなす世間体

外出に母と娘の見栄くらべ

絵手紙に別れの訳を書きました

絵手紙に結ばれきずな深くなり

絵手紙は恋をしている色となる

絵手紙でズバリ急所を衝いてくる

下手でいい素直でいいと絵の手紙

絵手紙の中に希望がこめてある

矢張り張りの別れみている昼の月

さびしいとやつぱり湖に来てしまふ

本心をやつぱり映す姫鏡

青空がやつぱり似合うにぎり飯

母の癖がやつぱり継いでいたわたし

性格がやつぱりさせる几帳面

大原川柳社

矢内寿恵子報

朗報へ心の襷を開けて待ち

追伸に泣かせてくれる演技力

昇進の辞令にもえる指の先

あの時の軽い一言仇となる

軽々と受けて返事に苦勞する

迫真の演技へ涙拭いている

やんわりと誘う演技も年の功

和歌子

煩悩児

多賀子

茂美

邦代

きみ子

登美子

螢

哲雄

ひふみ

与根一

義良

登志子

みえ

すみこ

畔

久枝

太泡

桂子

町紅

失恋のうつぶん晴らす草を焼く

ジグザグな陽気へ草が吐息する

草むしる小さく丸い母の背な

軽口をたたいて本音覗かせる

演技ではない父母への恩がえし

朗報が届いた朝の良い笑顔

あわだち草こもバブルの夢の跡

草餅が恋しくなった電話口

震災の傷跡縫うて草萌える

軽い荷を持たせてくれる年になり

魅せられるバントマイム的好演技

新薬が出来て明るい闘病記

口軽が噂の種を蒔いて行き

軽い口女の坂はよく転ぶ

ポスト拭く明るい報せ来るように

ペンペン草問わず語りをくり返す

三幸川柳教室

三宅

保州報

意思表示無難な方へ回れ右

一期一会春の回転ドアが開く

回想のページへ春の花を置く

気を揉んだ最終回が呆気ない

秒針に振り回される予定表

工事中遠回りして工事中

流暢に回っているのは二枚舌

手探りで回す明日のルーレット

文学部のレポートにある誤字当て字

コンピューターお陰で恥も多くなる

身内の恥をあなた淋しくしないで

正己

巴子

こふゆ

敏子

南花

美佐子

はじ芽

たづ子

ひでの

昭子

絹子

地佳平

静子

和子

あすなろ

寿恵子

初子

三千子

公子

章子

当代

美子

町子

碧

鉄治

正匍

みね

意地と恥づけた女の絵袴天
電池切れ恥かくことが多くなる
恥かいた顔は洗つてリサイクル
オキシフルで洗う昨日の恥その他

満洲子
めぐみ
起世子
朱夏

願ひ事ばかり仏の耳袋
生きているうちは欠かせぬ耳掃除
おのおの方油断召さるな壁に耳
音絶えて人恋う耳を失はせる

百合子
美寿子
清

耳を打つ言葉ノイズの中にあり
一服を盛る耳掻きを買に行き
耳打ちは味方ばかりと限らない
補聴器をそつと叩いて春が呼ぶ

さち子
秀男
和子
千秀

国の旗国歌で悩む式次第
行く道と心をこめてする介護
知らぬ身へ臓器委ねて逝くドナー
大国のエゴが飛ぶとぶトマホーク

豊太郎
かず子
登美代
桂香

産廃のオカラが好きで元気です
民絞リバンクへ貢ぐ低金利
仏にも鬼にもなれる浮動票

正一
保平
和代
嘉平

川柳塔ふくべ
橋本多哥由報

寛子
螢
信子
かつみ

姑気どり仕込みすぎたか席がない
からみつくり猫に愛を少しやる
約束をした指切りがあたたかい
迷惑だ延命パイプ遠慮する

一枝
単車
昭恵

尻拭い出来ず迷惑かけたまま
御免なさい駅のベンチに置いて来た
猫の目で見れば人間隙だらけ
ハチ公が約束今も守つて

多哥由
春恵
多哥由
志華子

悲喜こももこ計と出産の人生譜
被災地よりき煮が届く安堵感
まずいなお誕生日と知らず寄り
お迎えを待っていますと医者通い

千恵子
春蘭
チサ子
トヨ子

向かいのホーム会いたい人が立ちている
まずい話かブランコ二つ動かない
食卓に今日のドラマを盛り上げる
人生のトロッコ情性で未だ走り

久留美
睦子
白峰
順三

城北川柳会

神夏磯典子報

猫可愛がりしたばかりにもあます
苦も楽もある学び舎を卒業す

春恵
多哥由

花だより友のお燭を聞いてみる
まだ生きている余生の弾み梅漬ける
菜種づき止まぬ小雨に泣くすみれ
厄納め帰りの足の軽いこと

千恵子
春蘭
チサ子
トヨ子

長生きの友は心に皺がない
旗色を見て軸足を置き変える
長生きに知恵の袋も軽うなり
長生きをせねばドナーに相済まぬ

典子
史風
登美子
あやめ

春ですね出好きの足と馬が合い
新入の社員敬語のまずいこと
旗色を器用に読んだ風見鶏
アメリカに頼つて油断日本海

達子
あい子
重人
政子

桜咲くまずい話は明日聞く
長生きをほめる言葉のうらおもて
殺伐としたニュース聞くもどき冬
早すぎた亡母の命も足して生き

政子
ただし
ひさ乃
とし子

志華子
一枝
寿美子
千歩

無遠慮だけれど憎めない男
無事に春散るのは桜からでよい
ブランコの風は弱者に味方する
それぞれに違う個性の花を盛る

高栄
久留美
睦子
白峰

見解の相違揚げたくなる狼煙
参列者違いで分かる逝つた人
訥弁のはつたり可愛いなと思つ

睦子
睦子
睦子
睦子

人間の野性が消える世紀末
サクラサクまた痩せ細る親の脛
人間の匂いを消せば木偶になる
カタログのモデルとの差をつい忘れ

長生子
長生子
長生子
長生子

川柳塔みぞくち
小西雄々報

豊枝
公美枝
和代
信敬

童顔で志願の兄は征つたまま
長兄は余裕をみせてあせらない
兄ちゃんのお下がりはかりつまらない
兄の里たまに仏と風に会い

朝子
はじめ
千里
道子

父母逝つて兄を柱にして生きる
兄よりもびのび育ちつき進む
貸し借りのできる兄弟愛をもつ
見返りは言わぬ愚兄の手が温い

公一
公一
公一
公一

兄という大きな糸にからまれる
悩みごと兄に話せば心風ぐ
移ろいの哀しみ兄の背が曲る
限界へ兄が大樹に見えてくる

雄々
雄々
雄々
雄々

東大阪川柳同好会
森下愛論報

晋吾
萬的
定男
度

物騒なこつちやパンから針が出る
無遠慮だけれど憎めない男
無事に春散るのは桜からでよい
ブランコの風は弱者に味方する

朝子
雅文
東雲
恭昌

それぞれに違う個性の花を盛る
見解の相違揚げたくなる狼煙
参列者違いで分かる逝つた人
訥弁のはつたり可愛いなと思つ

朝子
雅文
東雲
恭昌

見解の相違揚げたくなる狼煙
参列者違いで分かる逝つた人
訥弁のはつたり可愛いなと思つ

朝子
雅文
東雲
恭昌

見解の相違揚げたくなる狼煙
参列者違いで分かる逝つた人
訥弁のはつたり可愛いなと思つ

朝子
雅文
東雲
恭昌

見解の相違揚げたくなる狼煙
参列者違いで分かる逝つた人
訥弁のはつたり可愛いなと思つ

朝子
雅文
東雲
恭昌

見解の相違揚げたくなる狼煙
参列者違いで分かる逝つた人
訥弁のはつたり可愛いなと思つ

朝子
雅文
東雲
恭昌

なんべんも釘をさされる浮氣癖
古釘の首が飛んでもしがみつ
なまくら釘を上手に使う妻
気短の手だなと釘が知っている
生命の移植の陰にドラマあり
生命の神秘にバイオ触れている
島に住み慣れて生命が透き通る
惜しまれて花の命のいさぎよさ
生きていてよかった今宵花の下
貴方なら生命預けて眠りたい

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云見報

賢子 柳宏子 ともつ 太郎 千代子 猪太郎 湖風 頂留子 緑 愛論

諸行無常池の鯉にもボスがいる
静かさに謎を深める古い池
喜怒哀楽やさしく包む母の池
そんなこと言って覚悟は出来てるの
転動を覚悟してたが倒産に
消しゴムで消える覚悟を捨てにゆく
しがらみを捨てて覚悟の爪を研ぐ
おおかたはジョークと思う褒め言葉
ジョークでもいいから好きと言ってくれ
去り際のジョークが少し気にかかる
うっかりのジョークに長い後遺症
失言をジョークジョークと蓋をする
名残り惜しいテラブが水に落けて行く
骨惜しみにしないとを認められ
春障子が揺れて朝寝が惜しまれる
惜春に小さな愛を抱きしめる
惜しい人だったと屋台のコップ酒

萬的 澄子 秀夫 治三郎 惠美子 満寿蔵 稲子 波留吉 紫香 あやめ 克治 高栄 典子 晴美 スミ子 磯

名案を机上プランと没にされ
ちらちらと煩惱ゆする色がある
漁り火がチラチラ揺れている旅愁
窓越しにちらちら回復期のパジャマ
泣き言は言うまいちらちら星光る
車内から電話でケンカしてごさる
趣味に生き心に齡を取らせない
派手好きの父のお通夜だ賑やかに
新緑にバトンを渡す花霞
ライバルの尾の振り方に負けている
恋は進まずおぼろおぼろのさくら闇
欲ばけとさほど変りのないパケツ
さくらちらちら無情の風が掌に残る

川柳塔おっぱこ吟社 木村あきら報

一票の重さを運ぶ車椅子
女一人生きる覚悟の花バサミ
一匙の秘伝は見せぬ薬ツボ
胃袋のウツを飛ばした内視鏡
トンネルを抜けたと米寿の父母が待つ
迷惑と言うに言えない義理一つ
方向音痴地図持たせ度い西の旅
霧雨を縫って群がる桜狩り
ていねいに磨く明日も振る尻尾
ハイウエーで山も畑も傷だらけ
パン屑で庭の小鳥がお辞儀する
帰り途変えてイチゴを買い損ね
角餅を拾って家を買った夢
喜びは多くの友に振りまいて

正坊 とし子 石舟 節子 重人 吉之助 柳宏子 泰雄 靖巳 光穂 しげお 諷云児 吟笑 マツエ あきら かおり ひかり まさる 抱楽 放任 坊太郎 治延 輝夫 文仙 いさむ チカエ

マグカップ ペアで買って新婚生活
剝製になっても驚という威圧
奥の手をひたすら磨きホクソ笑む
大いびき夫の疲れを知る計り

川柳塔おとり(前月分) 原みさを報

すり鉢の底で止まっている時間
大砂丘心の栓をぬいてみる
思い出をかくす砂丘に埋めて来る
メロン切る手をしっかりと見つめられ
しっかりとしたお方なら嫁にゆく
土壇場にしっかりと効かす父の釘
年金にしっかりとしがみついている
愛情をしっかりと詰めた握り飯
しっかりと心と心結ばれる
宮さまの疲れシャッター見逃さず
百歳の写真を見れば神に似る
写真には写らぬ影を曳いている
金婚の記念写真はまだ若い
葬式の写真二十も若返り
アルバムに遠い昔を呼び寄せる
思い出の写真夫婦も白髪はえ
お守りのかわりに孫の写真持つ
初節句写真の主役泣き笑い
久々にわたし見つめて指を折る
ややこしい話は膳が済んでから
末娘巣立ちお膳に穴があき
宿題はお膳が机三姉妹
お膳立で偶然役者揃いすぎ

なみ子 よしみ くに子 貞月 羅奈 友子 半量 せつ子 千秋 伝住 登美 清子 多哥由 憧子 雄々 崇弘 義二 庸生 小生 仁子 和子 雅通 ひかり 野草 紀子 舍人

トップに立ち我慢我慢の日を過ごす
深い川杭をさがしにかっぱの親子

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

ミサイルを飛ばしお米を無心する
校則を守りいじめの的にされ

億光年点と同じの寿命かも

元氣よく手だけは挙げる參觀日

愛を説きながら宗派でいがみあう

物知りの大風呂敷がはつれだし

一瞬の出会いで決めて半世紀

雑学に長けて無口の地獄耳

ひと言のセリフが重い初舞台

便利さに浸り公害嘆いてる

束の間の演出をするシャボン玉

矛盾する話を酒で薄められ

待ち侘びた子から一行だけの文

老人会物知り多くまとまらず

無理するなノルマ果せと軽く言う

ふくらみが二人を徐々に親にさせ

井戸端はおばさん達のワイドショー

ご隠居の知恵もホームで風化する

通らない道理に疼く腹の虫

頼らない人と言っては盾にする

ショートカット女が秘める胸の内

一本のひまわり咲かす狭い庭

戦争は平和かちとるためですか

エリートへ父の梯子が届かない
町内を熟知していてこうるさい

吉太郎
キク子

徳三
潮華

道子

笑子

街湖

鈴美

早智

あかり

良子

和可

政勝

為佐子

純子

雅子

嘉信

亜希子

芳江

句多留

絹子

かづ子

八重子

ふみ

かず枝

充子

酔うほどにジョッキの底に湧く矛盾
焼き物を前に蘊蓄かたむける
生命ある限りを蟬は啼きつづけ
惜しいなあいい奴なのになにすぐ怒る

川柳高知

川竹

松風報

毒舌の飛び出す割に情がある

割り切れぬ人生だからドラマです

足して2で割れる仲ではない夫婦

割り切つてあなた任せの風に乗る

割り勘の女見事な箸さばき

真相は割れた茶碗が知っている

初恋を忘れた嘘が通る歳

不景気にダンゴの歌が踊りだし

日の丸を嫌う理由が解らない

まっ直ぐな道口実はありません

付き合いたい口実に妻は負け

忘却を口実にして母元氣

子の帰省毎日に会うプラン

両隣と談話をしたのし袋

口実で覆う地球が病んでいる

口実はもう許されぬ崖つぶち

川柳藤井寺

高田美代子報

ぎこちないランドセル行く一年生

六年の成長刻むランドセル

外国語しっかり聞いてきた靴

出張の靴の底にある浮氣

ブランドの靴に群がるすねかじり

幸々

美々

孝雄

佳風

功

菊野

子龍

和江

圭風

竹萌

テルミ

千恵子

京子

良雄

朱坊

松風

春蘭

よしえ

かつみ

夕花

昌子

ブランドの靴で旅をする熟女
夕焼けを見たことがない塾靴
欲しいばい詰めた靴がかせになる
残り時間いっぱい詰めた旅靴
てっぺんへ登る毛虫の好奇心
チンパンジー鍵穴覗く好奇心
人下から素通り出来る好奇心
途中下車させた私の好奇心
興味ある話へ首を入れておく
好奇心けつまずいたり転んだり
対岸の火の粉かぶつた好奇心
うっかりと深入り過ぎて抜けぬ足
氣の早い鬼がうっかり音頭とる
傷口にうっかり触れた軽い口
うっかりと靴履いてからの忘れ物
ほろ酔いでうっかり本音洩らしかけ
うっかりと差し出したのは裏帳簿
へそくりが水浴びしてた洗濯機
うっかりが落としたりうっかり妻拾う
うっかりと月へカメラを置き忘れ
通り抜け鬱金の桜風を抱く
血圧を下げる薬をのみ忘れ
騙し絵の中で死ぬこと生きていること
神の掌を少しよこしている罪よ

瑠美子
鐘造
婦美枝
扶美代
六点
みよ子
志洋
悦子
和樹
花梢
美代子
恒雄
敦子
アキ
喜代子
史郎
桂子
正一
昭子
利武
末一
宗一
勇太
公輔

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

孫に笑われ決心つかぬ目の手術
咲きはこる牡丹知ってる父の汗
脱サラの決心妻に仄めかし

道子
君江
春子

待ちぼうけまつ毛に重いはたん雪

決心のきつかけはしく易の列

決心の形でバックされた鮎

川岸で自然と遊ぶ万華鏡

風の音思ふ人生一度きり

まだ時間あるじやあないかやり直す

玉音を涙で聞いて半世紀

塩加減亡母を越せないにぎりめし

いかげん手放そうかと下がる地価

灰皿があふれ決心やつとつき

ふん切りをつけた買物晴衣裳

禁煙に決心など大仰な

風呂上がりコップ一杯南無阿弥陀

いけずだが牡丹のような社長秘書

ストレスとうまく付き合いこの元氣

ご馳走に決心にぶるダイエット

立ち呑みを妻に見られて酔いもさめ

決心を真一文字の口で知る

老いてなお十五の決心燃えている

小をすて頭を下げることにする

決心がついたらおなか空いてきた

決心がつかないままにバスが出る

禁煙を何度決心したことか

川柳塔おとり

原みさを報

極楽は命ある今生きる今

極楽は亭主が留守の長電話

コーヒーだ酒だタバコだ極楽だ

極楽と思える今をラップする

孝子	黙光	紀子	伝住	幸枝	隆盛	信子	友甫	朝子	一道	ますみ	トシエ	まさと	いつみ	春江	知佐子	美代子	民子	明	八寿子	宏	剛治	ミツ子	鬼遊
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	----	---	-----	---	----	-----	----

毎日が極楽トンボ髪そめて

極楽へ吹く風にのる鎮魂歌

長寿化で極楽行きも狭き門

煙草 酒うまい毎日極楽だ

名水の恩をわさびは忘れない

お姑がつくるわさびは倍辛い

はなむけの言葉にわさび塗っておく

安曇野のわさび土産に鼻薬

老いてなおわさびを効かす姑さま

ジョークにもわさびを効かす味な人

清水わく里でわさびがよく育ち

清流を好むわさびは効きすぎる

年ごとにわさびが抜けて無事の日々

晩酌の刺身にわさび酔っぱらい

知らぬ間に心にゴミを溜めている

タンスからいい思い出をこみ出す

人間もこみ扱いにする戦

足腰をきたえてごみにならぬよう

ごみ分別みんな上手になりました

代替り家宝もごみの山となり

文化生活ゴミと戦をさせられる

噂話ゴミの袋に詰めて出す

休耕田ゆつくり四季をねむりこけ

和菓子から四季の香りと味もらう

旬の味ハウスの中に四季あふれ

四季咲きのバラを心に植えている

富柳会

池

森子報

母さんは力になれぬと大根干し

夕子	みさを	雅通	由多香	艶子	登美	以和万津	和子	千秋	富貴子	崇	せつ子	ゆきの	小生	義弘	邦昭	舍人	清子	仁子	敬之介	宏章	寛	風花	彰雄	庸々	雄々	道子
----	-----	----	-----	----	----	------	----	----	-----	---	-----	-----	----	----	----	----	----	----	-----	----	---	----	----	----	----	----

ポケットの中味次第に成長し

句読点殺意を抱いている日記

未来図に一輪添える赤い花

年金へまだぶら下がる大きな顔

嘘つけない人の琥珀の沈黙

風抱いて男の駅を一つずつ

ポケットに退職願い持っている

エプロンのポケットに漂白された愛

ポケットに温い思い出ねむらせる

ポケットの札が4-5を買えという

満月に心の鬼が踊り出す

花の名を五つ覚えたい待ち合せ

もうみんな忘れてあげる春景色

リストラはままよと春の観覧車

わき役が決して外さない仮面

老人力だよとてまたのしい竹を踏む

子ほみんな他人に近い半世紀

鏡の中に甘いわたしと眠っている

いつの日か主役を張るという決意

斜線に主張があつた以下余白

ルージエ塗り重ねて愛が渴ききる

わき役がついやりすぎる村芝居

まだ翔べる夢にひたすら水をやり

のんびりと暮らせと言った心電図

ポケットの中でどنگり駆け廻る

ポケットに眼鏡が四つ春の旅

人気だけの男の傍に立っている

ポケットに笑い溢れている一家

未来図をはみだしているころろざし

花梢	欣之	初太郎	三和子	冬虹	昭水	紅紫朗	勇	秋雄	義清	信花	夕博	登子	アキ	美代子	扶美代	由一	一慧	たかし	文子	和子	けい子	春蘭	勝子	東雲	ひろこ	信子	治恵
----	----	-----	-----	----	----	-----	---	----	----	----	----	----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	----

翠洋会

児玉

蛙報

出稼きの赤飯買ったいいニュース

恭昌

買物に出掛けツツジに見とれてる

蛙

武者人形孫そっくりのつぶらな瞳

さと美

世界中核の始末が気にかかり

叔子

ウインドーショッピングして見て歩き

春

武者震いしながらたすき待つアンカー

伽羅

カーテンが風もないのに揺れだした

日の出

横からの風がわたしをよろめかす

凡子

負けぬ気が風も味方にして生きる

澄子

面接日背筋伸ばして武者ぶるい

舞夢

母の病ボーダーライン上下する

久峰

風みどり野暮な話はやめておく

靖巳

言うなればもう買う物は墓地ぐらい

石舟

文庫なら十冊買えるフルコース

正雄

里の土踏めば風まで温かい

志華子

河鹿なく奥入瀬の風さわやかに

会美

買いい物は縮めに伺い立ててから

東雲

真夜中に命縮める煙草買う

宣司

初めてのお使い牛乳重すぎる

千歩

ゼロ一つなければ買える辻が花

絹子

義理の上買わねばならぬ光り物

照子

結局はいちやもんつけて買ってくれ

千梢

危険水域脱して夫婦しています

蕉子

しあわせは風と光の中にいる

鬼遊

岩美川柳会

石谷美恵子報

深謝するポーズままと騙される

單車

深い味うまい味へと塩を足す

大漁

七十歳の笑顔をコピーしておこう

螢

コピーした絵だらう魂入ってない

孝男

三面鏡深みに鬼を飼う女

季芳

深海魚波の怒りは知ってない

静生

ふところの深さにいけば救われる

圭一郎

わたくしが黙っているば吹かぬ風

きみ子

良く吠える犬もエサには弱かった

一夫

深読みをされてリズムが狂い出す

睦子

招待というが手ぶらで行けもせず

蟹郎

良く喋る男みてから自閉症

和歌子

社外秘のコピーが重い刑に遭う

忠良

正論は闇に埋もれたままに朽ち

一京

一枚の招待状にある戦

一瑤

リストラの闇で夜明けを待っている

公乃

雲行きに黙ってお茶を入れかえる

明美

遺伝子のコピー忘れて子を叱る

芳江

招待状出したがやはり来てくれぬ

節子

敬老の日だけ招待されています

裕子

疑えばコピーの文字も揺れて見え

美恵子

堺川柳会

河内

月子報

未来見るとの子もひとみ凜として

春蘭

手さぐりで求め合ってる老夫婦

紀美女

内濠も外濠もない母の城

アキ

八分目求めて蟻の如き歩よ

半銭

未練あり土壇場でまだ離婚せず

ちや子

おらが里世界遺産の城になり

伽羅

わが城主はめておだてて慈なし
女房が城主でわが家平和です
安らぎを求め仏に手を合わせ
雨は漏り風に揺れても僕の城
落城はしません妻のへそくりで
男の料理女の城が荒らされる
今日の靴主の行き先しつてます
道づればどんぐり同士リズム合
暫くは靴を履かず病んでいる
玄関の靴がおどって春休み
身の内の泥吐き出してリラックス
どの窓もふとんがペロを出すお城
大阪城ビルに囲まれぬむうなり
野良犬で生きた誇りが靴にある
お互いに城を褒め合う主婦の声
爽やかな風にサンダル唄いだす
みの虫を真似て小さな城守る
靴音が高い幸せそうすね
送別会ボロ靴履いて出社する
三つ揃いどんぴしゃりだがリリース
内気で自分分の城に閉じこもる
秀吉の城を仰いでいる職場

川柳やがわ

江口

松阪屋少し潤う通り抜け

花だけを写して帰る通り抜け

百花繚乱酔った人吐く通り抜け

八重繚乱不況忘れる通り抜け

乗客が花を活けてる無人駅

日の出

靖雄

梓

柳宏子

楓

千代

冬虹

りつえ

洞庵

かりん

文

天笑

月子

喜代子

東雲

春

美子

つづや

朋月

健吾

哲平

五月

度報

順三

ルイ子

千恵子

時弘

波留吉

— 118 —

柳界展望

大阪川柳の会

とき 8月3日(火) 17時開場 ところ サンケイビル本館3階322号室
 題と選者 損・中尾飛鳥
 △結ぶ 梶原サナエ△感謝・小池しげお△温もり・磯野いさむ 各題2句 席題なし 会費800円
 18時締切 各題秀句に産経新聞社賞

★直原玉青先生が主宰をされて

代南画展が、6月4日から9日まで京阪百貨店守口店で開かれた。不況・リスト

ラなど暗いことが続く世相に、精神的な東洋絵画は多くの人々を魅了した。

★平成10年度川柳塔みちのく年度賞は、田中叶さんに決定した。

★5月9日、しまなみ海道開通記念・汐風社創立50周年記念第45回愛媛川柳研究大会が今治市総合福祉センターで開かれ、本社同人の小島蘭幸氏が総合第一位を獲得して、愛媛県知事賞を汐風川柳社会長和田宏氏から授与された。

★弓削川柳社は麻生路郎師

句碑建立50年記念・第51回西日本川柳大会を9月5日(日)に、久米南町中央公民館で開催する。前日の16時から句碑前で建立50年記念句碑まつりを催す。

★第7回相生市もみじまつり川柳大会は、11月7日午前10時半から相生市総合福祉会館で開催。事前投句は

各題1句 遊ぶ 仲平昌美
 △力 寺尾青豆△実る 濱野奇童 応募料1000円
 9月20日までに相生市旭1-1-3相生市教育委員会生涯学習課川柳係宛。当日出句の題は姿 梶原サナエ 緑 山本ひさる△豊か 福島直球△真実 小松原爽介 各題2句 11時50分締切。

★『川柳新京都』は北川絢一朗代表の死去に伴い、5月発行124号の北川絢一朗追悼号をもって終刊、昭和53年創刊以来21年にわたる歴史の幕を閉じた。

★柳梅寺川柳会は1月発行の『川柳人』800号を最後に名称を変更、2月号から川柳人社となり、代表は



小島蘭幸氏

新同人紹介

門 脇 晶子

薫風・千代・荒介推薦

吉本川柳

第5回 「芝居」 選評 河内 天笑

投句先 4275 大阪市中央区難波千日前11-6

〒50075 吉本文芸館(06-66643-7799)

投句締切 7月10日(便箋に3句以内・80円切手5枚同封)
 没句評句会 7月23日(金) 吉本文芸館

オール川柳誌上コンクール '99

こんにく 鷹野 青鳥選 香る 川上 富湖選

大盛り ちば東北子選 究極 奥 美瓜露選

出汁(だし) 荻原 柳絮選 マンガ 長谷川冬樹選

雑詠 森中恵美子選

◎締切 7月26日(当日消印有効) 2000円

◎所定用紙または市販の原稿用紙に各題2句(未発表作)住所・雅号・年齢・電話番号・性別・所属結社を明記の上、左記へ。

〒556-0003 大阪市浪速区恵美須西2-8-11

葉文館出版内 オール川柳誌上コンクール係

佐藤岳俊氏、誌名『川柳人』はそのまま続ける。

▽人事往來△

■5月9日、しまなみ海道

開通記念・汐風社創立50周

年記念第25回愛媛川柳研究

大会の選者として、薫風主

幹が今治行き。

■5月12日、薫風主幹は鳥

取県の大山上ノ原ヒュッテ

で開催の八木千代句集「椿

守」発刊記念句会に出席。

訃報

大石鶴子さん（柳樽

寺川柳会元主幹・井上

剣花坊息女）は、5月

21日病氣のため死去。

91歳。23日の葬儀には

多数の柳人が参列。



■5月16日、京都市山科の

醍醐寺三寶院の文化講座に

薫風主幹は「川柳のたのし

さ」と題して講演した。

■5月23日、薫風主幹は千

葉市民霊園内若葉斎場で行

われた大石鶴子さんの葬儀

に参列、お見送りした。

▽同人消息△

■芳地狸村参寿は、岸和田

市東ヶ丘会館で絵手紙教室

を開いた。第一金曜日午後

と第三水曜日午前に30名は

どの人が楽しんでゐる。

▽出版版△

■『平成柳多留 第五集』

（社）全日本川柳協会編・A

5判266ページ。第1部

『全日本川柳誌上大会入選

句集 第2部』誌上大会参

加者自選句集 第3部』日

川協加盟柳社推薦句集から

成り、川柳エッセーが収録

されている。1000円。

■恒松町紅参寿は、句画集

『愛たしか』を発刊。A5

判上製本・140ページ。

22ページにわたる色紙・

短冊と川柳300句。素子

夫人の川柳も50余句掲載さ

れている。自序。非売品。

▽御芳志御礼△

■佐藤一粒氏（ふあうすと

大山市）から5月句会出席

の節、金一封を拝受。

■匿名氏から亡夫供養とし

て金一封を拝受。

▼おことわり▲

■5月号『P115（大会

入選作品）上段16行目「う

そつきの女はいない港町」

は本人の申し出により削除

▼訂正とお詫び▲

■6月号『P56（川柳の群

像）下段7行目には「柳壇

」に「わ柳壇及び8行目常

任理事」常任幹事

▼訃報▲

■矢野佳雲氏（同人・今治

市）は5月31日、病氣のた

め死去、82歳。6月1日の

葬儀には柳友多数が参列。

第三回 川柳展望全国大会

とき 8月1日（日）午前10時半開場

ところ 「マリエド・クール空港」（阪急・蛍池 徒歩15分）

お話し 「わたしの見た川柳界現況」 森中恵美子氏

題と選者（各題2句・出句締切正午）

「赤松ますみ」「小さい」 大西 順子

「駅」「久場 征子」「切る」 津田 暹

「火」「なかはられい」「許す」 番野多賀子

「見る」 佐藤 岳俊 「欲」 金築 雨学

自由吟 窪田 久美 自由吟 天根 夢草

（自由吟は各選者に違つ句を出すこと）

講評 高杉 鬼遊氏

質疑応答 選者と出席者 進行・天根夢草

事務局 〒563-0110 大阪府豊能郡豊能町

ときわ台3・4・17 天根夢草

朝日なわ柳壇 片岡つとむ・橋高薫風選

第十集（片岡つとむ先生追悼編）

平成八年一月—平成十年十二月

申込先 〒663-8152

西宮市甲子園町8-2-202 長谷川 淳

頒価 一五〇〇円（送料二〇〇円・二冊三〇〇円）

振込先 大阪市信用金庫西淀川支店229981

郵便小為替でも可 第九集まだ少々あります。

全日本川柳秋田大会開催

第23回全日本川柳秋田大会は、6月13日に秋田県南秋田郡大潟村のサンルール大潟で開かれた。事前投句者1223名、当日出席者404名。大会各賞は、事前投句3題・当日出句4題の各題秀句2句ずつ、計14句のうち、第2次選者によって次のとおり受賞句が決定した。

なお、本社同人の青枝鉄治氏が大会賞に輝いた。

文部大臣獎勵賞

眞実はひとつ何処から撮られても
熊本 渡辺 幸士

参議院議長賞

待っている誰かへドナーカード書く 愛知 仁木 弘悦

川柳大賞

招待のワインに生捕りされそうだ
新潟 山倉 洋子

大
會
賞

欠け茶碗ごろごろ僕はまだ未完

秋田 佐々木康子

真ん中のすっぽんぽんが私です

秋田 西 はじめ

再会は通天閣に決めてある

大阪 波部 白洋

深すぎて父の鑄型を抜け出せぬ
宮城 井熊 玲月

旧姓で肩叩かれた上野駅

長崎 田中 和子

茶碗酒しんから人が好きになる
秋田 草薙 晃

勝者へは新たな敵が待つ輪廻

和歌山 青枝 鉄治

招待席の指輪を値踏みされている
兵 庫 小松原爽介

手話習う両手に愛の火を点す
青森 白取ひでお

結局は自分に習う忍の文字

秋田 伊藤 巖

第六回「さんま川柳」全国誌上大会

課題 「さんま」

○投句 はがき一枚に2句（一人二枚まで）

住所、氏名(柳名)、電話番号を明記のこと

＊募集を何で知ったか付記してください。

○投句先 988-8501

氮仙沼市八日町一丁目一―二

氮仙沼市役所内「さんま川柳大会」係

(電話 〇二二六—二二—六六〇〇番)

○担当 市企画政策課「まちづくり推進係」内線 二〇九番

三月三十一日

○一次選 川柳ナセルぬ妻今土。選考委員会

○二次選
川柳宮城野杜主幹 ちば東北子氏

○発表 九月十日（金）さんま川柳全国誌上大会号で

*大会発表誌希望者は郵便小為替六百元(送料共)を

おえ申し込んでください。

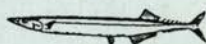
なお、投合を同封する際はハカキ大用紙

入賞70句（特選5句・秀逸10句・佳作35句・吟社賞20句）に生鮮さんま一箱を贈呈（宅送）します。（特選5句には入賞句入り橋も）

・主
催
川
柳
け
せ
ん
ぬ
ま
吟
社

市仙沼市漁食健康都市推進協議會

・後撰
社団法人全日本川柳協会・川柳宮城野社



暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

澤田和重	坂部紀久子	坂口公子	小山太一	桑原道夫	川上富湖	川上大輪	柿花紀美女	小倉アサ	同人	野村太茂津	顧問	牛尾緑良	主幹
中島正博	中後清史	中井栄美子	堂上泰子	富山光代	天満三千代	寺田裕美	垂井千寿子	玉井豊太	谷口信子	田中輝子	杉山精子	芝あつむ	塩谷佐代子
ほか会員一同	横垣忠翁	山田高夫	森三枝子	宮園射月芳	宮口克子	松原寿子	堀端三男	堀富美子	細川稚代	福本英子	福田和子	中村君枝	中田誠子

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良方

TEL 0734-46-2855

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本 義子

創立25周年・「きたぐち」300号記念川柳大会を

11月23日(祝)に開催しますので皆様の御出席

をお待ち申し上げます。

久木菊神亀川門小小奥奥上井井浅秋正黒

保村池原岡見谷倉熊山田田上上野元本川

まさ貴ト 哲絹 た 江美み佳信松房て水紫
さ代ミ 文子子子 藍美子子秋子煙子る客香
お子エ

吉山山牧藤春春林長西西長富住小小黒

田本崎渚村城城 川田口浜山谷林池田

笑義君富メ武年 は春柳 い澄ル石周し能
女子子子女坊代絵蘭子ゑ子子舟信お子

暑中お見舞申し上げます

横浜あおば川柳会

河崎マサ子	金森 徳三	小野 多留	岡田 芳江	巖田 かず枝	伊藤 ふみ	和泉 あかり	石原 三郎	石川 ただお	生坂 サト子	荒井 広和	芦田 鈴美	明渡 トヨ子	秋元 和可	青柳 おぐり	菱田 満秋
長島 亜希子	田中 笑子	高橋 美恵子	平 のぶ子	平 達也	千 木卯	瀬川 数の子	鈴江 純子	清水 潮華	近藤 道子	近藤 歌子	後藤 早智	日下部 美柳士	北沢 街湖	菊地 政勝	川島 良子
吉田 裕峰	吉田 土風	山脇 智恵子	山本 為佐子	山廣 あらた	山梨 雅子	山下 省子	八田 敏	保田 絹子	宮村 ちよ路	三村 八重子	松土 十三子	布山 嘉信	福田 由美子	福島 かづ子	播本 充子

暑中お見舞い申し上げます

翠 洋 会

柴田 英壬子	清水 絹子	小林 周信	児玉 蛙	古今堂 蕉子	黒田 真砂	北田 綾子	奥田 みつ子	岡本 久峰	榎本 舞夢	榎本 日の出	梅田 宣司	上田 佳秋	指宿 千枝子	井上 照子	稲本 凡子	石原 靖巳	高杉 鬼遊	橘高 薫風
渡部 さと美	米田 恭昌	山本 希久子	安永 春	松永 会美	堀江 光子	古川 喜美子	藤井 正雄	西出 楓楽	長浜 澄子	中村 叡子	中澤 伽羅	天正 千梢	寺井 東雲	津村 志華子	谷口 正義	田中 正坊	高杉 千歩	住谷 石舟

暑中お見舞申し上げます

川柳塔まつえ吟社

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方

電話 0852-24-5450

暑中御見舞

サークル 檸檬

暑中お見舞い申し上げます

西宮ローズ川柳会

橘高薫風
秋元てる
飯西ミサヲ
岩倉キク子
奥田みつ子
小倉 藍
亀岡哲子
菊池トミエ
木村貴代子
久保まさお
那賀島雅子
長浜澄子
西口いわゑ
春城武庫坊
春城年代
林 はつ絵
山崎君子
山本義子
吉田笑女

暑中御見舞申し上げます

平成 11 年 盛 夏

川 柳 さ さ や ま 一 同

代 表 遠 山 可 住

暑中お見舞い申し上げます

八 尾 市 民 川 柳 会

会 員 一 同

暑中お見舞い申し上げます

平成11年 盛 夏

川柳塔おおとり

小	原	山	大	岸	岸	近	福	谷	宮	中	有	録	西	福	西	田	山	山	田	松	松	西	原
林	本	本	本	本	本	田	岡	脇	脇	脇	沢	沢	尾	島	村	村	根	岡	岡	本	本	原	原
由	み	幸	宏	孝	佳	登	清	道	伝	せ	風	敬	ゆ	邦	富	紀	仁	義	真	艶			
多	さ	次	章	子	美	子	子	住	子	花	助	二	の	昭	寛	子	子	子	弘	一			

暑中お見舞い

申し上げます

京都塔の会

三	枡	本	山	渡	高	山	山	松	都	松
宅	本	莊	田	辺	沢	口	海	川	倉	川
満	宏	福	葉	圭		美	友	芳	求	杜
子	子	子	子	坊	栄	穂	熙	子	芽	的

暑中お見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-0112 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

暑中お見舞い申し上げます

ほたる川柳同好会

ほか 会員 一同	出	板	栗	池	松	田	藤	嵯	古	前	岡	富	滝	江	月	湯	北	高	田	井	橘
	口	山	田	田	本	中	原	峨	川	田	本	永	北	口	原	浅	村	嶋	辺	上	高
	セ	ま	久	善	た	蛸	桂	保	喜	昭	吉	敞	博	明	方	馬	正	正	直	薫	
	ツ	み	子	守	だ	柳	子	子	美	子	郎	子	史	光	郎	洗	安	勝	三	次	風

定例会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛸池公民館

暑中お見舞

申し上げます

岸和田川柳会

岩佐ダン吉	原 さよ子
島崎富志子	古野ひで
田中文時	寺田甚一
井伊東吉	村垣鹿太郎
井齋一齋	内田一弥
長谷川呂万	善野盛之
堂免路子	加藤 基
原 苑子	宮野美津江
古妻敏光	藪野ケイ子
柿花昭二	徳庄美智子
高須賀金太	芳地狸村

暑中お見舞申し上げます

高田美代子	中島志洋	福元みのる	川端六郎	高津三郎	赤木和子	楠昭子	武部敦子	福田悦子	高田治子	太田扶美代	鴨谷瑠美子	坂本和樹	他一同
-------	------	-------	------	------	------	-----	------	------	------	-------	-------	------	-----

寺井藤川柳

暑中お見舞い申し上げます

らな塔川柳

生 笛 口 宮	代表人世話
弘 柳 農 坊	係会句
昌 恭 田 米	計会
志呂比 原 中	事務局

暑中お見舞い申し上げます

うみなり川柳会

会 員 一 同

鳥取市相生町 3 丁目 204

電話 (0857) 23-4672

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 大 阪

会 員 一 同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

暑 中 お 見 舞

鳥取県川柳作家連盟

事務局 武 田 帆 雀

暑中お見舞

申し上げます

川柳若葉の会

吉田 あずき	山内 香住	宮崎 シマ子	宮崎 弘直	宮本 欣史子	古川 喜美子	辻川 慶子	椎江 清芳	黒田 能子	橘高 薫風
--------	-------	--------	-------	--------	--------	-------	-------	-------	-------

暑中お見舞い申し上げます

富山 ルイ子	奥山 美智子	松川 芳子	竹内 花代子	藤村 〆女	川島 諷云児	小池 しげお	辻川 白溪子	松川 杜的	阿萬 萬的	西田 柳宏子	黒川 紫香	正本 水客
--------	--------	-------	--------	-------	--------	--------	--------	-------	-------	--------	-------	-------

暑中お見舞い

申し上げます

川柳クラブ

わたの花

村上 ミツ子	村上 剛治	大内 朝子	吉村 一風	生嶋 ますみ	榎山 隆盛	二瓶 道子	田中 トシエ	松葉 君江	平川 幸枝	服部 春子	川崎 友甫	高杉 鬼遊
藤本 一道	坂本 寿代	岸本 司	川口 信子	與田 明	砂田 八寿子	井尻 民子	篠原 いつみ	乾 美代子	八倉 知佐子	山本 宏	中島 春江	神原 まさと

南大阪川柳会

会 員 一 同

暑中お見舞

申し上げます

熊本川柳会

有働芳仙

永田俊子

岩切康子

高野宵草

もくせい川柳会

橘高薫風 黒川紫香 安藤寿美子 江口明光 岡本吉太郎 木村一笛 岸田知香子 小池しげお 小林周信 住谷石舟 滝北博史 田中正坊 玉置重人 玉置英子 辻川慶子 西田柳宏子 榎本路児 松本ただし 満仲きく子 宮田肋骨

この7月で結成15周年を迎えます。ご支援に感謝します。

暑中お見舞い申し上げます

夏バテになりませぬように

1999年 盛夏

私たち“川柳塔鹿野みか月”第20回記念大会は
今秋、11月14日（日）に開催をいたしたく、
皆様のご支援を心からお待ち申しております。

※ 詳細はあらためて発表いたしたいと存じます。

川柳塔鹿野みか月

事務局 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原 諷人方
〒689-0405 電話 (0857) 84-2100

暑中お見舞申し上げます

長 柳 会

綱	沢	佐	國	木	木	岸	梶	柏	加	大	大	妹	綱	前	木
木	田	中	仙	虎	村	本	本	本	島	西	垣	背	原	原	太
け	和	茂	谷	良	奈	武	武	靖	由	文	輝	明	俊	正	久
い	子	子	嘉	男	緒	仁	男	子	一	次	子	義	郎	美	正
子			幸		子										一

板	吉	山	山	水	松	松	樋	濱	西	西	西	中	中	寺
尾	川	原	岡	谷	谷	岡	口	野	山	浦	浦	辻	谷	部
岳	泰	輝	富	正	マ	ミ	冬	三	幸	一	久	久	良	
人	子	治	美	子	サ	へ	虹	和	雄	慧	太郎	廬	博	

暑中お見舞い申し上げます

竹原川柳会

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小 島 蘭 幸 方

会 監 会

計 査 長

山 三 古 藤 古 石 岡 森 岩 時 小

内 宅 田 解 谷 原 本 井 本 広 島

房 不 太 静 節 淑 清 菁 笑 一 蘭

子 朽 虚 風 夫 子 水 居 子 路 幸

ほか
会員
一同

暑中お見舞い申し上げます

城北川柳会

会長 吐田 公一

川	川	神	叶	鍛	籠	太	大	大	宇	上	石	池	井	安
端	久	夏	岡	原	島	田	川	内	野	田	塚	田	上	達
一	睦	典	史	千	恵	とし	道	朝	義	登	順	寿	白	は
歩	子	子	風	里	子	子	子	子	江	美	三	美	峰	じ

中	津	都	高	高	鈴	鈴	渋	佐	坂	小	小	栗	喜	岸
田	村	倉	橋	杉	木	木	江	藤	上	糸	泉	山	多	野
あ	志	求	一	千	政	ト	博	和	高	昭	ひ	チ	佐	あ
い	華	芽	枝	歩	子	ヨ	遊	枝	栄	子	さ	津	乃	や
子	子					子					乃			め

森	宮	丸	真	松	松	松	町	本	板	長	橋	野	野	延
杉	井	岡	鍋	本	岡	岡	田	間	東	谷	村	呂	村	山
秀	あ	静	藤	た	千	久	達	満	倫	春	容	右	美	み
夫	き	枝	子	だ	恵	留	子	津	子	蘭	子	近	代	え
	子			し	子	美							子	

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 塔 社

主 幹	橘 高 薫 風
理 事 長	河 内 天 笑
副 主 幹	宮 口 笛 生
副 理 事 長	板 尾 岳 人
常 任 理 事	岩 佐 ダン 吉
	大 内 朝 子
	奥 田 み つ 子
	神 夏 磯 典 子
	河 内 月 子
	高 須 賀 金 太
中 原 比 呂 志	
	米 田 恭 昌
	山 本 希 久 子
	宮 西 弥 生
	宮 崎 シ マ 子
	前 た も つ
	西 口 い わ る
	西 出 楓 樂

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 みちのく	3日(土)午後4時から 七夕・ばれる・ぼつぼつ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8202 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 わかやま	11日(日)午後1時から 差・予定・貫く・「三角」	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 ねやがわ	18日(日) 正 午 から 甘い・勘・包む・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 ふうもん 吟 社	25日(日)午後1時から 俺の番・ズキズキ・足	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
高槻川柳 サークル 卯 の 花	15日(木) 正 午 から 満足・チケット・涼しい・ じわじわ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後1時から 底・吸う・用意・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
はびきの 市 民 会 川 柳 会	25日(日)午後1時から 権利・妬む・ ぬくぬく・「リード」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
東大阪市 川 柳 同 好 会	24日(土)午後6時から 君と僕・変わる・ スランプ・旗	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
富 柳 会	3日(土)午後1時から 奥・低い・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
ほたる 川 柳 同 好 会	13日(火)午後1時から 失 う ・ 傘 ・ 恥	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池駅西へ150米 〒560-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
岬川柳会	18日(日)午後1時半から 互選「流れる」・ 強がり・そっくり	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南 大 阪 川 柳 会	28日(水)午後6時から 邁進・曲がる・摩擦・真心	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
もくせい 川 柳 会	19日(月)午後1時から 部屋・捨てる・ デスク・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
八尾市民 川 柳 会	10日(土)午後6時から 味・軋む・朝顔・ブルー	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

7 月 各 地 句 会 案 内

(50音順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	2日(金)午後1時から 海・階段・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	13日(火)午後1時から 炎 天・水 着・自由吟	尼崎市尾浜公民館 阪急武庫之荘南口から 市バス49番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
岸 和 田 川 柳 会	17日(土)午後1時半から 噂・延期・大入り・書き入れ	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
京 都 塔 の 会	22日(木)午後1時から 向く・原・ぞんざい	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
堺川柳会	8日(木)午後1時から すてき(折句)・ 気合い(共選)・主婦	堺市総合福祉会館 南海高野線堺駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
城 北 川 柳 会	17日(土)午後1時から 立食・ウイंक・ 暗い・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川 柳 会 梨 花	17日(土)午後1時から 透ける・図・クリーム・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3宮木方 坂田和歌子
川柳クラブ わたの花	23日(金)午前10時から 波・好き・秋桜	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川 柳 塔 打 吹	10日(土)午後1時から よれよれ・黒・恋仇	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 唐津支部	4日(日)午後1時半から X・茄子・楽しい・雑詠	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町1-2-13 仁部四郎
川 柳 塔 な ら	1日(木)午後2時から 愛用・山・飽き	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
川 柳 塔 ふ く べ	18日(日)午前10時から 第4回大砂丘川柳大会	砂丘センター 本文P86参照 〒689-0115 鳥取県岩美郡福部村細川16-3 村上信子
川 柳 塔 ま つ え	10日(土)午後1時半から 逆 転・極 楽・旅	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
川 柳 塔 みぞくち	26日(月)午後8時から 包 む ・ 家	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

編集後記

★「柳社とは何か」「何故川柳塔にいいのか」を考へる。柳社には、それぞれ基本理念があるはずだ。

★或る雑誌社から、編集長に聞く「二十世紀の柳誌のあり方」という原稿をもとめられた。新世紀にインターネットが普及しても、紙に書かれた柳誌は存続するであろうし、また存続させなければいけないと思ふ。

★『川柳塔』の基本理念は路郎精神であろう。毎月掲載されている句が全部、いのちある句、人間陶冶の句とは言えないが、目指しているものは同じと思ふ。

★句の形は異なっても底を流れているものは変らないはず。後戻りせず、少しずつでも進歩を求めなければならぬのは言うまでもない。

い。自分を振り返ると冷や汗が出ることだが……。基本理念のないところに結社の意味はない。

★新藤兼人原作・脚本・演出の「午後の遺言状」の舞台を見た。七十歳すぎでなお現役で活躍している大女優。その女優の山荘の管理をしている農婦。女優が若い頃、共演したが能楽師と結婚して、今は老人性痴呆症になった元女優。この六十歳代から七十歳代にかけての三人三様の女性の生き方に深く考えさせられた。

★家庭よりも一生貫き通す仕事を持つこともいい。不倫でも本心に愛し合った人の子を産んで、胸を張って育てるのもよし。お互いに支え合い、信じ合って遂に一緒に死んでゆく。それぞれみな懸命で、いとしく、美しい。生きること、哀しく、素晴らしい。(み)

○辞書を買ひ替えたいが、どれにしようかと迷っていることを、この欄に書いてから三年以上も経ってしまった。

○普段作句するのは、国語辞典(岩波)でほとんど間に合っていた。これは西尾某前主幹の、句碑建立記念品としていただいたもので、とても愛着がある。

○大きさも国語辞典の半分以下になり、句会や校正にも持参しやすい。本と違って音声も出るので、鳥の鳴き声や英語の発音も聴く事で、校正を手伝い始めてから、

役場職員が、まわれ右して私の顔を見詰め、「私はこの課の○○課長ですが、あなたの住所を聞き気が付きました。私の母はあなたの市のあなたの町出身です。この私の顔から、私の母の生家をあてて見て下さい」

二人は堅く握手して、大きな声で笑いくずれた。

ひとこと

縁は異なもの

○○市○○町に住む私が、お隣の○○町役場に用事ができた。

「私の祖父はこの町から参ったお婿さん。母もまたあなたの方の町からお嫁にきました。戸籍は私は○○市○○町でも、血や肉の三分の二はあなたの方の町の人、よろしく願ひ致します」

すぐ近くで立話していた年配の

ら、不都合を感じる事が出来る。時々出るようになった。

○それでもグズグズしていたら、三月に広辞苑五版、ど二百種類余りは、別冊の逆引き広辞苑、漢字、英和、和英辞典がひとつになった

電子辞書が発売されたので早速買い求めた。

○大きさも国語辞典の半分以下になり、句会や校正にも持参しやすい。本と違って音声も出るので、鳥の鳴き声や英語の発音も聴く事で、

役場職員が、まわれ右して私の顔を見詰め、「私はこの課の○○課長ですが、あなたの住所を聞き気が付きました。私の母はあなたの市のあなたの町出身です。この私の顔から、私の母の生家をあてて見て下さい」

二人は堅く握手して、大きな声で笑いくずれた。

(蒔苗 果林)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（9月号）

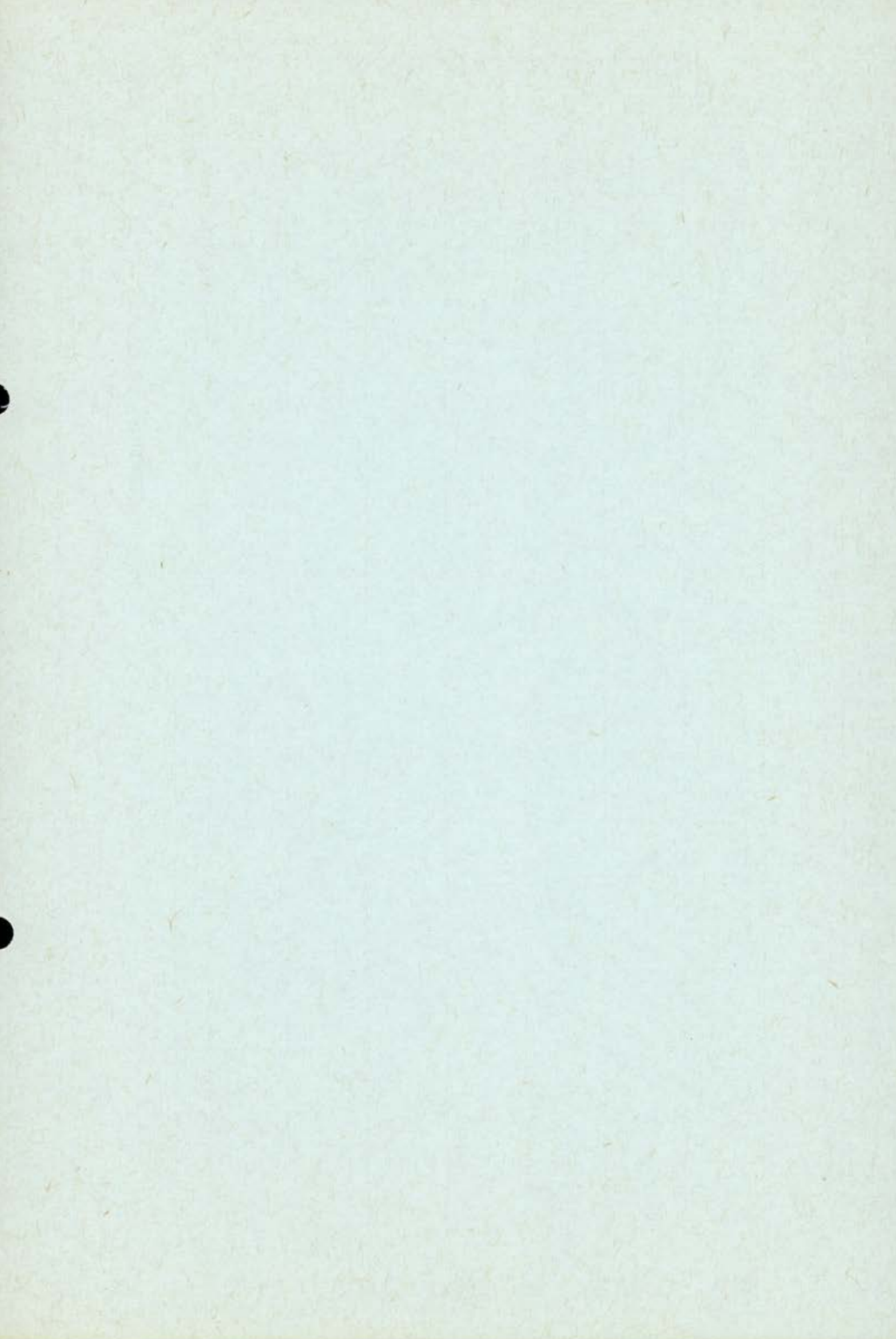
地名

雅号

きりとらせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

9月号発表(7月15日締切)

川柳塔(8句) 橘高薫風選
水煙抄(8句) 河内天笑選
渺湖抄(3句) 八木千代選
茴香の花(3句) 宮西弥生選
課題吟「X(エックス)」 古久保和子選
「楽しい」 岡本花匠選
「地」(3句) 吐田公一担当

10月号 課題吟「西」「住む」「無理」
初歩教室「パワー」

路郎忌 本社7月句会

とき 7月7日(水) 午後5時半
ところ アウリーナ大阪 4階
兼題 「叱る」
「人形」
「酒」
「天才」
「こころ」
席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 500円 投句料 400円
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06・6772・1441

本社8月句会 6日(金) 予定
兼題 「欲」「隠す」「浄土」
「ペン」「いのち」

夜市川柳募集

第2回「館」 福井桂香選
ハガキに3句 7月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

第18年度 夜市川柳

題	選者	締切
③「頭」	鈴木公弘	8月末
④「風」	高田美代子	9月末
⑤「歯」	小林由多香	10月末
⑥「集」	奥田みつ子	11月末
⑦「種」	門脇かずお	12月末
⑧「月」	板野美子	1月末
⑨「鳥」	平山繁夫	2月末
⑩「甘」	杉森節子	3月末
⑪「山」	奥山晴生	4月末
⑫「満」	橘高薫風	5月末

第17回夜市川柳大会は7月31日(土)に堺総合福祉会館で開催します。皆様の御参加をお待ちいたします。

〒545-0005

発行所

川柳塔社

電話(06)交元一六九一四番

振替 〇〇九八〇一五―三三三六八番

定価 六百元(送料84円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百元(同)

平成十一年七月一日発行

編集人 橘高薫

印刷所 美研アート

大阪市阿倍野区三好町一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

麻生路郎師句碑建立50年記念

第51回 西日本川柳大会

とき 平成11年9月5日(日) 午前9時開場

ところ 久米南町中央公民館(JR津山線弓削駅下車)

兼題と選者(出句締切 正午・午後1時半開会)

「偲ぶ」

川柳塔社 橋 高 薫 風 選

「橋」

広島川柳会 石 原 伯 峯 選

「さすが」

時の川柳社 ト 部 晴 美 選

「明日」

川柳塔社 新 家 完 司 選

「石」

川柳「塾」 岡 田 千 茶 選

「雲」

弓削川柳社 大 家 風 太 選

特別課題1題 当日発表 入選句全句に呈賞

兼題は各題2句・特別課題は1句吐

呈 賞 出席者総合成績12位まで。投句者5位まで。

◎投句者は、はがき大用紙に各題毎2句連記、裏面に住所・氏名明記の上、会費(郵便小為替)同封して8月

20日までに弓削川柳社大会係宛に郵送する。

会 費 出席者2000円(昼食・記念品・発表誌呈)

投句者1000円(発表誌呈)

宿 泊 津山市ホテルα1(申し込み期限8月15日)

句碑祭 大会前日、16時から路郎師句碑前において句碑まつり(建立50年記念)を開催します。

主 催 弓削川柳社 〒709-13614

岡山県久米郡久米南町下弓削

岡山県久米郡久米南町下弓削

本のことならご相談を...

- 川柳・俳句・短歌集
- 画集・写真集・絵本
- 社史・小説・エッセー
- 創業・喜寿を祝う記念誌
- 故人を偲ぶ追悼誌
- 郷土誌

図書出版 教育情報出版

〒557-0055 大阪市西成区千本南1-12-8
TEL 06-6658-8741(代) FAX 06-6652-2928